中　学　校

平成 29 年度

研究開発委員会指導資料集

国　語
社　会
数　学
理　科
保健体育
外国語
道　徳

平 成 30 年 3 月

東京都教育委員会

〔　目　次　〕

中学校国語研究開発委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

中学校社会研究開発委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・21

中学校数学研究開発委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・41

中学校理科研究開発委員会・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

中学校保健体育研究開発委員会・・・・・・・・・・・・・・・・81

中学校外国語研究開発委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・101

中学校道徳研究開発委員会　・・・・・・・・・・・・・・・・・121

平成 29 年度研究開発委員会（中学校）名簿　・・・・・・・・・・141

中学校国語研究開発委員会

目　次

Ⅰ　研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅲ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅳ　研究構想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅴ　基礎研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅵ　調査研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

Ⅶ　研究開発・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

Ⅷ　実践事例・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

Ⅸ　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20

〈中学校国語研究開発委員会〉

研究主題

学びの成果を活用する力を育む指導方法の開発
～言葉がもつ価値を実感させる授業実践を通して～

研究の概要

本研究では、「主体的に学習に取り組み、身に付けた学びの成果を自覚的に他の学習や今後の実生活に生かすことができる生徒」を目指す生徒像とし、研究・開発に取り組んだ。

生徒の課題として、目的や必要性を意識して学習に取り組むことができていないこと、学びの成果を他の学習や日常の生活に自覚的に生かすことができていないことが挙げられる。

その要因となる指導上の課題として、生徒に学習の目的や系統性を自覚させて言葉がもつ価値を実感させられる学習活動の設定や、学びの成果を次につなげさせる指導の工夫が十分に行えていないことが考えられる。

そこで、本研究では、生徒が常に学習の目的や系統性を自覚できるような教材の開発と、学びの成果を実感できる場面の意図的・計画的な設定について、協議・検討を行い、授業実践に基づいて検証を行った。上記の目指す生徒像を実現するための指導の在り方について、具体的な手だてを示すことを目的とする研究・開発である。

Ⅰ　研究の目的

生徒一人一人が主体的に学習に取り組み、身に付けた学びの成果を他の学習や今後の実生活に生かすことができる力を育む指導方法を研究・開発する。

Ⅱ　研究の仮説

学びの関連性や系統性が実感できる学習活動に取り組ませることにより、言葉がもつ価値への認識を深めさせることができ、学びの成果を活用する力を育むことができるだろう。

Ⅲ　研究の方法

１　基礎研究

・改訂学習指導要領で求められる国語科で身に付ける資質・能力や指導の在り方の理解
・国語科の指導事項の系統性や実生活などにおける有用性の分析・確認

２　調査研究

・国や都の学力調査や質問紙調査の調査結果の分析
・上記分析から抽出された課題についての生徒への聞き取り調査とその分析

３　開発研究

学びの成果を活用する力を育むためには、「学習の目的や系統性を自覚させる工夫」、「学びの成果が他の場面で生きることを実感させる工夫」、「言葉がもつ価値を実感させる工夫」を取り入れて指導することが有効である。

これらの工夫を具体化するものとして、本研究では、生徒が学習の目的や系統性、他の場面との関連性を常に自覚できるような教材（「学びの系統図」）の開発と、学びの成果を実感できる場面を意図的・計画的に設定した単元構成に取り組み、授業実践を行った。

Ⅳ　研究構想

研究の背景

・学習到達度調査結果（国際学力調査ＰＩＳＡ　平成 24 年・平成 27 年）
・「21 世紀型能力」の提案（国立教育政策研究所　平成 25 年）
・平成 29 年度全国学力・学習状況調査（国立教育政策研究所）
・平成 29 年度「児童・生徒の学力向上を図るための調査」報告書（東京都教育委員会）
・中学校学習指導要領（平成 29 年 3 月公示）
・中学校学習指導要領解説国語編（平成 29 年 6 月）
・中学校学習指導要領解説総則編（平成 29 年 7 月）

研究主題　学びの成果を活用する力を育む指導方法の開発
～言葉がもつ価値を実感させる授業実践を通して～

目指す生徒像　主体的に学習に取り組み、学びの成果を自覚的に他の学習や今後の実生活に生かすことができる生徒

生徒の課題・指導上の課題

生徒の課題
○学びの成果を他の学習や日常の生活に自覚的に生かすことができていない。
○目的や必要性を意識して学習に取り組むことができていない。

指導上の課題
○学びの成果を次につなげる指導の工夫に課題がある。

研究の目的

生徒一人一人が主体的に学習に取り組み、身に付けた学びの成果を他の学習や今後の実生活に生かすことができる力を育む指導方法を研究・開発する。

研究仮説

学ぶ目的や系統性が実感できる学習活動に取り組ませることにより、言葉がもつ価値への認識を深めさせることができ、学びの成果を活用する力を育むことができるだろう。

研究内容

基礎研究
・国語科で身に付ける資質・能力や指導の在り方の理解
・国語科の指導事項の系統性や実生活などにおける有用性の分析・確認

調査研究
・国や都の学力調査や質問紙調査の調査結果の分析
・上記分析から抽出された課題についての生徒への聞き取り調査とその分析

研究の方向
1　学習の目的や系統性を自覚させる工夫
2　学びの成果が他の場面で生きることを実感させる工夫
3　言葉がもつ価値を実感させる授業実践の工夫

開発研究

●「学びの系統図」の開発・活用
生徒が学習の目的や系統性、他の場面との関連性を常に自覚できる教材を開発し、各単元の学習で活用

●「学びを生かす場面」の設定
学びの成果を実感できる（身に付けた力を活用する）場面を単元内に意図的・計画的に設定

Ⅴ　基礎研究

改訂学習指導要領の国語科の目標は、「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」を育成することである。「国語で正確に理解し適切に表現する」ことは、国語科の学習を通じて身に付けた力が発揮されることによって実現する。したがって、「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」とは、国語科における学びの成果を様々な場面において活用する力であると言い換えることができる。

また、目標の(3)（「学びに向かう力、人間性等」に関わる内容）には、「言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う」とある。「言葉がもつ価値」とは、「言葉によって自分の考えを形成したり新しい考えを生み出したりすること、言葉から様々なことを感じたり、感じたことを言葉にしたりすることで心を豊かにすること、言葉を通じて人や社会と関わり自他の存在について理解を深めること」（中学校学習指導要領解説国語編　平成29年６月）といった、言葉がもつ様々な働きのことである。これを認識することは、国語科で身に付けた資質・能力の有用性を自覚することであり、そしてその先に求められるのは、言葉を主体的・意欲的に用いていこうとする態度の育成である。

本研究の研究主題である「学びの成果を活用する力を育む指導方法の開発　～言葉がもつ価値を実感させる指導を通して～」は、このような新学習指導要領で求められる資質・能力の育成を踏まえ、その実現を目指すものとして設定した。

Ⅵ　調査研究

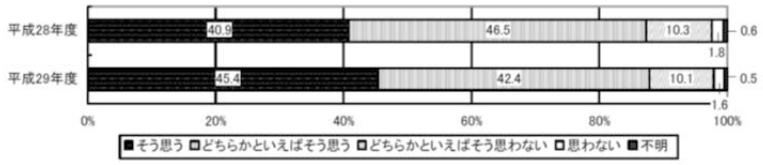
平成27年に実施された国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2015）において、日本の中学生の平均得点は、全参加国・地域（49か国・地域）のうち、数学が５位、理科が２位であり、経年で見ても高い水準にある。その一方で、「数学（理科）を勉強すると、日常生活に役立つ」、「将来、自分が望む仕事につくために、数学（理科）で良い成績をとる必要がある」といった質問に関する肯定的な回答は、いずれも国際平均を大きく下回っている。（文部科学省「国際数学・理科教育動向調査（TIMSS2015）のポイント」より）

この結果から、学びの成果を他の場面で活用することや目的や必要性を意識しながら学習に取り組むことができていない生徒の実態が見えてくる。

同じ平成27年に実施されたＯＥＣＤ生徒の学習到達度調査（PISA2015）の読解力に関する調査の平均得点で、日本は全参加国・地域（72か国・地域）中８位であり、高い水準にあるが、国語を学ぶ目的や必要性、あるいは国語科での学びを他の場面で生かすことについては、同様の課題があると考えられる。

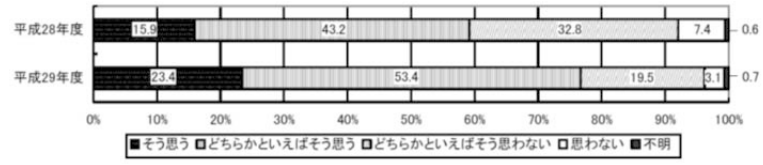
次ページの【資料１】は「児童・生徒の学力向上を図るための調査」（東京都教育委員会　平成29年７月）の調査結果の分析である。この分析によれば、授業の目標（めあて・ねらい）を理解し意識していた生徒ほど、学力調査の平均正答率が高いことが分かる。同様に、学習内容を振り返り身に付いた力を自覚できている生徒ほど、学力調査の平均正答率が高いことも分かる。しかし一方で、「授業の中で目標（めあて・ねらい）を生徒に示す活動を計画的に取り入れている」という質問に対する学校の肯定的回答（学校質問紙調査）が94.4％であるのに対して生徒の肯定的な回答（生徒質問紙調査）が 87.8％、「授業の最後に学習したこと

④ 授業の中で目標（めあて・ねらい）が示されていたと思いますか。



授業の中で、目標が示されていることと平均正答率との関係	平均正答率（%）					
	国語	社会	数学	理科	英語	教科合計
そう思う	74.4	57.3	54.7	57.5	66.3	62.0
どちらかといえばそう思う	72.7	56.1	52.8	56.7	64.6	60.6
どちらかといえばそう思わない	70.2	54.0	51.9	54.9	63.3	58.9
思わない	63.9	47.1	42.4	47.8	53.5	50.9

⑤ 授業では、学習内容を振り返る活動をよく行っていると思いますか。



授業の最後に学習内容を振り返る活動を行うことと平均正答率との関係	平均正答率（%）					
	国語	社会	数学	理科	英語	教科合計
そう思う	73.6	56.3	54.2	57.1	65.8	61.4
どちらかといえばそう思う	73.3	56.7	53.6	56.9	65.5	61.2
どちらかといえばそう思わない	72.9	56.2	53.3	56.6	64.3	60.6
思わない	67.9	51.6	47.5	52.7	58.8	55.7

【資料１】

を振り返る活動を計画的に取り入れた」という質問において、学校の肯定的回答 89.2%に対して生徒の肯定的回答が 76.8%というように、学校の認識と生徒の実感の間には差がある。この差を埋めていくこと、すなわち、学びの目的や系統性を意識させるとともに、身に付けた力が他の場面で生きることを実感させる指導を着実に行うことが、確かな学力の定着につながるはずである。

このことから、本研究では、「学びの目的や系統性が実感できる学習活動に取り組ませることにより、言葉がもつ価値への認識を深めさせることができ、学びの成果を活用する力を育むことができるだろう。」と研究仮説を設定した。

これを受け、生徒に対して「国語の授業で学んだことは、どのような場面で役に立つと思うか」という質問に自由記述で回答させた。回答は以下のようなものであった。

◆国語の授業で学んだことは、どのような場面で役に立つと思いますか。
- ・入試の面接や集団討論など、自分の考えを分かりやすく伝えることが必要な場面
- ・社会に出て仕事で話すときなど、正しい言葉遣いや敬語を使う場面
- ・本や新聞などを読んで内容を理解したり、人の話を聞いて内容を理解したりする場面

約 450 名の生徒のうち、他の教科等との関連に触れていた回答及び「言葉がもつ価値」への認識が認められる回答は、それぞれ１割程度であった。

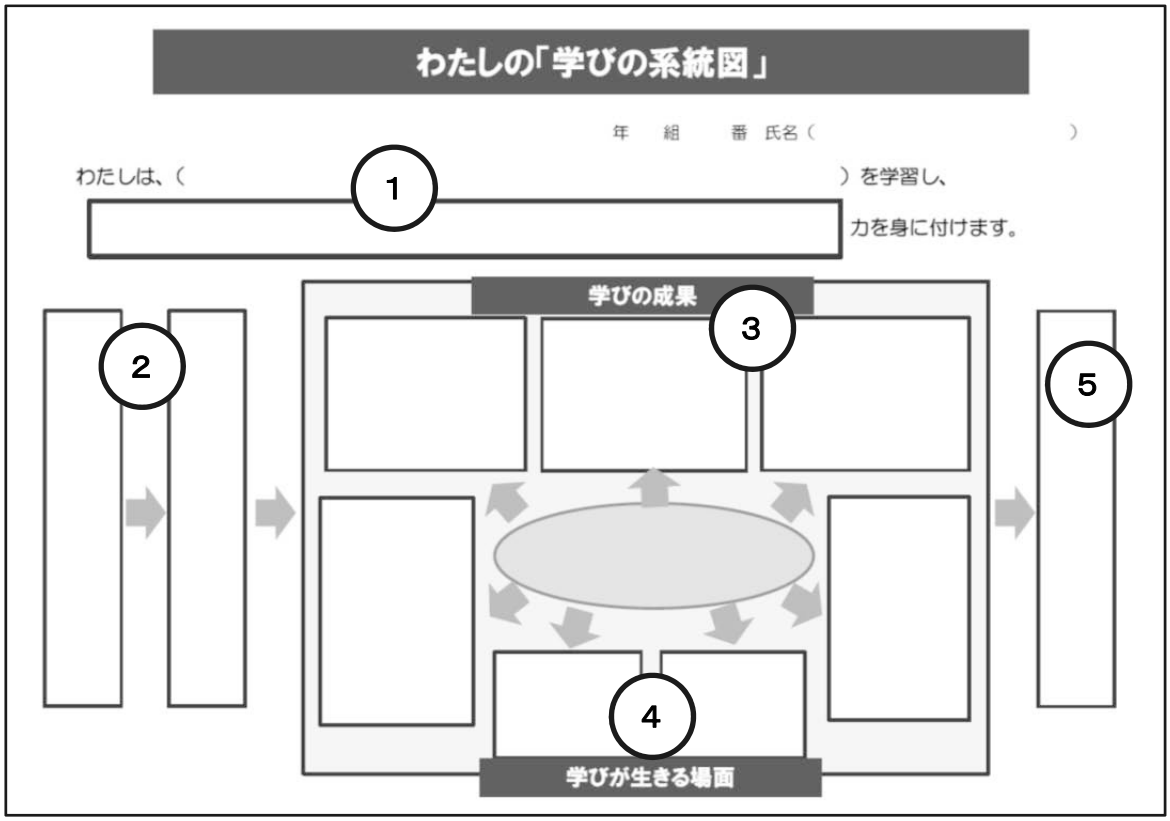
このような生徒の実態を把握した上で、本研究での授業実践によって、生徒の意識がどのように変化したかを検証するため、授業実践後に、以下の項目についてアンケートを実施することとした。

〈検証アンケート〉質問内容
- ・国語の授業のはじめに目標や学習内容を確認し、学習に取り組めましたか。
- ・国語の授業で今まで学習してきた内容を意識して、今度の学習に取り組めましたか。
- ・「学びの系統図」を活用して取り組むことで、自らすすんで学習に臨むことができましたか。
- ・国語の授業で学習したことで、他の教科や将来社会に出たときに役立つ力が身に付いたと思いますか。
- ・今後、国語の授業で身に付けた力を意識しながら言葉を使っていこうと思いますか。

Ⅶ　開発研究

１　「学びの系統図」の開発・活用

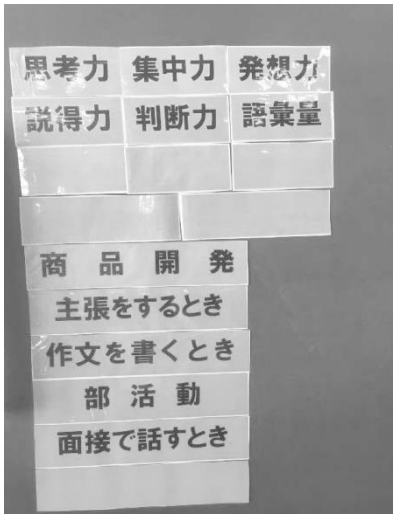
授業において、生徒が学習の目的や系統性、他の場面との関連性を常に自覚できるようにするための教材として、「学びの系統図」を開発し、各単元の学習で活用した。



「学びの系統図」

「学びの系統図」活用の手順

① 単元名（教材名）と学習目標を「身に付ける力」として記入させ、意識させる。
② 同じ領域の既習事項を振り返らせ、どのような力を身に付けてきたかを意識させる。
③ 「学びの成果」として、身に付けた力を記入させ、自覚を深めさせる。
④ 「学びが生きる場面」として、身に付けた力を活用できる様々な場面を想起させる。
⑤ 今後の関連学習内容を確認させ、学習の見通しをもたせる。



学びの成果カード

この「学びの系統図」を各自ノートに貼らせ、常に記入・確認できるようにした。この教材の活用により、既習事項を現在の学習と関連付けたり、現在の学習と今後の学習内容とのつながりに対する見通しをもったりするなど、国語科の学習内容の系統性を意識させながら学習に取り組ませることが可能となると考えた。また、学びが生きる場面を多様に想起させることで、目的意識や課題意識をもって学習に臨ませることができるようになる。生徒に「今、何を学ぶのか」、「何のために学ぶのか」を常に意識させることで、主体的な学習態度の育成につながる指導が可能になるはずである。

さらに、生徒から出てきた「身に付けた力」や「学びが生きる場面」などを「学びの成果カード」としてカード化して蓄積・掲示していき、他の単元等において活用したり生徒に繰り返し意識させたりできるようにし、「学びの系統図」の効果をより一層高められるよう工夫した。

2　「学びを生かす場面」の設定

身に付けた力を活用することで学びの成果を実感できる場面を、単元の中に意図的・計画的に設定した。

本研究では、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」のそれぞれの単元の授業実践を行った。各単元において、「学びの系統図」を活用しながら身に付ける力を明確に意識させるとともに、その力を活用する場面を設定することで効果的に学びの成果を実感させることができる。その実感が、身に付けた力を様々な場面において活用していくために必要な技能や応用力、意欲等の育成につながると考えた。

各指導事例において「学びを生かす場面」を以下のように設定した。

●　指導事例１　第１学年「話すこと・聞くこと」

単元名「なりきりインタビュー　～相手を受け止める聞き手になろう～」

第１時	第２時〈生かす〉	第３時〈見通す〉
「よりよい聞き方」について考え、テーマに沿って話し合い、理解を深める。	**学んだことを活用**して「なりきりインタビュー」に取り組み、**学びの成果を実感**する。	「なりきりインタビュー」をもとに、「モノ・コラム」を書く。 →「書くこと」の学習へ

●　指導事例２　第２学年「書くこと」

単元名「確かな情報を発信する　～根拠を明確にして意見文を書こう～」

第１時	第２時	第３時
複数の文章を読み、「説得力のある意見文」を書くためのポイントを捉える。	自分で決めたテーマについて、意見文を書くための材料を集め、整理する。	集めた材料を基に、自分で決めたテーマについて、説得力のある意見文を書く。

第４時	第５時〈生かす〉〈見通す〉
グループで交流し、互いの意見文から根拠の示し方や説得力について学ぶ。	ペアになり、**学んだことを活用**して、相手の意見文に対する意見を書き、交流して**学びの成果を実感**する。→「読むこと」の学習へ

●　指導事例３　第２学年「読むこと」

単元名「書くために読む　～文章の構成や展開を読み取り、自分の力にしよう～」

第１時	第２時	第３時〈生かす〉	第4時〈生かす〉〈見通す〉
「文化」について述べた文章について、段落相互の関係を捉えて整理しながら筆者の意見・考えを読み取る。	文章の構成や展開に着目し、意見・考えを述べるためにどのような工夫がなされているかを捉える。	**学んだことを活用**して、１年時に書いた意見文を構成や展開に工夫をして書き直し、**学びの成果を実感**する。	**学んだことを活用**して「文化」について述べた別の文章を、構成や展開の工夫に着目して読み、**学びの成果を実感**する。 →「書くこと」の学習へ

Ⅷ　実践事例

【指導事例１】　第１学年「話すこと・聞くこと」

１　単元名　「なりきりインタビュー　～相手を受け止める聞き手になろう～」

２　単元の指導目標

(1)　必要に応じて質問しながら聞き取り、自分の考えとの共通点や相違点を整理する。(第1学年　A　話すこと・聞くこと(1)エ)

(2)　話合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめる。(第1学年　A　話すこと・聞くこと(1)オ)

(3)　音声の働きや仕組みについて関心をもち、理解を深める。(第1学年　伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)イ(ｱ))

３　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す・聞く能力	言語についての知識・理解・技能
①　単元で身に付けるべき力を理解し、主体的に学習活動に取り組んでいる。 ②　単元で身に付ける力が他のどのような場面で生きるかを意識し、実生活での活用を想起しながら学習活動に取り組んでいる。	①　「よりよい聞き手」に必要な要素について理解し、その要素を活用しながら、相手の話を聞き取ったり話合いに参加したりできる。 ②　話を聞きながら自分の考えをまとめたり、相手から情報を引き出すために質問や話題を考えながら話したりすることができる。	①　相手から情報を引き出したり話し合いを進展させたりするための言葉の使い方や話し方について理解し、実践することができている。

研究主題に関わる評価の視点
●　言葉がもつ価値を実感することができている。 ●　学びの成果を活用する力を身に付けることができている。

４　研究主題に迫るための手だて

(1)　「学びの系統図」の活用

ア　「よりよい聞き方を意識し、話し手の思いや考えを受け止め、共感的に話を聞く力」を「身に付ける力」として記入させ、常に意識させる。**【学習の目的の自覚】**

イ　「話すこと・聞くこと」の既習事項を振り返らせ、特に「聞くこと」や「話し合うこと」に関して身に付けてきた力を意識させる。**【学習の系統性の自覚】**

ウ　「学びの成果」として、特に「聞くこと」や「話し合うこと」に関して身に付けた力を記入させ、自覚を深めさせる。**【言葉のもつ価値の実感】**

エ　「学びが生きる場面」として、身に付けた力を活用できる様々な場面を具体的に想起させる。**【学びが他の場面で生きることの実感】**

オ　次の学習単元である「意見文を書く」学習や、次学期の「話すこと・聞くこと」の単元で学習する内容を確認させ、学習の見通しをもたせる。**【学習の系統性の自覚】**

(2)　「学びを生かす場面」の設定

「よりよい聞き方」について考え、実際にテーマに沿って話し合う中で学びを深めた後に、学びを生かす場面として言語活動「なりきりインタビュー」を設定する。

5　単元の指導計画（３時間扱い）

時	主な学習活動	「学びの系統図」の活用
1	・「よりよい聞き手」に必要な要素を考える。 ・要素を意識しながらテーマ「よりよい学校にするためにできること」についてグループで話し合う。 ・話合いを振り返り、「よりよい聞き手」に必要な要素について理解を深める。	〈学びの系統図〉 ①身に付ける力の確認 ②既習事項の振り返り ③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起
2	〈学びを生かす場面〉 ・学んだことを活用して「なりきりインタビュー」に取り組む。 ・インタビューを振り返り、言葉がもつ価値への認識を深める。	〈学びの系統図〉 ①身に付ける力の確認 ③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起
3	・「なりきりインタビュー」で聞き取ったことを基に、「モノ・コラム」を書く。 ・「モノ・コラム」を交流し、学びの成果を確認する。 ・単元の学習を振り返り、今後の学習への見通しをもつ。	〈学びの系統図〉 ①身に付ける力の確認 ③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起 ⑤今後の学習への見通し

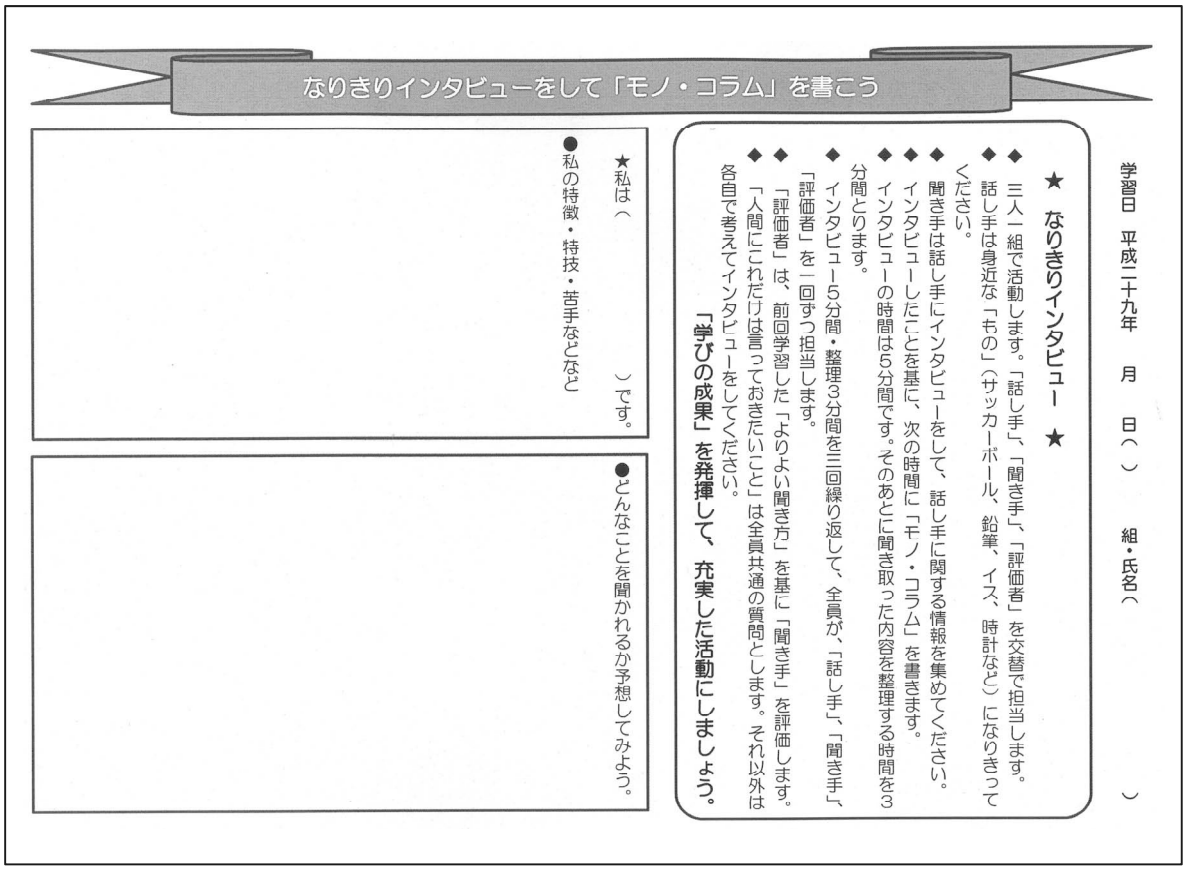
6　〈学びを生かす場面〉の指導（第２時）

(1)　本時の目標

「よりよい聞き手」について学習したことを活用して言語活動に取り組み、学びの成果を実感することを通して、言葉がもつ価値への認識を深める。

(2)　展開

	主な学習活動	○指導上の留意点　●評価規準・評価方法 ◆研究主題に迫るための手だて
導入	1　単元の目標と本時のねらいを確認する。 2　前時に学習した「よりよい聞き方」の要素を振り返る。	◆「学びの系統図」を活用する。 ○前時に活用したワークシートで振り返らせる。
展開	**身に付けた力を活用し、学びの成果を実感する**	
	3　「なりきりインタビュー」に取り組む。 (1)活動の内容と手順を理解する。	○活動の内容と手順を説明する。 ◆前時の学習を生かすことを意識させる。(「学びの系統図」)
	(2)インタビューの準備をする。 ・自分が何になるかを決める。 ・想定質問と回答を考える。	●話す・聞く②（ワークシート）
	(3)グループで活動に取り組む。 ・インタビュー５分間・まとめ３分間 ・３回繰り返し	○三人一組をグループにする。話し手、聞き手、評価者を交替で担当させる。 ○評価者は聞き手について評価させる。 ●関・意・態①（観察） ●話す・聞く①②（観察・ワークシート） ●言語①（観察・ワークシート）
	(4)活動を振り返る。	◆言葉のもつ価値を実感させる。(「学びの系統図」)
まとめ	4　ここまでの単元の学習を振り返り、次時の学習への見通しをもつ。	◆学びの成果を確認させる。学びが生きる場面を想起させる。(「学びの系統図」) ●関・意・態②（「学びの系統図」）



「なりきりインタビュー」ワークシート

〈生徒の活動例〉なりきりインタビュー

※**【工夫・○○】**は第１時で学んだ「よりよい聞き手」に必要な要素

Ｓ１　こんにちは。あなたは、どなたですか。

Ｓ２　こんにちは。私は冷蔵庫です。

Ｓ１　冷蔵庫さん、いつもお世話になっています。冷蔵庫さんが冷蔵庫をされていてうれしいことはなんですか。

Ｓ２　そうですね。私が保存してきた野菜や魚やお肉が、おいしい料理になっていくことがうれしいです。

Ｓ１　おいしい料理になることですか。**【工夫・復唱】**　なるほど、それはうれしいですよね。**【工夫・共感】**では、ふだん困っていらっしゃることはありますか。

Ｓ２　賞味期限切れの物を入れっぱなしにされていると困りますね。

Ｓ１　なぜ賞味期限切れの物を入れっぱなしにされていると困るのですか。**【工夫・確認】**

Ｓ２　私の中にどんどん悪臭がたまっていって、他の食べ物にそのニオイが移ってしまうんですよ。せっかくの新鮮な材料にニオイがついてしまって悲しくなります。

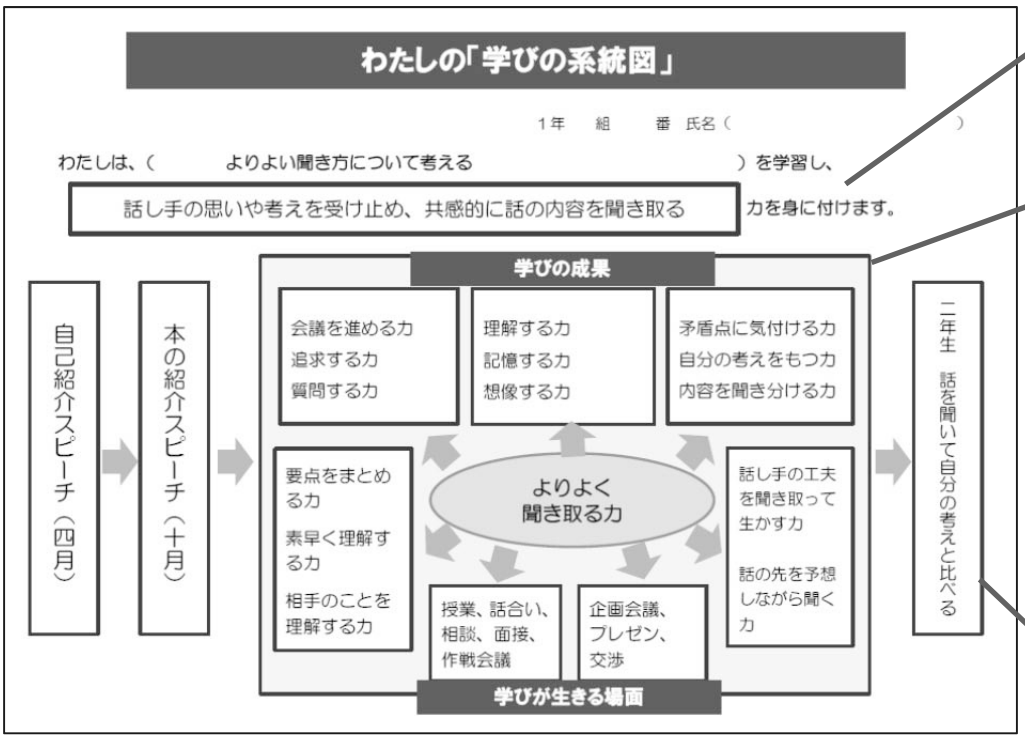
Ｓ１　それは確かに悲しいことですよね。**【工夫・共感】**

（中略）

Ｓ１　では、最後の質問です。冷蔵庫さんの「人間にこれだけは言っておきたいこと」はなんでしょうか。

Ｓ２　私は食べ物や飲み物をおいしく保存するのが仕事です。食べないまま腐らせてしまうなど食べ物を粗末にしないで、おいしく食べてください。

Ｓ１　そのお気持ちよく分かります。**【工夫・共感】**本日は、ありがとうございました。



「学びの系統図」

7　指導の結果と考察

(1)　「学びの系統図」の活用

「学びの系統図」を活用したことで、この単元で身に付ける力を生徒一人一人に常に意識させることができた。また、教師もそのねらいからそれることのないよう、学習活動や授業展開を常に見直しながら指導にあたることができた。

また、既習事項である「自己紹介スピーチ」や「本の紹介スピーチ」を「聞くこと」の視点から振り返らせることで、自分自身の聞き方や聞く力についての課題を客観的に捉えさせた上で単元の学習に取り組ませることができた。

「学びの成果」や「学びが生きる場面」の欄は、毎時間、授業の振り返りで活用し、新たに気付いたことを追記させた。「よりよく聞き取る力」から「話の先を予想する力」や「プレゼンテーション」などへの広がりやつながりを自覚させることができ、生徒の意欲や主体的に学習に取り組む態度を喚起することができた。

(2)　「学びを生かす場面」の設定

多くの指導では、本単元の第１時のように、具体的な言語活動に取り組ませる中で、復唱や共感、確認といった「よりよく聞く技能」を学ばせて学習を終えるが、本単元では「学びを生かす場面」として第２時に「なりきりインタビュー」を設定した。

例えば相手の言葉を復唱して話を先に進めるという工夫についても、第１時の話合い活動では形式的にぎこちなく復唱している生徒が多かったが、第２時の「なりきりインタビュー」では、より自然に復唱しながらインタビューを進めている生徒が多く見られた。また、聞き手と話し手をそれぞれ経験させたことで、共感的に聞いてくれることのよさを実感させることができた。授業後の振り返り（ワークシート）でも、「自分の聞き方によって相手の気持ちや心理が変わることに気付いた」など、言葉のもつ価値への自覚が深まったことが確認できる記述が多く認められた。

【指導事例２】　第２学年「書くこと」

１　単元名　「確かな情報を発信する　～根拠を明確にして意見文を書こう～」

２　単元の指導目標

(1)　自分の立場及び伝えたい事実や事柄を明確にして、文章の構成を工夫する。(第2学年　B　書くこと(1)イ)

(2)　事実や事柄、意見や心情が相手に効果的に伝わるように、説明や具体例を加えたり、描写を工夫したりして書く。(第2学年　B　書くこと(1)ウ)

(3)　相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解する。(第2学年　伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)イ(オ))

３　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	書く能力	言語についての知識・理解・技能
①　単元で身に付けるべき力を理解し、主体的に学習活動に取り組んでいる。 ②　単元で身に付ける力が他のどのような場面で生きるかを意識し、実生活での活用を想起しながら学習活動に取り組んでいる。	①　伝えたい事柄を明確にし、根拠の示し方を工夫しながら意見文を書くことができる。 ②　文章を読んだり書いた文章を互いに交流させたりする中で、より効果的な説明や具体例の示し方について理解を深め、説得力のある意見文を書くことができる。	①　文章を読んだり書いた文章を互いに交流させたりする中で、説得力のある文章で自分の考えを伝えるための文章の形態や展開について理解し、実践することができている。

研究主題に関わる評価の視点
●　言葉がもつ価値を実感することができている。 ●　学びの成果を活用する力を身に付けることができている。

４　研究主題に迫るための手だて

(1)　「学びの系統図」の活用

ア　「自分の考えを、説明の仕方や具体例の示し方を工夫し、根拠を明確にして、説得力がある文章で伝える力」として記入させ、常に意識させる。**【学習の目的の自覚】**

イ　「書くこと」の既習事項を振り返らせ、特に「構成」や「展開」に関して身に付けてきた力を意識させる。**【学習の系統性の自覚】**

ウ　「学びの成果」として、特に「根拠を明確にして書くこと」に関して身に付けた力を記入させ、自覚を深めさせる。**【言葉のもつ価値の実感】**

エ　「学びが生きる場面」として、身に付けた力を活用できる様々な場面を具体的に想起させる。**【学びが他の場面で生きることの実感】**

オ　次の学習単元である「説明的文章を読む」学習や、次学期の「書くこと」の単元で学習する内容を確認させ、学習の見通しをもたせる。**【学習の系統性の自覚】**

(2)　「学びを生かす場面」の設定

複数の文章を読んだり実際に自分で意見文を書いたりすることを通して、「根拠を明確にして文章を書くこと」について学びを深めた後に、学びを生かす場面として言語活動「意見文に対する意見を書く」を設定する。

5　単元の指導計画（５時間扱い）

時	主な学習活動	「学びの系統図」の活用
1	・複数の文章を読んで、「説得力のある意見文」を書くためのポイントについて理解を深める。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　②既習事項の振り返り ③学びの成果の確認　　④学びが生きる場面の想起
2	・「同世代のみんなに伝えたいこと」というテーマについて、材料を集め、整理し、考えをまとめる。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起
3	・自分で決めたテーマについて、「ポイント」を生かして説得力のある意見文を書く。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起　⑤今後の学習への見通し
4	・グループで交流し、互いの意見文から根拠の示し方や説得力について学ぶ。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起　⑤今後の学習への見通し
5	**〈学びを生かす場面〉** ・ペアになり、学んだことを活用して、相手の意見文に対する意見を書く。 ・交流して学びの成果を実感する。 ・今後の学習への見通しをもつ。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起　⑤今後の学習への見通し

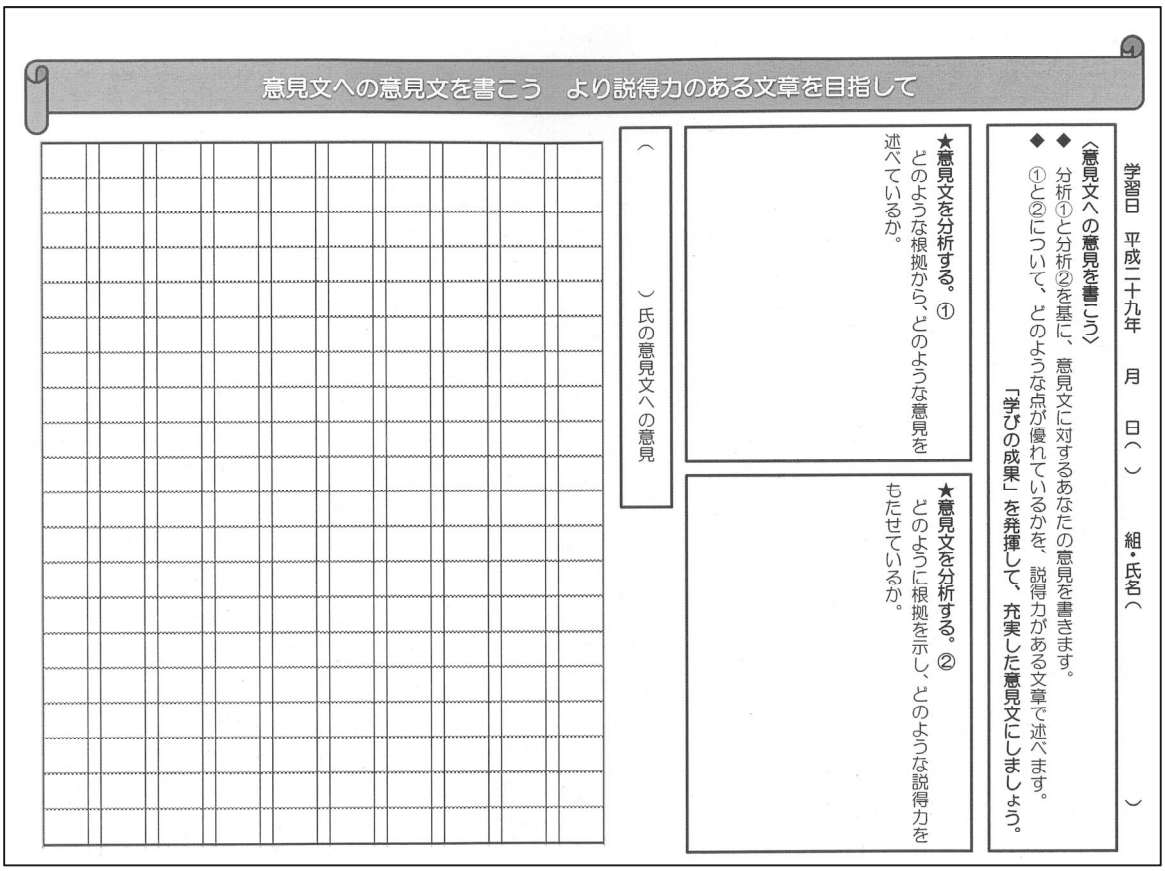
6　〈学びを生かす場面〉の指導（第５時）

(1)　本時の目標

「説得力のある文章を書くこと」について学習したことを活用して言語活動に取り組み、学びの成果を実感することを通して、言葉がもつ価値への認識を深める。

(2)　展開

	主な学習活動	○指導上の留意点　●評価規準・評価方法 ◆研究主題に迫るための手だて
導入	1　単元の目標と本時のねらいを確認する。 2　前時までに学習した「説得力のある意見文」を書くためのポイントを振り返る。	**◆「学びの系統図」を活用する。** ○前時までに活用したワークシートで振り返らせる。
展開	**身に付けた力を活用し、学びの成果を実感する**	
	3　「意見文への意見を書こう」に取り組む。 (1)相手の意見文を分析する。 ・意見と根拠を分析する。 ・根拠の示し方や説得力を分析する。	○活動の内容と手順を説明する。 ○二人一組で取り組ませる。 **◆前時までの学習を生かすことを意識させる。(「学びの系統図」)**
	(2)「意見文への意見」を書く。	●書く①（ワークシート） ●言語①（ワークシート）
	(3)「意見文への意見」を交流する。	○互いの「意見文への意見」を読み合い、評価させる。 ●関・意・態①（観察） ●書く②（観察・ワークシート）
	(4)活動を振り返る。	**◆言葉のもつ価値を実感させる。(「学びの系統図」)**
まとめ	4　ここまでの単元の学習を振り返り、今後の学習への見通しをもつ。	**◆学びの成果を確認させる。学びが生きる場面を想起させる。(「学びの系統図」)** ●関・意・態②（「学びの系統図」）



「意見文への意見を書こう」ワークシート

〈生徒の活動例〉意見文への意見を書こう

Ｓ１（「『Mottainai』の心を大切に」というテーマで書かれた意見文に対して）

ノーベル平和賞を受賞したケニアのワンガリ・マータイさんの活動に触れながら、日本人がずっと大切にしてきた「もったいない」の心を改めて見直そうと呼びかける●●さんの意見文は、ゴミの問題も取り上げながら強いメッセージを伝えています。

「確かにゴミは減っているかもしれない。でも、『もったいない』の心はどうでしょうか。」という●●さんの言葉に、大切なものをちゃんと大切にしていかなければと強く思いました。

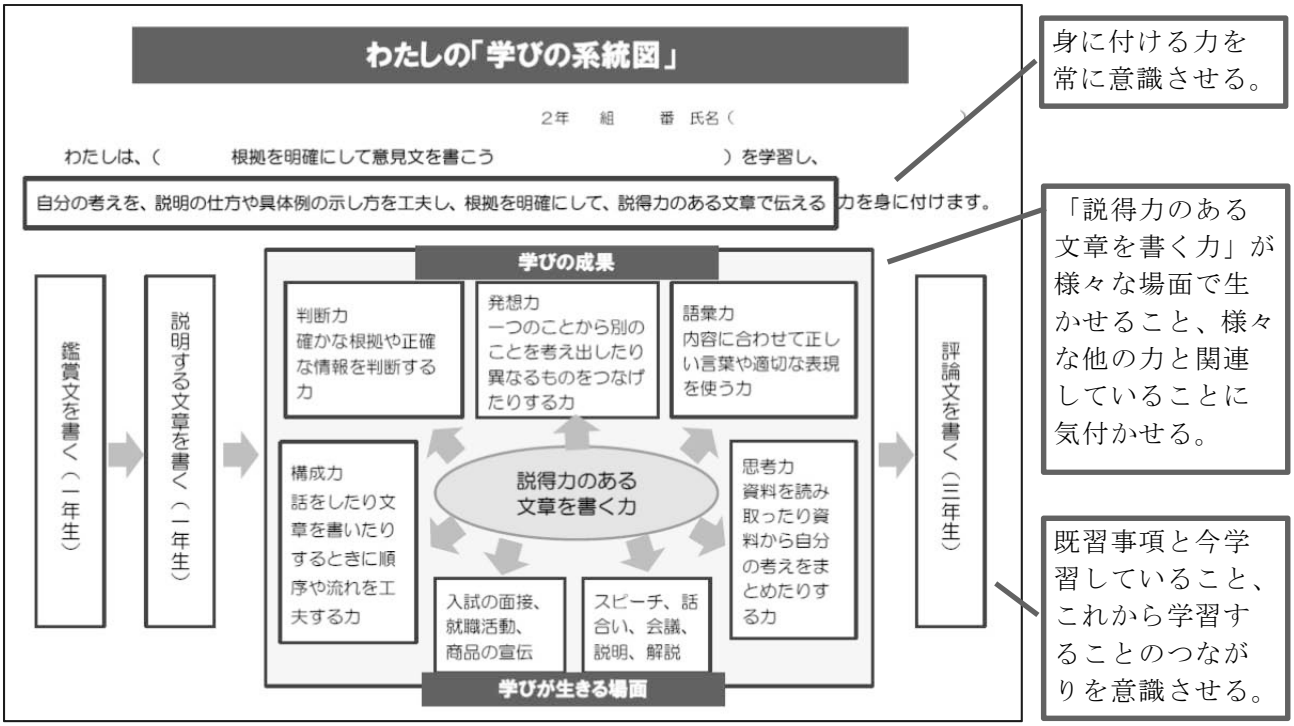
Ｓ２（「お笑い番組を観よう」というテーマで書かれた意見文に対して）

はじめはふざけているのかと思ったが、読んでいくうちに、深く納得してしまった。今は、僕もお笑い番組をみんなに勧めたい気分だ。

▲▲君は、「笑うと免疫力がアップする」など、笑いと健康との関係について、様々なデータを使って説明している。「お笑い番組を観る→元気になる」という意見は、シンプルだがとても説得力がある。

「笑えば人は元気になれる。」という▲▲君の言葉に従って、僕もお笑い番組を観ようと思う。

※　実際の指導の際には、相手の意見文の一部を引用することを共通の課題とした。



「学びの系統図」

7　指導の結果と考察

(1)　「学びの系統図」の活用

「学びの系統図」を活用したことで、この単元で身に付ける力を生徒一人一人に常に意識させることができた。また、教師もそのねらいからそれることのないよう、学習活動や授業展開を常に見直しながら指導にあたることができた。

また、既習事項である「鑑賞文を書く」や「説明する文章を書く」（共に１年次）を「説得力のある文章を書く」という視点から振り返らせることで、材料の用い方や効果的な文章構成について課題意識をもって単元の学習の取り組ませることができた。

「学びの成果」の欄は、生徒から出てきた「判断力」、「構成力」といった言葉について、それがどのような力であるかをより具体的に捉えさせるようにした。また、「学びが生きる場面」の欄では、多くの生徒が、「説得力のある文章を書く力」が、文章を書くことだけにとどまらず、話したり話し合ったりする際にも生きる力であることに気付くことができていた。

(2)　「学びを生かす場面」の設定

意見文を書かせ、交流し、相互評価して単元を終える展開が一般的だが、本単元では、「学びを生かす場面」として「意見文への意見を書こう」という言語活動を設定した。

単元の中心となる意見文については、自分で設定したテーマについて調べる時間や集めた材料を整理する時間を取ったが、「学びを生かす場面」では、相手の意見文だけを根拠とし、それについての意見を工夫して書くことに焦点化した。「相手の意見文の一部を引用すること」、「200 字以内で書くこと」と条件を設定したことで、工夫やその効果の比較がしやすくなり、交流活動も効果的な学び合いの場となった。

授業後の振り返り（ワークシート）でも、「同じ意見であっても、何を基にどう書くかによって伝わり方が大きく変わることが分かった。」などの記述が多く見られた。

【指導事例３】　第２学年「読むこと」

１　単元名　「書くために読む　～文章の構成や展開を読み取り、自分の力にしよう～」

２　単元の指導目標

(1)　文章全体と部分との関係、例示や描写の効果、登場人物の言動の意味などを考え、内容の理解に役立てる。(第2学年　C　読むこと(1)イ)

(2)　文章の構成や展開、表現の仕方について、根拠を明確にして自分の考えをまとめる。(第2学年　C　読むこと(1)ウ)

(3)　相手や目的に応じて、話や文章の形態や展開に違いがあることを理解する。(第2学年　伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項(1)イ(オ))

３　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	読む能力	言語についての知識・理解・技能
①　単元で身に付けるべき力を理解し、主体的に学習活動に取り組んでいる。 ②　単元で身に付ける力が他のどのような場面で生きるかを意識し、実生活での活用を想起しながら学習活動に取り組んでいる。	①　文章全体と部分との関係や例示の仕方などに着目しながら文章を読み、筆者の意見・考えとその伝え方の工夫を読み取ることができる。 ②　文章の構成や展開の工夫を読み取り、その効果を捉えることができる。	①　文章を読んだり書いた文章を互いに交流させたりする中で、目的に応じた効果的な文章の構成や展開について理解し、実践することができている。

研究主題に関わる評価の視点
●　言葉がもつ価値を実感することができている。 ●　学びの成果を活用する力を身に付けることができている。

４　研究主題に迫るための手だて

(1)　「学びの系統図」の活用

ア　「文章の構成や展開の工夫を読み取る力」として記入させ、常に意識させる。**【学習の目的の自覚】**

イ　「読むこと」の既習事項を振り返らせ、特に「構成」や「展開」に関して身に付けてきた力を意識させる。**【学習の系統性の自覚】**

ウ　「学びの成果」として、特に「文章の構成や展開の工夫を読み取ること」に関して身に付けた力を記入させ、自覚を深めさせる。**【言葉のもつ価値の実感】**

エ　「学びが生きる場面」として、身に付けた力を活用できる様々な場面を具体的に想起させる。**【学びが他の場面で生きることの実感】**

オ　次の学習単元である「評論文を書く」学習や、次学期の「読むこと」の単元で学習する内容を確認させ、学習の見通しをもたせる。**【学習の系統性の自覚】**

(2)　「学びを生かす場面」の設定

「文化」について述べた文章について、文章の構成や展開に着目し、意見・考えを述べるための工夫について学びを深めた後に、学びを生かす場面として、「１年時に書いた意見文を構成や展開に工夫して書き直す」活動と、「文化について述べた別の文章を構成や展開に工夫に着目して読み、はじめの文章と比較する」活動を設定する。

５　単元の指導計画（４時間扱い）

時	主な学習活動	「学びの系統図」の活用
1	・「文化」について述べた文章について、段落相互の関係を捉えて整理しながら筆者の意見・考えを読み取る。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　②既習事項の振り返り ③学びの成果の確認　　④学びが生きる場面の想起
2	・文章の構成や展開に着目し、意見・考えを述べるためにどのような工夫がなされているかを捉える。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起
3	**〈学びを生かす場面①〉** ・１年時に書いた意見文を構成や展開に工夫をして書き直し、学びの成果を実感する。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起　⑤今後の学習への見通し
4	**〈学びを生かす場面②〉** ・「文化」について述べた別の文章を、構成や展開の工夫に着目して読み、学びの成果を実感する。	**〈学びの系統図〉** ①身に付ける力の確認　③学びの成果の確認 ④学びが生きる場面の想起　⑤今後の学習への見通し

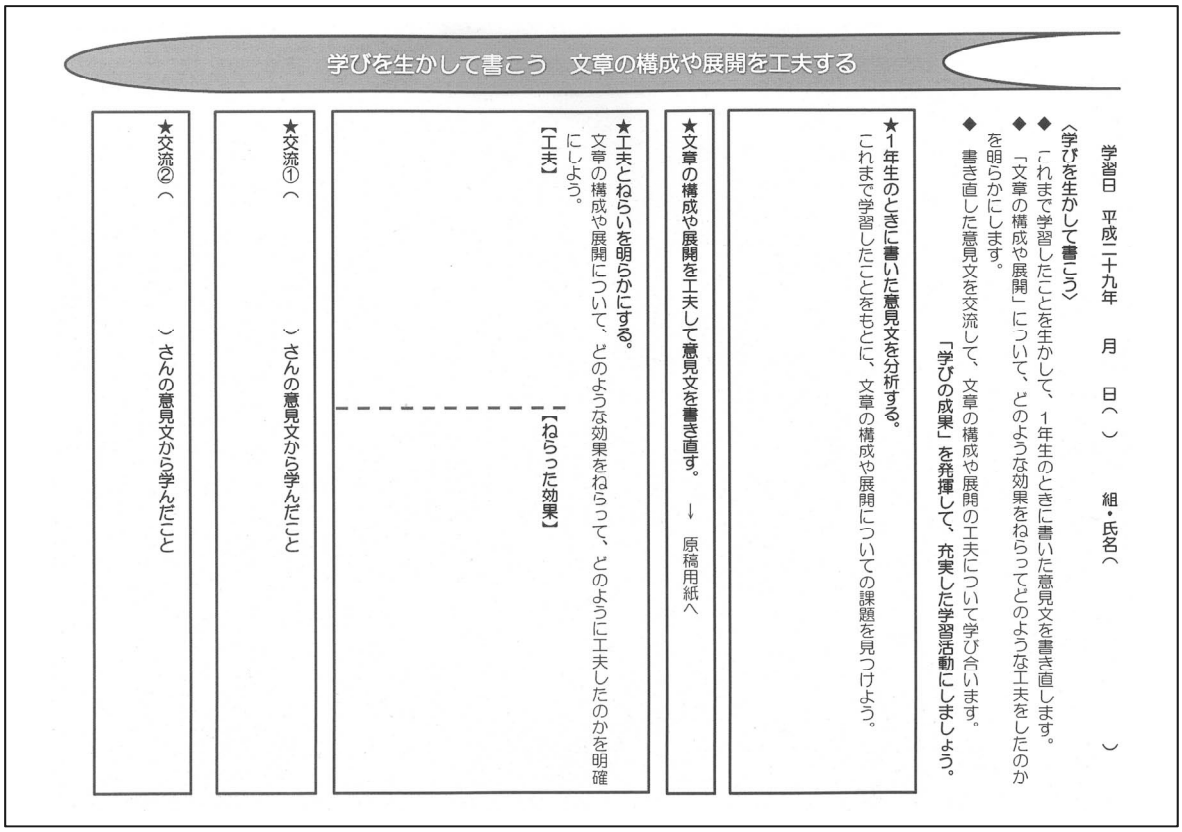
６　〈学びを生かす場面〉の指導（第３時）

(1)　本時の目標

「文章の構成や展開の工夫を読み取ること」について学習したことを活用して言語活動に取り組み、学びの成果を実感することを通して、言葉がもつ価値への認識を深める。

(2)　展開

	主な学習活動	○指導上の留意点　●評価規準・評価方法 ◆研究主題に迫るための手だて
導入	1　単元の目標と本時のねらいを確認する。 2　前時までに学習した「文章の構成や展開の工夫」のポイントを振り返る。	**◆「学びの系統図」を活用する。** ○前時までに活用したワークシートで振り返らせる。
展開	**身に付けた力を活用し、学びの成果を実感する**	
	3　「学びを生かして書こう」に取り組む。 (1)１年時の自分の意見文を、文章の構成や展開の工夫の視点から読み返し、課題を見付ける。	○活動の内容と手順を説明する。 **◆前時までの学習を生かすことを意識させる。(「学びの系統図」)**
	(2)前時までに学習した文章の構成や展開の工夫のポイントを生かして、自分の意見文を書き直す。	●読む②（ワークシート） ●言語①（ワークシート）
	(3)書き直した意見文を、文章の構成や展開の工夫の観点で交流する。	○互いの「意見文への意見」を読み合い、評価させる。 ●関・意・態①（観察） ●読む①（ワークシート）
	(4)活動を振り返る。	**◆言葉のもつ価値を実感させる。(「学びの系統図」)**
まとめ	4　ここまでの単元の学習を振り返り、今後の学習への見通しをもつ。	**◆学びの成果を確認させる。学びが生きる場面を想起させる。(「学びの系統図」)** ●関・意・態②（「学びの系統図」）



「学びを生かして書こう」ワークシート

〈生徒の活動例〉学びを生かして書こう

Ｓ１　１年時の意見文「文化を伝える」

私は日本の文化を代表するものは「和食」だと思う。和食の魅力を三つ挙げる。

第一に、和食は器や盛り付けなど見た目にもこだわっていて、そこに日本の伝統的な美しさが込められていること。

第二に、海のものから山のものまで日本で採れる食材を使って、素材の持ち味を生かした伝統的な調理法や味付けがされていること。

第三に、和食はヘルシーで、体によいこと。

今は、海外でもお寿司やてんぷらなどの和食が人気がある。「スキヤキ」、「シャブシャブ」などの言葉もそのまま通じるそうだ。多くの人が和食を通じて日本のことを知り、日本の魅力を感じてくれたらいいと思う。私も、これからも和食を楽しみながら、日本の文化を伝えていきたい。

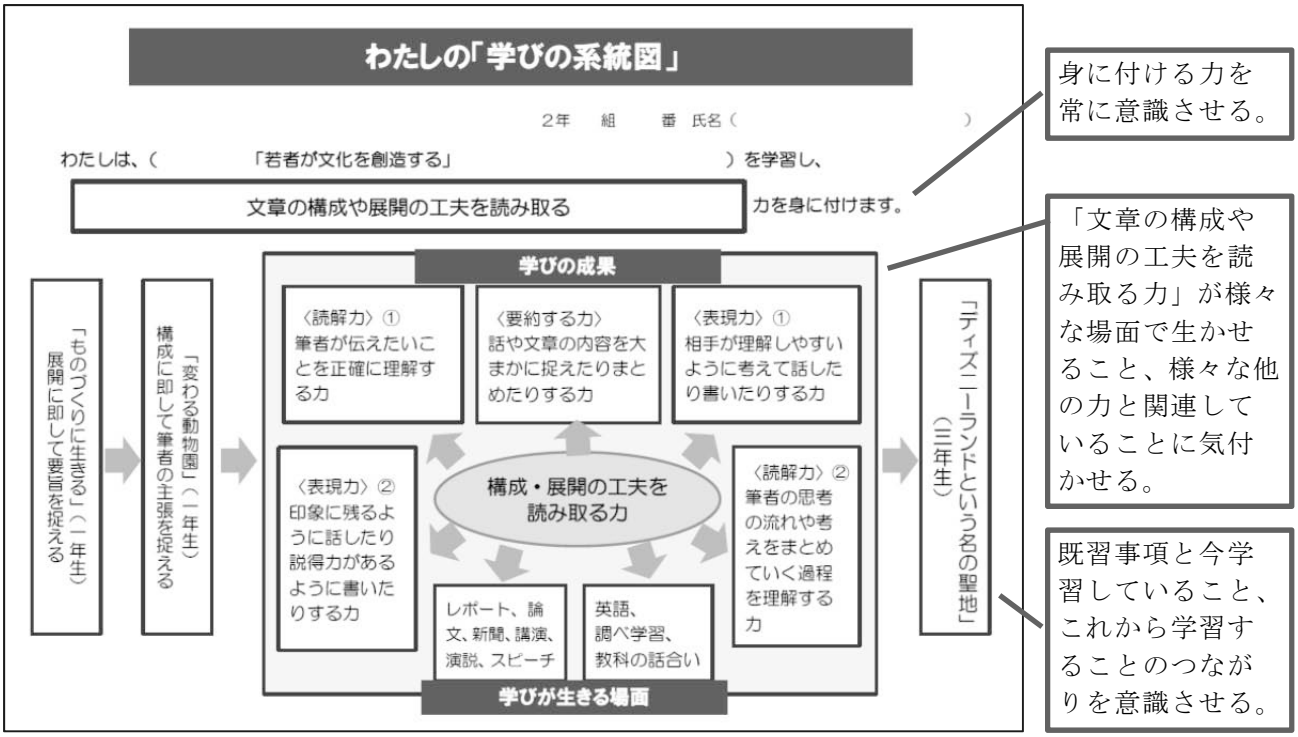
【工夫】三つの魅力を第二段落で短くまとめて、第三段落で意見を述べるようにした。文章の書き出しと終わりに印象的な言葉を使った。
【ねらった効果】魅力を詳しく伝えるよりも、自分の意見をしっかりと伝えようと考えた。はじめと終わりを工夫して、読み手を引きつけて印象に残るようにした。

Ｓ１　文章の構成や展開に工夫して書き直した意見文

「スキヤキ」、「シャブシャブ」、「スシ」、「テンプラ」。これらの日本語は、海外でもそのまま使われている。和食は、海外に広がった日本文化の代表的な存在だ。

器や盛り付けなどの見た目の美しさ、素材の持ち味を生かした調理法や味付け、野菜や魚が中心のヘルシーさなど、和食は様々な魅力をもっている。そしてその魅力を支えているのは、遠い昔から受け継がれてきた日本の伝統文化だ。

「旬のもの」という言葉がある。秋にはサンマというように、和食は四季の移り変わりとも深く関わっている。多くの人が、和食を通じて日本人の美意識、季節感、職人の技など、日本の伝統文化への理解を深めてもらえたらよいと思う。和食は日本の「親善大使」だ。



「学びの系統図」

7　指導の結果と考察

(1)　「学びの系統図」の活用

既習の説明的文章を記入するだけでなく、単元の導入として再読させ、どのような意見・考えを、どのような構成・展開で述べているかを捉え直させた。内容を理解するだけでなく、構成や展開の工夫を読み取り自分の表現に生かせるようになることが本単元のねらいであることを丁寧に確認し、目的意識をもって学習に取り組ませるようにした。

「学びの成果」の欄は、「書くために読む」ことを意識させ、情報の受け手としてだけでなく、情報の発信者としてどのような力が身に付くか、どのような場面で生かせるかを考えさせることで、学びの成果が多面的に生かせることを実感させることができた。

(2)　「学びを生かす場面」の設定

本単元は、文章を読んで構成や展開の工夫を読み取り自分の表現に生かすことができるようになることをねらいとしている。そこで、「学びを生かす場面」として、学んだことを基に、１年時に書いた意見文を書き直すという言語活動を設定した。

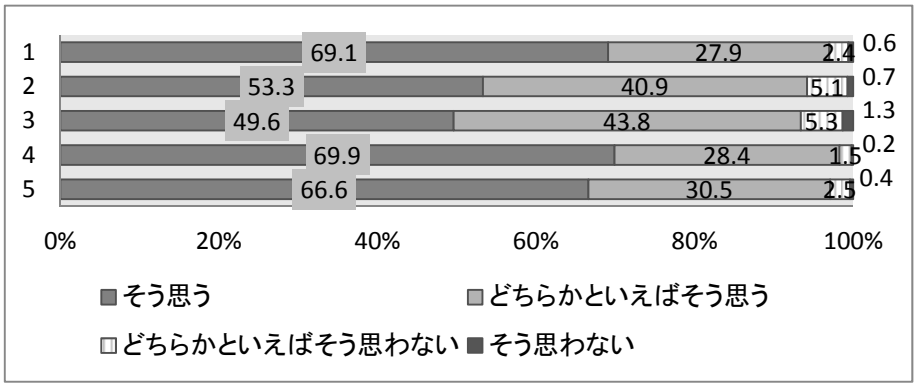
１年時の意見文は、教師が複写して保管しておいたものを活用した。自分の文章を自分が書き直すことにより、身に付いた力をより効果的に実感させることができた。過去の作文等を活用できない場合は、教師が作成した例文を用いることも考えられる。「工夫」と「ねらい」を明確にさせたことで、身に付いた力を意図的に活用させることができ、また交流の際に、観点を明確にした相互評価ができた。なお、ここで書き直した意見文は、「読むこと」の力の定着を図るための材料として扱うことに留意する必要がある。

授業後の振り返り（ワークシート）には、「１年生のときに書いた文章が、見違えるようになってうれしかった。内容は変わらなくても構成や展開を工夫することで、文章の印象や伝わり方が大きく変わることが分かった。」など、言葉のもつ価値を実感できていることが見取れる記述が多く見られた。

Ⅸ　研究のまとめ

仮説に基づく授業実践を行った後、効果検証のためのアンケートを実施した。

【調査方法】質問紙調査（４件法）　　【調査対象】研究開発委員在籍校生徒（抽出）
【調査実施人数】第１学年 173 人・第２学年 134 人・第３学年 145 人　計 452 人
【調査実施時期】平成 29 年 11 月
【調査項目】
1　国語の授業のはじめに目標や学習内容を確認し、学習に取り組めましたか。
2　国語の授業で今まで学習してきた内容を意識して、今度の学習に取り組めましたか。
3　学びの系統図を活用して取り組むことで、自らすすんで学習に臨むことができましたか。
4　国語の授業で学習したことで、他の教科や将来社会に出たときに役立つ力が身に付いたと考えていますか。
5　今後、国語の授業で身に付けた力を意識しながら言葉を使っていこうと考えていますか。



〈肯定的回答〉
質問１　97.0%
質問２　94.2%
質問３　93.4%
質問４　98.3%
質問５　97.1%

「そう思わない」は５項目中４項目が１%未満

アンケート集計結果

本研究では、「主体的に学習に取り組み、身に付けた学びの成果を自覚的に他の学習や今後の実生活に生かすことができる生徒」の育成を目指し、「学びの系統図」の活用と「学びを生かす場面」の設定を核として、指導の工夫に関する提案を示した。

「学びの系統図」の活用によって、自己の学びを可視化したり学びの関連性を明確にしたりすることができた。国語科は全ての言語による活動の基盤となる力を育む教科であり、また、各領域について段階的・螺旋（らせん）的に学習を積み上げていく教科でもある。「学びの系統図」の活用は、生徒に国語科の学習の特性や目的を自覚させ、主体的に学習に取り組む姿勢を育む上で、効果的であった。また、「国語への関心・意欲・態度」、あるいは新学習指導要領における「学びに向かう力、人間性等」をはかるための手だての一つとしても、有効に機能するものである。学年や発達の段階に応じて、より効果的なものとなるよう、記入させる項目や内容等について、引き続き検討していくことが必要である。

「学びを生かす場面」の設定については、身に付けた力を活用する活動を単元の中に意図的・計画的に設定したことで、生徒に学びの成果を実感させることができたとともに、学びに対する意欲を喚起することができた。国語科で身に付けた力を生かすことは、身に付けた資質・能力の有用性を自覚することにつながる。そしてその自覚は、学びの成果を活用する力の根底をなすものである。本研究では、同一単元の中に「学びを生かす場面」を設定したが、年間指導計画などで単元の配置を工夫することも、同様の効果を生むはずである。１年間あるいは３年間を見通した効果的なカリキュラムの編成も検討課題である。

生徒一人一人が、目的意識をもって学び、その成果を実生活に生かしていくことができるようになるために、本研究の成果と課題について継続して研究に取り組んでいきたい。

中学校社会研究開発委員会

目　次

Ⅰ　研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・22

Ⅱ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23

Ⅲ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　１　指導事例１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・25
　２　指導事例２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　３　指導事例３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

Ⅳ　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40

〈中学校社会研究開発委員会〉

研究主題・副主題

「学びに向かう力を高める指導の工夫」

研究の概要

平成 28 年 12 月の中央教育審議会答申においては、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、よりよい社会をつくっていくために、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力として、生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養の三つの柱で整理を図るよう提言され、平成 29 年３月に新中学校学習指導要領が公示された。これまでも社会科の研究や実践において、「知識及び技能の習得」や「思考力、判断力、表現力等の育成」の実現を目指した授業改善は行われてきた。

そこで、本研究では「学びに向かう力」を育むことを研究対象とした。そのために単元を貫く学習課題を設定し、知識や技能の定着と思考・判断・表現を行う場面を繰り返しながら、学習した知識・技能と学習課題のつながりを意識させていくことで、学習することの意義や学びに向かう力を育むことができると考えた。そのために、単元を貫く学習課題の設定の工夫や、知識・技能と学習課題のつながりを意識させていく工夫を明らかにした。

Ⅰ　研究の目的

急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国では、一人一人が持続可能な社会の担い手として、新しい価値を生み出していくことが期待されている。このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことなどが求められている。このような状況を踏まえ、中央教育審議会は答申において、予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか、どのように社会や人生をよりよいものにしていくのかという目的を自ら考え、自らの可能性を発揮し、よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けることが重要であるとした。また、選挙権年齢が満 18 歳以上に引き下げられ、良識ある主権者として、主体的に政治に参加することについての自覚を深めることなど、自らの人生を切り拓(ひら)いていくことが強く求められている。これらのことから、全ての教科等の目標及び内容が、「資質・能力の三つの柱」で再整理された。

「資質・能力の三つの柱」のうち、何を理解しているか、何ができるかなどの「知識及び技能」、理解していること・できることをどう使うかなどの「思考力、判断力、表現力等」を高める指導については、昨年度までの開発委員会で、既に先行して研究されてきた。本年度は、これまでの研究を踏まえるとともに、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」をより効果的に育成するために必要不可欠であり、その推進力ともなる、どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るかなどの「学びに向かう力」を高める指導について研究することにした。

平成 29 年６月に明らかにされた「中学校学習指導要領解説社会編」（以下、「新学習指導要

領解説」とする。）においては、「学びに向かう力・人間性等」を「社会的事象について主体的に調べ分かろうとして学習上の課題を意欲的に解決しようとする態度や、よりよい社会の実現に向けて、多面的・多角的に考察、構想（選択・判断）したことを社会生活に生かそうとする態度」としている。そこで、本研究においても、「学びに向かう力」は、継続的な学習を通して得られるものとし、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」を基に、どのように「学びに向かう力」を高めることができるかを研究し、明らかにすることとした。

Ⅱ　研究の方法

研究仮説

「単元を貫く問い」を単元の導入で設定し、その後の学習を「単元を貫く問い」と関連付けていくことで、生徒は学ぶ意義を感じることができ、学んだことを基に新たな課題を生み出す「学びに向かう力」が育まれるのではないか。

「学びに向かう力」は、「Ⅰ　研究の目的」に記したように、「新学習指導要領解説」に二つの要素からなることが示されている。一つは、「社会的事象について主体的に調べ分かろうとして学習上の課題を意欲的に解決しようとする態度」と、もう一つは、「よりよい社会に向けて考察・構想したことを社会生活に生かそうとする態度」である。そこで、本委員会では、この二つの要素から学びに向かう力を高める指導について研究することとした。

「社会的事象について主体的に調べ分かろうとして学習上の課題を意欲的に解決しようとする態度」に関して、主体的に学ぶようになるためには、生徒が自分の学んでいることがどのような意味をもっているかという「学ぶ意義」を実感することが大切である。生徒に「学ぶ意義」を実感させるためには、現在の学習内容の位置付けを明確にする必要がある。つまり、自分の学びがどこに向かい、どことつながっているのかが分かってこそ、学ぶ意欲が生まれる。そこで、仮説にあるように、「単元を貫く問い」を単元の導入で設定し、生徒に単元における学習の見通しをもたせ、かつ、自分たちが学んでいる内容がその「問い」とどう関係しているのかを、単元を通じて意識させ続けることで、生徒に学習の有用性を実感させることができると考えた。また、習得した知識及び技能を活用し、思考力、判断力、表現力等の育成を図る過程で振り返りを行うことは、生徒に学びの連続性・関係性を実感させることができ、学ぶ意義をより高め、学びに向かう力を育成することに効果的であると考えた。

「よりよい社会に向けて考察・構想したことを社会生活に生かそうとする態度」に関して、単に学習課題を解決するにとどまらず、意欲的に学びに向かう姿勢を育成していくことで、単元で学習した内容を生かして、自らが追究したいと考える「新たな問い」を生み出せるのではないかと考えた。それまでの学習や自分自身の経験を総合し、自ら取り組むべき課題を把握し、その解決に向けて構想していく力こそがよりよい社会を形成し、幸せな人生を送る上で必要な資質・能力と考えた。そこで、生徒が「新たな問い」を生み出せるように、単元末において生徒自身が問いを立てる場面を設定し、生徒の「学びに向かう力」の育成を図ることとした。

これらの「学びに向かう力」の育成は、１単位時間では図ることはできない。単元やさら

に大きな内容のまとまりごとでの評価が必要となる。今回の研究では、単元を通じたワークシートを活用し、生徒の取り組みの様子と、設定した「新たな問い」から「学びに向かう力」の育成の成果を評価していくこととする。

以上のことから、本研究の視点は、次の５点にまとめることができる。

(1)　「単元を貫く問い」を単元の導入で設定する。

(2)　習得した知識及び技能を活用しながら思考力、判断力、表現力の育成を図る振り返りの場面を設定する。

(3)　単元の学習を通じ、毎回の授業の内容と「単元を貫く問い」との関係をワークシートに記録させていく。

(4)　単元のまとめの段階で、今までに学習したことを踏まえ、「新たな問い」を生徒自身で設定させる。

(5)　ワークシートの記述内容等を分析していくことで、「学びに向かう力」が高まっているかを見取る。

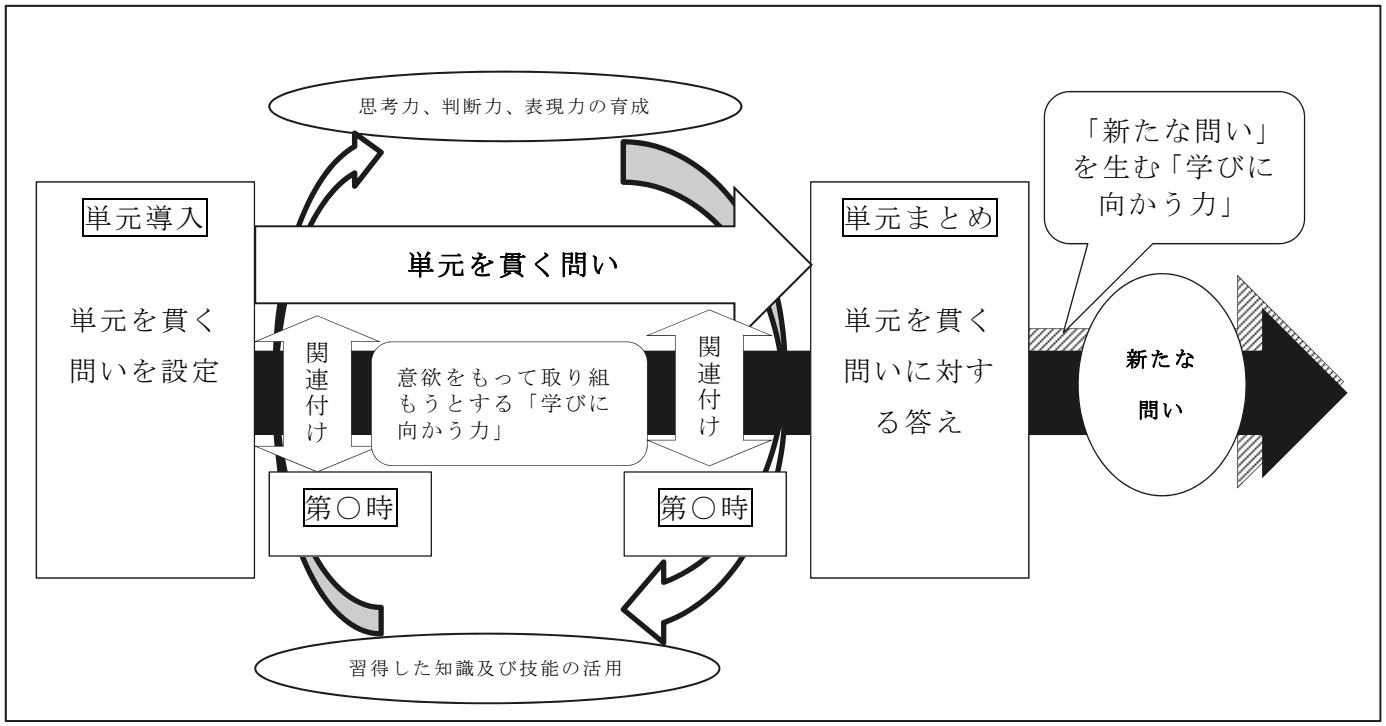
なお、指導事例は、以下のとおりである。

指導事例１　歴史的分野　(3) 中世の日本

指導事例２　公民的分野　(2) 私たちと経済　ア　市場の働きと経済

指導事例３　公民的分野　(3) 私たちと政治　イ　民主政治と政治参加

研究構想図



Ⅲ　研究の内容

１　指導事例１

学習指導要領　歴史的分野　大項目　（３）中世の日本
第１学年　単元名　歴史的分野　武家政権の成長と東アジア

(1)　単元の目標

ア　我が国の中世の特色を世界の動きとの関連を踏まえて、意欲的に追究する。

イ　武士の政治への進出と展開、東アジアにおける交流、農業や商工業の発達などに着目し、社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し表現する。

ウ　中世に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して読み取ったり年表などにまとめたりする。

エ　武家政治の成立とユーラシアの交流、武家政治の展開と東アジアの動き、民衆の成長と新たな文化の形成を理解する。

(2)　単元の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
我が国の中世の特色を世界の動きとの関連を踏まえて、意欲的に追究している。	武士の政治への進出と展開、東アジアにおける交流、農業や商工業の発達などに着目し、社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し表現している。	中世に関する様々な資料を収集し、有用な情報を適切に選択して読み取ったり、年表などにまとめたりしている。	武家政治の成立とユーラシアの交流、武家政治の展開と東アジアの動き、民衆の成長と新たな文化の形成を理解し、その知識を身に付けている。

(3)　研究主題との関わり

現行学習指導要領　歴史的分野「(1)歴史のとらえ方　ウ」には「学習した内容を活用してその時代を大観し表現する活動を通して、各時代の特色をとらえさせる」とあり、内容の取扱いに「内容の(2)以下の各時代の学習のまとめとして実施すること」とある。「その際、各時代の学習の初めにその特色の究明に向けた課題意識を育成」した上で、「各時代の特色をとらえさせるようにする」とある。このことは、「新学習指導要領」におけるＢ、Ｃの中項目にそれぞれ記載されている。以上のことから、中世の導入で「単元を貫く問い」を設定し、この「問い」を中世の学習の軸に据え、最後に中世の大観で新たな課題をつくり、「学びに向かう力」を育み、次の近世に活用することとした。

(4)　単元の指導計画と評価計画（14 時間扱い）

時	○学習内容・学習活動	学習活動に即した具体的な評価規準（評価の観点、評価方法）
〈単元を貫く問い〉**「中世は、なぜ武士が活躍していったのだろうか。」**		
1 本 時	○中世の導入の授業 ・小学校の教科書を活用し、既習の知識と中学校で学ぶ事柄とを関連付けて、「単元を貫く問い」を自ら設定する。	・「小学校で習った歴史」と「中学校でこれから深める歴史」を比較し、因果関係を捉えることができる。 （思考・判断・表現、ワークシート） ・単元を貫く問いを設定する。 （関心・意欲・態度、ワークシート）

2	○各地で生まれる武士団 ・武士は、どのように社会へ進出していったのだろか。	・武士団の形成と成長、源氏や平氏が社会の役割を担っていったことを理解している。(知識･理解、ワークシート)
3	○朝廷と結び付く武士 ・なぜ、平清盛は武士の身分でありながら、台頭することができたのか。	・院政と平清盛の政治を理解している。 (知識･理解、ワークシート) ・武士が台頭した理由を考え、その後の影響を考察する。 (思考･判断･表現、ワークシート)
4	○鎌倉を中心とした武家政権 ・武士がどのように幕府をつくっていったのか。 ・承久の乱後、幕府の力はどのようになったのか。	・武家政権の特色を理解している。 (知識･理解、ワークシート) ・承久の乱が起こった原因を考えるとともに、その後の武家政権への影響について考察する。 (思考･判断･表現、ワークシート)
5	○武士や僧侶たちが広めた鎌倉文化 ・鎌倉仏教は、どのような人々へ広まっていったのだろうか。	・鎌倉仏教が、天皇や貴族だけでなく、武士や民衆に広まったことを理解している。　(知識･理解、ﾜｰｸｼｰﾄ) ・鎌倉仏教について資料を基にまとめている。　(技能、ワークシート)
6	○海をこえてせまる元軍 ・元寇が日本に与えた影響は、どのようなものだったのか。 ・なぜ、鎌倉幕府は滅んだのか。	・元寇が国内に及ぼした影響などについて考察し、まとめている。　(思考･判断･表現、ワークシート)
7	○南北朝の内乱と新たな幕府 ・鎌倉幕府が滅んだ後、誰が政治の実権を握ったのだろうか。	・鎌倉幕府滅亡後、どのような人々が権力争いを展開したのか、考えることができる。 (思考･判断･表現、ワークシート)
8	○東アジアの交易と倭寇 ・日本と外国との関係を明らかにする。	・足利義満が勘合貿易を行い、武士として強い権力を持っていたことを理解する。(知識･理解、ワークシート)
9	○琉球とアイヌの人々がつなぐ交易 ・日本と外国との関係を明らかにする。	・室町時代の日本の周辺地域の様子や、琉球王国や蝦夷地のアイヌと交流があったことを理解している。 (知識･理解、ワークシート)
10	○技術の発達と様々な職業 ・商工業が発達した担い手は誰だろうか。	・農業における二毛作や、定期市など商工業が発達し、民衆が力を伸ばしていったことを理解している。 (知識･理解、ワークシート)
11	○団結して自立する民衆 ・民衆が力を付けていったのは、なぜなのか。 ・正長の土一揆を資料から読み取る。	・寄合や土一揆など、民衆が力を付けてきたことを理解する。　(知識･理解、ワークシート) ・資料から民衆が一揆を起こしたことを読み取る。 (技能、ワークシート)
12	○全国に広がる下剋上 ・応仁の乱の後、日本はどのような社会になっていったのだろうか。	・応仁の乱以後、戦国時代へと展開していった過程を捉え、まとめている。(思考･判断･表現、ワークシート)
13	○庶民に広がる室町文化 ・室町文化の担い手について考える。	・室町文化の担い手が武士であることを理解している。 (知識･理解、ワークシート)
14	○中世を大観する授業 ・中世を武士の目線から考える。 ・単元の学習を踏まえ、武士が活躍した理由を考察する。	・単元（中世の日本）を貫く問いを考察し、その結果をまとめている。　(思考･判断･表現、ワークシート) ・学習したことを参考に、これからの学習に生かそうと考えることを記入し、前回の「古代」と比較する。 (関心・意欲・態度、ワークシート)

(5)　本時の指導

ア　本時の目標

小学校段階における歴史学習の内容を踏まえ、中世の全体の流れをつかむ。中世の「単元を貫く問い」を自ら設定し、「学びに向かう力」の動機付けを行う。

イ　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入	○古代がどのような時代であったか振り返る。	○古代の大観の授業を振り返り、古代は天皇や貴族が中心の世の中であったことに気付かせる。	
展開1	○小学校の教科書を使って、中世を振り返る。 ○小学校で習った歴史について、年表の空欄に、時代ごとに歴史的事象を記入する。 ○年表をクラスで共有する。代表者が黒板に記入する。	○小学校の教科書を電子黒板に投影しながら、流れ（人物などポイント）を時代ごとにつかませる。 ○小学校の知識を活用（小学校の教科書を使用）して、中世の知識を整理させる。 ○記入に間違えがあったら修正し、小学校で学んだ知識を整理する。	
展開2	○「中学校でこれから深める歴史」の年表を参考に、平清盛や後鳥羽上皇が行った歴史上の出来事を考える。	○「中学校でこれから深める歴史」の年表を確認しながら、平清盛、後鳥羽上皇について、武士が活躍した過程を、「学びに向かう課題」と関連付け、生徒に考えさせる。 ○小学校の学習を踏まえ、中学校の歴史的分野で学ぶ時代の流れや因果関係を捉えさせる。	○自分の考えについて根拠をもって記述している。（思考・判断・表現、ワークシート）
展開3	○これから学ぶ中世について「単元を通して学びたい課題」を自ら考える。	○「中世は、誰が活躍した世の中だったのか」を考えさせて、中世でどのようなことを学びたいのか、中世を通して考える課題を自ら考えさせる。	○「単元を通して学びたい課題」を立てている。（関心・意欲・態度、ワークシート）
まとめ	○本時の授業の感想をワークシートに記入する。	○小学校の教科書を活用したことや、中学校で学ぶ内容を踏まえることで、これから学ぶ授業に意欲的になれたかを踏まえる。	

【本時の授業の様子】

【本時で使用したワークシート】

第3章中世ノートNO.導入　/　組　名前:

中世の年表【単元を通して考える課題】　　【古代の大観】

年	小学校で習った歴史	年	中学校でこれから深める歴史	深く考える	<学びに向かう課題>
時代後半 1167年	○　の登場 ○　と　が、武士の棟梁となる ○　が武士として初めて太政大臣となる　・貿易をはじめる	935年 1086年	○関東で平将門が乱を起こす ○白河天皇が上皇となり院政を始める ○平清盛が日宋貿易をはじめる	【平清盛】	なぜ、平清盛が武士の身分でありながら、台頭することができたのか。
1185年 時代 1192年	■源頼朝、全国に　・　を置く ○源頼朝、征夷大将軍となり　を開く ■頼朝と武士との関係は【御恩と奉公】			【源頼朝】	武士がどのように幕府をつくっていったのか？
1221年 1232年 1274年	○将軍が三代で途絶える ○朝廷が承久の乱を起こした ○北条氏が　となって政治をおこなう ○武士の基準となる御成敗式目がつくられる ○　の大軍が2度にわたり攻めてくる	1221年 1232年 1297年	○承久の乱以後、北条氏が執権政治をはじめ幕府の勢力が東国から西国にも及ぶ ○律令とは別に、公平な裁を行うための武士独自の法律である御成敗式目がつくられる ○御家人を救おうと幕府が徳政令を出す	【後鳥羽上皇】	承久の乱後、幕府の力はどのようになったのか？ なぜ、鎌倉幕府は滅んだのか
時代 1338年	○足利尊氏が京都に幕府を開く ○足利義満が金閣を建て、　や　を広める ○足利義政が建てた　 ○すみ絵（水墨画）を　が大成 ○お茶を飲む風習も広まる。 ▼下の空欄に本日の授業の感想を書きなさい。	1334年 1392年 1467年	○後醍醐天皇が建武の新政をおこなう ・南北朝時代となる ○足利義満が南北朝を統一させる ・金閣をつくる ・明と勘合貿易を始める ・琉球王国が成立する ・定期市が盛んになる　・土一揆が増える ○守護大名や将軍家との間をめぐり、応仁の乱がおこる　・下剋上から戦国大名が出現	【後醍醐天皇】 【足利義満】	鎌倉幕府が滅んだ後、誰が政治の実権を握ったのだろうか？ 応仁の乱後、社会はどのように変化していったのだろうか？

【本単元で使用したワークシート】

第3章「中世の日本」

組　名前:

単元名　中世の日本（鎌倉時代～室町時代）

■単元を通して考える課題

○貴族から武士へ ◆ワークシートNO.17	■1. なぜ、平清盛が武士の身分でありながら、台頭することができたのか。
○いざ鎌倉 ◆ワークシートNO.18	■2. 武士がどのように幕府をつくっていったのか。
○いざ鎌倉 ◆ワークシートNO.18	■3. 承久の乱後、幕府の力はどのようになったのか。
○元寇と鎌倉幕府の滅亡 ◆ワークシートNO.20	■4. なぜ、鎌倉幕府は滅んだのか。
○南北朝の内乱と室町幕府へ ◆ワークシートNO.21	■5. 鎌倉幕府が滅亡後、誰が政治の実権を握ったのだろうか。
○下剋上の世 ◆ワークシートNO.24	■6. 応仁の乱後、社会はどのように変化していったのだろうか。

■中世がどのような時代であったのか、自分の言葉で表現してみよう。　◆ワークシートNO.26

■中世の授業（鎌倉時代～室町時代）を通して学んだ事を参考に、これからの社会（学習）に生かそうと思うことを書きなさい。

(6)　研究の考察

ア　成果

(ｱ)　小学校で学んだ歴史学習の活用

中学校第１学年の生徒は、小学校第６学年で歴史を学習しており、系統性をより重視することでよりねらいを達成できる授業を実践できると考えた。実際に生徒が使用した小学校の教科書を活用し、「小学校で習った歴史」と「中学校でこれから深める歴史」をそれぞれ年表で比較した（ワークシート参照)。「小学校で習った歴史」については、小学校教科書の活用が有効であり、このことにより、多くの生徒が内容を振り返ることができた。この学習を基に、承久の乱や建武の新政などを例に、時代の流れやその因果関係を考えさせることで、より理解を深めることができた。

(ｲ)　「単元を貫く問い」の設定による「学びに向かう力」の育成

生徒自身の「学びに向かう力」を高めるために、中世の導入で「自らの問い」を設定させた。生徒が作った「自らの問い」では、「どのように武士たちは力を発揮していったのか。」、「足利氏はどのような文化を生み出したのか。」など、個々の課題を意識した記述が多く見られた。本時の最後に記述させた生徒の感想においては、「中学校で学ぶ歴史には関係性があることが分かった。」、「小学校の時よりも奥が深く、おもしろそうだなと思った。」など、今後の授業に対する肯定的な意見が多く見られた。また、小学校の学習と関連付けて年表に表すことで、生徒は、中世の全体像を把握することができ、「単元を貫く問い」の設定とともに、その後の授業に見通しをもつことができた。

イ　課題

(ｱ)　小学校での学習内容の確実な定着

小学校の学習内容を生徒がどの位理解しているかについて、小学校の学習においては、補助教材や資料の活用に違いがあり、授業の内容にも差が見られた。生徒は、昨年学習した状況であるため、学年が進むにつれて、習得した知識が薄れてしまうこともあるのではないかと思われる。そのため、歴史的分野における単元の導入において、小学校の学習内容の定着度を測る「確認テスト」を実施したり、小学校での学習状況を生徒同士で共有させたりすることが有効であると考える。

(ｲ)　「学びに向かう力」の設定

今回、中世の導入で設定し「単元を貫く問い」は、「中世は、なぜ武士が活躍していったのだろうか。」であった。生徒は、自ら立てた課題とともに、武士が活躍した背景について単元を通して意識することができた。内容のまとまりごとに行う「新たな問い」では、武士と天皇・貴族との関係を常に意識しながら考えることができた。今回、歴史的分野において、「単元を貫く問い」のまとめは中世の大観にあたり、武士が活躍していった様子を踏まえて、時代を大きく捉えることができているかをみてきた。しかし、最後に「自ら新たな問い」を立てることができたのか。理解することはできたが、更に学んでみたい、もっと調べてみたいと思うことができたかは、生徒が立てた課題を基に、次の学習に生かすことが大切であると考えた。

２　指導事例２

指導事例　　学習指導要領　公民的分野　大項目（2）私たちと経済
第３学年　単元名　公民的分野　市場の働きと経済

(1)　単元の目標

ア　企業の生産活動、金融などに対する関心を高め、今日の経済活動に関する諸問題に着目し、企業の経済活動、金融について、意欲的に追究する。

イ　社会における企業の役割と責任、社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善に関わる課題を見いだし、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する。

ウ　企業の生産活動､金融などに関する資料を様々な情報手段を活用して収集することや、学習に役立つ情報を適切に選択するなどして､読み取ったり図表にまとめたりしている。

エ　資本主義経済は市場経済に基づいて成り立ち､企業が自由に生産を行って利益を生み出すことや、労働者が勤労の義務と権利をもち労働者は法で守られていることを理解する。

(2)　単元の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
企業の生産活動、金融などに対する関心を高め、今日の経済活動に関する諸問題に着目し、企業の経済活動、金融について意欲的に追究している。	社会における企業の役割と責任､社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善に関わる課題を見いだし、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的･多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	企業の生産活動、金融などに関する資料を、様々な情報手段を活用して収集し、学習に役立つ情報を適切に選択して、読み取ったり図表にまとめたりしている。	資本主義経済は市場経済に基づいて成り立ち、企業が自由に生産を行って利益を生み出すことや、労働者が勤労の義務と権利をもち、労働者は法で守られていることを理解し、その知識を身に付けている。

(3)　研究主題との関わり

本単元では、対立と合意、効率と公正などに着目しながら、社会における企業の役割と責任､社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善について理解させる。特に新学習指導要領では、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の観点に基づいて、違法な時間外労働や賃金の不払いなどが疑われる企業等との間でのトラブルを予防し、回避できるように、労働保護立法の視点から社会生活における職業の意義と役割及び雇用と労働条件の改善について多面的・多角的に考察し、表現できるようにすることが求められている。そこで､「よりよい企業をつくるための方策を考えよう」という単元を貫く課題を設定し、市場経済における企業の生産活動という社会的事象に対して、多面的・多角的に考察を繰り返しながら、望ましい企業の在り方を追究していく。

(4)　単元の指導計画と評価計画（13 時間扱い）

時	○学習内容・学習活動	学習活動に即した具体的な評価規準（評価の観点・評価方法）
＜単元を貫く問い＞**「よりよい企業をつくるための方策を考えよう」**		
1	○私たちの生活と企業 ・企業の活動の目的は何かを考える。 ・法令を違反している企業はどのような違反を起こしているかについて調べる。 ・「企業」「家計」「政府」の立場から企業の活動について考察する。	・企業の活動の目的について関心を高めている。（関心･意欲･態度、観察・ワークシート） ・法令を違反している企業はどのような違反を起こしているかについて調べている。（技能、ワークシート）

2	○企業の活動のしくみと種類 ・企業の種類を理解し、企業の活動に必要なものを考える。 ・生産活動のしくみを理解し、利益を上げるための方策を話し合う。（班活動）	・企業の種類と生産活動のしくみを理解している。（知識・理解、ワークシート） ・生産活動のしくみを踏まえて、利益を上げるための方策を、公正と効率の視点から考察している。（思考・判断・表現、ワークシート）
3	○株式会社のしくみ ・株式会社と株式市場のしくみを理解する。 ・企業経営が振るわなかった場合、企業はどうなるかを考察する。	・株式会社と株式市場のしくみを理解している。（知識・理解、ワークシート） ・企業経営が振るわなかった場合、企業はどうなるかを考察している。（思考・判断・表現、ワークシート）
4	○自由競争の役割 ・市場経済においては自由競争が原則であること、企業の公正かつ自由な活動を保障するための法律を理解する。 ・自由競争の長所と短所について話し合う。	・企業に公正かつ自由な活動を保障するために独占禁止法があることを理解している。（知識・理解、ワークシート） ・自由競争の長所と短所を考察している。（思考・判断・表現、ワークシート）
5	**○振り返り** **「よりよい企業をつくるための方策を考えよう」** ・「企業」「家計」「政府」のそれぞれの視点で「よりよい企業をつくるための方策」を考察する。 ・班で考えた方策を発表して、意見交換する。 ・自分の班に戻り、報告をする。 ・前時の発表や意見交換から、よりよい企業をつくるための方策を話し合う。	・よりよい企業をつくるための方策について、多面的・多角的に考察し、企業でのトラブルが起こらないようにするために何が必要かまとめている。（関心・意欲・態度、観察）（思考・判断・表現、ワークシート）
6（本時）	**○振り返り** **「よりよい企業をつくるための方策を考えよう」** ・前時に話し合った「よりよい企業をつくるための方策」を全体に発表する。 ・各班の発表に対して、新たな疑問点や課題を考える。 ・次の課題を設定する。	・よりよい企業をつくるための方策について、多面的・多角的に考察し、企業でのトラブルが起こらないようにするために何が必要かまとめている。（関心・意欲・態度、観察）（思考・判断・表現、ワークシート）
7	○働くことの意義と労働者の権利 ・労働者を守るための権利が保障され、法律で守られていることを学習する。 ・労働組合の組織率が下がっていることをグラフから読み取り、その理由を考察する。	・グラフから労働組合の組織率が低下していることを読み取ることができる。（資料活用の技能、ワークシート） ・労働組合の組織率が低下している理由を考察している。（思考･判断･表現、ワークシート） ・労働三法について理解している。（知識・理解、ワークシート）
8	○労働環境の変化と課題 ・資料を読み取り、日本の労働環境の変化について考察する。	・資料から日本の労働環境の変化を読み取ることができる。（技能、ワークシート） ・日本の労働環境の変化について、資料を参考に考察することができる。（思考・判断・表現、ワークシート）
9	○企業の社会的責任 ・企業はどのように社会に貢献するべきかについて考える。	・企業が社会的責任を果たすためにどのような取り組みをしているか具体例を挙げることができる。（技能、ワークシート）
10	○景気変動と企業 ・景気の変動について学習する。 ・景気の変動によって企業にどのような影響が出るかを話し合う。（班活動）	・景気の変動によって企業にどのような影響が出るかを考察している。（思考・判断・表現、ワークシート） ・景気の変動について理解している。（知識・理解、ワークシート）
11	○金融のしくみとはたらき ・社会の中で金融はどのような役割を果たし、機能しているかを学習する。	・銀行をはじめとする金融の役割について理解している。（知識・理解、ワークシート）

12	○グローバル化と日本経済 ・経済がグローバル化することによって、企業や私たちの生活にどのような影響があるかを学習する。	・為替の変動によって企業にどのような影響が出るかを考察している。 （思考・判断・表現、ワークシート） ・為替の変動や産業の空洞化について理解している。（知識・理解、ワークシート）
13	○これからの日本の産業 ・今までの学習から、これからの日本の企業や産業はどのようにあるべきかを考察する。	・日本の企業がより発展するための方策について、多角的に考え、何が必要かまとめている。 （関心・意欲・態度、観察） （思考・判断・表現、ワークシート）

(5)　本時の指導

ア　本時の目標

(ｱ)　各グループの発表や今までの学習を基に、「よりよい企業をつくり出す方策」を多面的・多角的に考察する。

(ｲ)　法令違反する企業が生まれないようにするために、労働者を守る権利が必要であることに気付く。

イ　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入	○課題を確認する。 「よりよい企業をつくるための方策」 ○本時の流れの確認		
展開①	○「よりよい企業をつくるための方策」を発表する。	・評価するポイントや疑問点や新たな課題を考えながら発表を聞く。	
展開②	○発表に対して、疑問点や新たな課題を考察する。（班活動）	・各班の発表について効率と公正、希少性などの視点や様々な立場の視点から評価し、疑問点や新たな課題を考える。	・他の班の発表を効率と公正、希少性などの視点やそれぞれの立場から評価し、考察している。（思考・判断・表現、ワークシート）
まとめ	○単元を貫く問いに対する自分の考えをまとめる。 ○本単元を終えて、更に追究したいことや次単元で追究したいことについてまとめる。	・「よりよい企業を作るための方策」について自分の考えをまとめ、次に自分が学習したいことをワークシートに記入させる。	・本単元を終えて、更に追究したいことや新たに追究したいことをまとめている。（関心・意欲・態度、ワークシート）

予想される生徒の反応

○　利益を追求するほかに、地域社会に貢献するような活動を行っていく。
○　経営者と共に、よりよい労働環境を保つような取り組みを行う。
○　労働者や企業が公正で自由に経済活動を行えるような法律を定める。

(6)　研究の考察

ア　成果

(ｱ)　興味・関心の高い学習課題の設定

本研究の視点１である「単元を貫く問い」として、本単元の第１時で「法令違反している企業」についての事例について調べ、その上で「よりよい企業をつくるための方策を考えよう」という課題を設定した。

その際、視点の偏りが出ないように、経済の主体である「企業」、「家計」、「政府」の三つに生徒を分担し、この後の学習をこの視点で考えることとした。第２時から第４時では、「企業活動のしくみと種類」、「株式会社のしくみ」、「自由競争の

役割」について学習した。単元を貫く問いとの関連と学習内容が関連する課題を与えて考察させ(研究の視点２)、その関連を自分の経済主体の視点から、ワークシートに記録させた(研究の視点３)。

「法令違反している企業」については、生徒にとって興味・関心の高い話題であり、労働者が働きやすい企業にするための「よりよい企業をつくるための方策を考えよう」という単元を貫く課題は、生徒が興味・関心をもって追究しやすい課題であったと考える。

(ｲ)　次の学習内容を引き出す既習事項の活用

第５時では、最初に経済の主体の分担ごとに生徒を集め、単元を貫く問いについて考察し、その上で「企業(２人)」「家計」「政府」の全てを４人１組のグループで単元を貫く問いを考察し、第６時で発表した。以下は、その際の発表の一例である。

「【政府】労働者にアンケートをとる。労働者のための相談窓口を設置する。企業を監視する。【企業】労働者を守るきまりをつくる。労働者の精神面をサポートする。企業内外の人とコミュニケーションをとり、団結して企業に対して声をあげる。労働者の権利を保障したうえで技術革新を図る。」→次時の学習内容を班の方策として発表している。

「【政府】企業に対して働き方の改革を実行させる。大企業には抜き打ち調査をする。経営の安定した中小企業には補助金を出す。【家計】よりよい労働環境を求める。【企業】大企業には従業員に対する待遇改善、意識改革が効率のアップにつながる。中小企業は利潤に応じた人員、施設の整理、従業員のモチベーションの向上を行う。」→第２時で学習した大企業と中小企業という知識を生かして考えている。

「【企業】資金をもらい、技術革新を目指す。消費が増加し、利潤の増加。【家計】労働に見合った賃金がもらえる。モノが豊かになる。【政府】経営状況が厳しい中小企業に資金提供する。」→景気の変動についてはこの後に学習する内容である。

このように三つの経済の主体の立場から多面的･多角的に考察をすることができた。また、今までの学習を生かして考察を行ったり、これから学習する内容や、実際に社会の中に存在する組織などを提案したりするなど、次の学習につながる発表を行うことができた。

(ｳ)　「学びに向かう力」の向上

第６時で各グループの方策を発表した後、それらの発表に対して、疑問点や新たな課題を考えさせた。その上で個人で「よりよい企業をつくるための方策」を考察し、ワークシートにまとめた。最後にワークシートへ更に追究したいことや次単元で追究したいことについてまとめさせた(研究の視点４)。ここでは多くの生徒が各自で新たな問いを設定することができた。以下は生徒が立てた「新たな課題」を分類しまとめたものである。

Ａ　学習した内容を参考にして、他の分野ではどうなっているかを追究しようとする問い

「厚生労働省は、企業と労働者に対して何を行っているのか。また、経済面として財務省等とは関わりがあるのか。」、「株価の変動と企業との関わりについて、グローバル化の進む現代、日本の株価は世界の市場経済ともリンクしているのではないか。」

B　学習したことに対して関連する事柄や更に深めることで追究しようとする問い

「労働三権が確立された今、なぜ労働者は企業に対して声を上げづらいのだろうか。」、「グローバル化が進む現代で外国人労働者を法令違反する企業から守る制度や法律はあるのか。」、「バブル時代は株価がよかったということは、その時代には法令違反する企業は存在しなかったのか。」、「技術革新のみに専念し、表面上では成功した企業と、労働者の権利を守りながら、技術革新に成功し利益を上げた企業の違いは何か。」

C　学習した内容を自らの生活に生かすことを追究しようとする問い

「過労死で亡くなった労働者の家族は裁判をするが、その家庭への対応や、過労死した労働者がいた企業に対し、政府はどのようなことを行っているのか。」

D　学習した内容の定着が十分ではなく、再確認しようとする問い

「今回は国内の経済と企業、家計のつながりについて学んだが、自分自身それらの実態についてまだ理解できていないところがある。将来にも深く関わってくることなので、家計の立場からどのように法令違反する企業の対策を練っていけばよいかを知りたい。」

イ　課題

(ｱ)　単元の指導計画の重要性

今回の単元では「よりよい企業をつくるための方策」について考えた。そのためには企業を取り巻く環境を様々な角度から学習した上で、方策について考察することが重要であると考える。「景気の変動」や「為替相場の変動」「金融のはたらき」に関しても現在の企業を理解する上で大きな視点であり、これらの内容を学習した上で「よりよい企業をつくるための方策」を考察した方が、より労働者を守ることの重要性や、未習内容である政治分野に対する関心が高まったのではないかと考えられる。

(ｲ)　単元を貫く課題を設定する上での学習

今回は教員が単元を貫く問いを「よりよい企業をつくるための方策」と提示した。その前段階として、法令違反した企業について、厚生労働省労働基準局が平成 29 年に公表した「労働基準関係法令違反に係る公表事案」を資料として読み取りを行った。ここでの学習が不十分であったために、生徒の発表や新たな問いの中には「厚生労働省は、なぜ法令違反する企業の定義付けをしないのか」という答えが出てしまった。指導者が本単元の目標とそのために何を学習しておくべきかを明確にしておくべきである。

(ｳ)　生徒が考察する視点の明確化

第６時では、各班の発表に対して疑問点や新たな課題を考察し、質問や意見を発表させた。ここでの質疑や発表は積極的に発言し、意見交換する場面が見られた。指導者が「更に企業を良くするために」と考察する視点を明確に指示した方が、意見交換の質がより向上し、新たな課題を発見しやすくなったと考えられる。

(ｴ)　学習の振り返りの重要性

第６時のまとめでは、「よりよい企業をつくるための方策」を個人で再考察させてから、新たな課題を考えさせた。その際に個人での考察の発表を行い、今までの学習を振り返ることで新たな課題を設定しやすくなると考える。

３　指導事例３

学習指導要領　公民的分野　大項目　(3)　私たちと政治
第３学年　単元名　公民的分野　民主政治と政治参加「地方自治」

(1)　単元の目標

ア　自らが自らを治めるという民主政治の基本的な考え方と、その考え方に基づく地方公共団体の政治の仕組みについて意欲的に追究する。

イ　民主的な政治と政治参加に関わる課題を見いだし、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現する。

ウ　地方公共団体の政治の仕組みに関する資料を様々な情報手段を活用して収集することや、学習に役立つ情報を適切に選択するなどして、読み取ったり図表にまとめたりしている。

エ　地方公共団体の政治は、首長と議会の二つの機関を中心に行われていること、地方公共団体の政治の仕組み、地方自治は住民参加による住民自治が基本であることを理解する。

(2)　単元の評価規準

社会的事象への関心・意欲・態度	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
自らが自らを治めるという民主政治の基本的な考え方と、その考え方に基づく国や地方公共団体の政治の仕組みについて意欲的に追究している。	民主的な政治と政治参加に関わる課題を見いだし、対立と合意、効率と公正などの視点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	地方公共団体の政治の仕組みに関する資料を様々な情報手段を活用して収集し、学習に役立つ情報を適切に選択して、読み取ったり図表にまとめたりしている。	地方公共団体の政治は、首長と議会の二つの機関を中心に行われていること、地方公共団体の政治の仕組みを理解し、その知識を身に付けている。

(3)　研究主題との関わり

本単元では、対立と合意、効率と公正、個人の尊重と法の支配、民主主義などに着目して、地方自治の基本的な考え方、地方公共団体の政治の仕組み、住民の権利や義務について理解させる。そのために、単元を貫く問いについて、毎回の授業で具体的な地方公共団体の例を用いながら民主主義、首長や議会の関係、地方財政について考察する。そして、考察したことを基に地方公共団体への提案を構想する活動を単元末に行うことを通して、地方自治や我が国の民主政治の発展に寄与しようとする自覚や住民としての自治意識の基礎を育成する。

(4)　単元の指導計画と評価計画（５時間扱い）

時	○学習内容・学習活動	学習活動に即した具体的な評価規準 （評価の観点、評価方法）
＜単元を貫く問い＞区の今後の発展のためにはどうすればよいか。		
1	○地方自治が民主主義の学校といわれるのはなぜか。 ・区の組織表を見て、どんな部署が自分の生活と関わっているか考えてみる。 ・区に対する要望を考える。 ・どのような部署があれば、その要望がかなうのか考えてみる。	・班ごとに考えた部署に共通するのは誰のためなのかを考えさせ、地方自治が地域住民のためであることをまとめている。 （関心・意欲・態度、観察・ワークシート）
2	○前時で学習した住民が関わるとはどのようなことなのか。 ・区や東京都の事例を通して、地方議会と首長の関係性について学習する。 ・校舎を移転することは、誰が決めたことなのかを調べてみる。 ・直接請求権について学習する。	・新校舎建設についての資料を基に、区役所や住民がどのように関わっていたのかをまとめている。　（技能、ワークシート）
3	○地方公共団体の収支はどのようになっているのか。 ・区や東京都の歳入・歳出について学習する。 ・第１時で出した区への要望や区民アンケートにみられる内容から、よりよい歳出の在り方について考える。	・地方公共団体の財政について理解する。 （知識・理解、ワークシート） ・東京都や区の財政状況を踏まえて、区民の要望に沿った歳出の在り方を、効率と公正の視点から考察している。 （思考・判断・表現、ワークシート）
4	○区への提案書をグループで作る。 ・前時までの学習を振り返り、区の課題や区民の要望を踏まえた提案書を作成する。	・課題や要望を踏まえた提案書を作成している。 （思考・判断・表現、観察・ワークシート）
5（本時）	○区への提案書をグループごとに発表する。 ・グループごとに発表する。 ・発表を基に、各グループへの意見や疑問を考え、発言する。 ・今までの活動を総合的に振り返り、単元を貫く問いである「区の今後の発展のためにはどうすればよいか」についてワークシートにまとめる。	・単元を貫く問いへの考えや地方公共団体の政治への関わり方についてまとめている。（関心・意欲・態度、思考・判断・表現、ワークシート）

(5)　本時の指導計画

ア　本時の目標

(ｱ)　各グループの提案や学習してきたことを基に、区の今後の発展のための施策について考察する。

(ｲ)　地方公共団体の政治に住民が関わることの大切さやその方法について追究する。

イ　本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価規準
導入	○単元を貫く問いを確認する。 ○発表の仕方を説明する。	・各グループの発表を基に自分の考えを深めることが大切であることを説明する。	
展開①	○各グループの発表をする。 ○それに対して質問をする。	・効率と公正や様々な立場の視点から、各グループの提案が適切であるかどうか判断する。	
展開②	○各グループの発表を受けて、自分の班の提案書が効率と公正や様々な立場の視点から、現実的で実現可能であるかグループで再度検討をする。	・各班の提案書について効率と公正様々な立場の視点から評価する。	・各班の提案を効率と公正や様々な立場の視点でもって検討している。（思考・判断・表現、ワークシート）
まとめ	○単元を貫く問いに対する自分の考えをまとめる。 ○本単元を終えて、更に追究したいことや次単元で追究したいことについてまとめる。	・地方公共団体の政治に住民が関わる理由、話合いの活動について、将来どのように地方自治に関わっていきたいかをワークシートに記入させる。	・地域の政治に住民が関わる機会が多い理由について、考えを深めたことを記述している。（思考・判断・表現、関心・意欲・態度、ワークシート）

(6)　研究の考察

ア　成果

(ｱ)　「学ぶ意義」を実感できるにふさわしい課題の設定

単元を貫く課題として、「区の今後の発展のためにはどうすればよいか」という課題を設定した。第１時から第３時までは区の組織、首長と議会の関係、直接請求権という住民の権利、区や都の財政の特徴について、区役所の資料や区議会の議事録を読み取らせることで身近なこととして捉えさせるとともに、自分たちが生活する地域が住民自身によって運営されるという地方自治の本旨について理解させることができた。また、本校の校舎移転に伴う資料を使い、より身近な視点で地域住民と役所などが合意形成を図っていることを理解した上で、第４時と第５時では、地域住民の一人である生徒たちが単元を貫く課題について各班で話し合い、最終的に自分の意見としてワークシートにまとめ発言できた。このことから身近な地方公共団体の資料を使って得た知識や技能を活用し、考察、構想し、表現する活動に生かすことができ、生徒に学ぶ意義を実感させることができる有効な課題であったと考えられる。

(ｲ)　地方公共団体や次の学習へ向かう意欲の高まり

単元を通じて毎時間に単元を貫く課題との関連を考え記録させることで、各時間で習得した知識が、実際の地方公共団体でどのような目的や役割を果たしているか、どこをどのように改善すればよりよい暮らしを実現できるかということを、生徒自身に考えさせることができた。

第４時では区に対する意見や要望を生徒が出し合い、「区への提案書」として班ごとにまとめた。第５時では、それを一人一人が班の代表者として発表し、他の班からの意見を取り入れて「提案書」の内容を改善した。この学習活動の成果の一例を以下に挙げる。

「区は、高齢者や子供への福祉を手厚く行っているが、現在、それらの施設はどこも駅から遠いので、もっと交通の便がよい場所に設置するべきだ。」

→「駅前やロードサイドでは騒音があり、土地代が高いので、新たな施設をつくって移転するのではなく、施設ごとに住民の満足度を向上する策を、利用者と区で決めるべきである。そうすることで少しでも福祉に関する支出を抑えることができる。」

「区の人口を増やすためには美しい環境を保つべきだ」

→「ごみのポイ捨てなどのマナー違反への対応も大切だが、その予算を削ってでも、子育てや福祉に力を注ぐほうが将来的な区の人口増加につながるのではないか。私は、そのために美化ボランティアなど区の事業に参加してみたい。」

その結果、単元の終わりに記述した「更に追究したいことや次の学習へ向けて追究したいこと」では、学習したことを活用して地方公共団体や国政への意欲を生徒一人一人がもつことができた。おおむね以下の４つに類型化することができる。

A　区の政治について更に追究してみたいというもの

「予算案や条例案はどのように完成するのか。」、「ある予算を削って別の予算を増やすときは実際にどのようにして決められているか。」、「地元の区だけではなく、その地方自治体だけがやっている政策を調べてみたい。」

B　国の政治について追究してみたいというもの

「国の政治を担う人たちが国民の意見を聞き、国民のことを考えて政治をしているのか調べてみたい。」、「国の政治の仕組みの中でどのような人がどのような役割を担っているのか知りたい。」

C　経済の単元へのつながりがみられたもの

「公債費はどうやってなくしていくのか。」、「地方公共団体は、借金を全額返せる保証はあるのか。」、「国の借金はどうして増えているのか調べたい。」

D　自分の学習態度に関するもの

「今の自分の知識に足りないことを学び、もっとこうしたらよくなるだろうといった、自分の考えをもちたい。そうすることで、国の出来事に今まで以上に目を向けることができると思う。」

イ　課題

(ｱ)　発問の課題

今回は「区の今後の発展のためにはどのようなことをしたらよいのか。」という手段や方法を問うものとして設定をした。考察する時間が少なかったこともあり、「環境対策費を減らし、子供福祉費を増やす。」というような予算額を増減させる方法を書く生徒が多く見受けられた。手段や方法には理由という裏付けが必ずあり、学んだ知識を使って思考した理由こそが「学ぶ意義」を実感させるためには大切なものである。そ

のため、「理由」を問う課題を設定したほうが、学んだ知識を更に思考に生かすことができ、より成果が見られると考えられる。

(ｲ)　学びに向かう力が十分に身に付かなかった場合の指導

「学びに向かう力」を高めるために、生徒には各時間の学習内容と単元を貫く課題を関連していくことが求められていたが、各時における関連付けが十分でなかった生徒の中には、終末の課題に答えることができなかったり、課題に正対していなかったりした生徒がいた。例えば、「区のお金の使い方をもっと知りたい。」、「無駄遣いをなくしたい。」などというように、第１時から第３時で学習した区の仕組みや財政についての内容が定着していなかったり、個人的な意見を書いたりする例が見られた。発表や学び合いの時間は、それまでに学習した知識の習得の程度に大きく左右されることを考えると、今回も、各時間に習得すべき知識が十分に定着していないことなどが原因であると考えられる。第４時及び第５時の指導に力点が置かれてしまい、第１時から第３時における知識の習得が十分ではなかったと考えられる。

また、どの単元でも「単元を貫く課題」を設定して授業を進めていき、第１学年の最初から課題解決型の学習を取り入れ、知識の確実な習得を基にした話合いなどが学びに向かう力を高める上で重要であることと、授業者が意識して指導にあたらなくてはならないと考える。

＜高まらなかった場合のワークシートの例＞

〈まとめ〉

○区の今後の発展のためにはどのようなことをしたらよいのか。そのために皆さんはどのような活動をしますか。 自分が参加できるようなボランティアに参加してみる。
○今回の学習を通して、更に追及したいことや次の学習に向けて追究したいことを書きましょう。 ・都市開発のための働き掛け ・区のことについて

＜高まった場合のワークシートの例＞

〈まとめ〉

○区の今後の発展のためにはどのようなことをしたらよいのか。そのために皆さんはどのような活動をしますか。 ・区民と政治家が連携してお金の配分などを考え直したほうがよいと思った。 ・今まで以上にこのようなことに興味をもって、自分の意見をもつことが大切だと思った。
○今回の学習を通して、更に追及したいことや次の学習に向けて追究したいことを書きましょう。 今の自分の知識に足りないことを学び、もっとこうしたらよくなるだろうという自分の考えをもちたい。そうすることで、国の出来事に今まで以上に関心をもつことができると思うから。

Ⅳ　研究のまとめ

１　研究の成果

(1)　「単元を貫く問い」に関して

「単元を貫く問い」を生徒にとって関心の高いものにすることで、意欲的な学習態度の形成を図ることができた。単元を通して、生徒には常に解決すべき「問い」があり、毎時間、学習カード等に記入することで、生徒たちは今の学習が「単元を貫く問い」とどのようにつながっているのかを意識することができ、学びの意義を見いだすことができた。

また、指導者側の意識としても、単元を構造的に捉え、見通しをもった指導に当たることができ、より生徒に学ぶ意義を感じさせやすくなった。

(2)　「新たな問い」に関して

生徒の立てた「新たな問い」を分析すると、その問いの方向性は一様ではなかった。次の単元や分野ではどのようになっているかなど、関連する社会的事象に関心が向かう問い（次へ向かう問い)、学習した単元に関係する内容をもっと掘り下げようとする問い（深める問い)、学習した内容と自分たちの生活との関連を知ろうとする問い(関連付ける問い)、学習した内容の不十分さを補おうとする問い（振り返る問い）などである。どの問いにしても、生徒たちは自分の思考を整理し、自分にとって必要な課題を見いだすことができていた。このように学びたいと感じることこそが「学びに向かう力」であり、それを引き出すために必要なのは、有意性を感じることのできる学習の積み重ねであると考える。

２　今後の課題

(1)　「単元を貫く問い」に関して

「単元を貫く問い」は、生徒にも指導者にも見通しをもって学習に取り組み、学ぶ意義を感じさせることができることが分かったが、それゆえにいかなる問いを設定するかによって、単元の学習の成否が決まってしまう。また「単元を貫く問い」へ取り組み、「新たな問い」を設定させる段階に至るまでの指導の過程によって、最後の結果が大きく変わってしまう。意図的・計画的に授業を行わなければ、最後の「単元を貫く問い」での話合いも深まらず、出てくる意見も十分なものではなくなってしまう。その単元で捉えさせるべきことは何かを授業者が確実に把握し、そのために必要な学習内容を焦点化することで初めて単元末で深い学びに到達できるのではないか。授業者は単元のデザインを明確にし、どのように「問い」を設定し、展開するかに留意していくこと、カリキュラム・マネジメントの充実に努めていくことが求められる。

(2)　「新たな問い」に関して

「新たな問い」を生徒たちは各自の状態に応じて作成したが、その問いの質が深まらなかった生徒もいる。目的意識などのない単なる疑問や、単元で学習したはずの内容への疑問などがそれにあたる。このような生徒は、単元の学習から「学びに向かう力」が高まっていないことが考えられるので、それをいかに解消していくかが課題である。

また、生徒たちの立てた「新たな問い」をどのように評価していくかは大きな課題である。現段階では一定の時間で捉え、次の単元等で自分の問いを生かしていることが評価できればよいと考えるが、その評価方法については今後検討していく必要がある。

中学校数学研究開発委員会

目　次

Ⅰ　研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

Ⅱ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43

Ⅲ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
１　指導事例１【A領域】第３学年 二次方程式の利用 ・・・・・・・・・44
２　指導事例２【B領域】第１学年 平面図形の性質と基本的な作図 ・・48
３　指導事例３【C領域】第２学年 一次関数の利用 ・・・・・・・・・・52
４　指導事例４【D領域】第２学年 四分位範囲と箱ひげ図の活用 ・・・56

Ⅳ　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

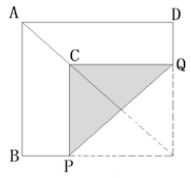
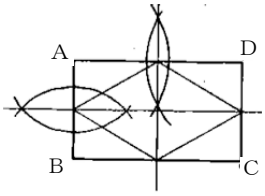
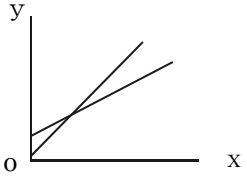
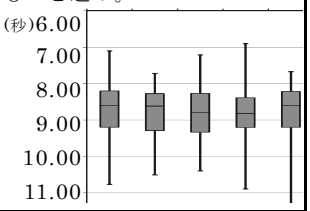
〈中学校数学研究開発委員会〉

研究主題

「生徒が数学的な見方・考え方を働かせ、楽しさを味わいながら数学的活動に主体的に取り組み、知識及び技能や思考力、判断力、表現力等を身に付ける教材及び指導方法の開発」

研究の概要

研究主題に迫るために、「生徒が主体的に取り組むこと」、「数学的な表現を用いて説明する力を身に付けること」及び「生徒が数学的な見方や考え方を働かせ発展的に学ぶこと」の三点に重点を置き、次の事例開発に取り組む。

領域・学年・内容	A　数と式	B　図形	C　関数	D　データの活用
	第３学年 **二次方程式の利用**	**第１学年** **平面図形の性質と基本的な作図**	**第２学年** **一次関数の利用**	**第２学年** **四分位範囲や箱ひげ図の活用**
育成する力	○二次方程式を具体的な場面で活用すること。 ○立式の過程を、数学的な表現を適切に用いて論理的に説明すること。	○線分の垂直二等分線など、基本的な作図の方法を理解すること。 ○図形の性質に着目し、基本的な作図の仕方について数学的な表現を適切に用いて説明すること。	○一次関数が実社会の中で活用されていることを理解すること。 ○一次関数を用いて具体的な事象を捉え考察し、表現すること。 ○グラフの交点の意味を数学的な表現を適切に用いて説明すること。	○箱ひげ図を用いることで、多くのデータを比較し、傾向を掴めることを理解すること。 ○データを比較し、数学的な表現を適切に用いて論理的に説明すること。
課題	正方形の紙を折ってできた△ＣＰＱの面積が 18 ㎠のときの辺ＣＰの長さを求めなさい。 Ｌ字型ＡＢＰＣＤの面積を求め、求め方を説明しなさい。	長方形の紙を折ってひし形を作りなさい。 できた折り目を頼りにコンパスと定規を用いてひし形を作図し、作図の仕方を説明しなさい。	中学校のチャリティーバザーで、蒸しまんじゅうを販売します。まんじゅうを作るために、蒸し器を１日 3000 円で借りました。まんじゅう１つの仕入れ値は 40 円です。もうけを出すために、あなたならいくらで売りますか。	クラスごとのクラス全員の 50ｍ走のタイムの分布から、クラス全員リレーを行ったとき１・２・３位となるチームを予想しなさい。 また、そのように考えた理由を説明しなさい。
数学的活動	折り紙を折って作った図形の面積について二次方程式を用いて考える。 	ひし形を折るときにできる折り目の線を活用して、コンパスと定規で作図する。 	単価と費用をそれぞれグラフに表す。交点に着目し、いくらで何個売れば利益が出るかを考える。 	並列した複数のデータから、条件に最も合致するものを選ぶ。 
数学的な見方・考え方	・図形の形やどの辺に着目して方程式を立式するのか。 ・等しい関係はどことどことで成り立つか。	・どこに線を引けば ①垂直二等分線を作図できるか。 ②四辺の長さは等しくなるか。	・傾きが変わると交点はどう変化するか。 ・交点を境に、グラフの左右は何が違うのか。	・どの箱ひげ図を選べばよいか（箱の位置や大きさ、ひげの長さ等）
評価	・図形から等しい関係を理解し、二次方程式を作ることができる。 ・二次方程式を解くことができる。 ・自分の考えを数学的な表現を用いて説明することができる。	・作図に関心を持ち、作図の方法を考えたり作図しようとしたりしている ・作図の方法について、数学的な表現を適切に用いて説明することができる。	・課題を読み取り一次関数の式を作り、グラフをかくことができる。 ・比例定数を変え、課題を解決しようとする。	・箱ひげ図から分布の様を読み取ることができる。 ・適切な数学的な表現を用いて、複数の箱ひげ図から一つを選ぶ根拠を説明することができる。
生徒の変容	等しい関係を方程式で表し、解を的確に吟味できる。様々な文章問題を解くことができる。	作図の仕方について、数学的な表現を適切に用いて説明することができる。	グラフの交点の意味を理解し、数学的な表現を適切に用いて説明することができる。	箱ひげ図のよさを学び、分析結果を数学的な表現を適切に用いて説明することができる。

Ⅰ　研究の目的

新学習指導要領解説「２数学科改訂の趣旨及び要点(2)数学科の目標の改善③数学的活動の一層の充実」の中で「生徒が、目的意識をもって事象を数学化し、自ら問題を設定し、その解決のために新しい概念や原理・法則を見いだすことで、概念や原理・法則に支えられた知識及び技能を習得したり、思考力、判断力、表現力等を身に付けたり、統合的・発展的に考えて深い学びを実現したりすることが可能となる。」さらには、「数学を既成のものとみなしたり、固定的で確定的なものとみなしたりせず、数学に創造的に取り組もうとする態度を養うことも期待される。」とある。また、「全国学力・学習状況調査」の結果から、中学校では「数学的な表現を用いて理由を説明すること」に課題が見られることが明らかになっている。

そこで本研究では、生徒一人一人が数学的活動を通して、数学への関心を高め、活動することを楽しみながら数学的な見方・考え方を豊かにしていく教材や指導法が必要であると考えた。開発に当たっては、問題発見・解決の過程が日常生活や社会の事象に関わる課題と数学の事象に関わる課題とを準備し、自ら数学的な見方・考え方を働かせて伝え合うなど、生徒が自分の考えを数学的に表現することを通して課題解決に取り組めるようにした。

Ⅱ　研究の方法

本研究では、生徒が数学的活動を通して楽しみながら主体的に学び、数学的な見方・考え方を働かせて課題解決に取り組む教材及び指導法の開発に取り組んだ。

１　生徒が主体的に取り組む数学的活動（Ａ；数と式　Ｂ；図形　Ｃ；関数　Ｄ；データの活用）

Ａ　数と式では、自ら折り紙を折る操作を通して、線対称な図形の性質、辺と面積の関係を見いだし、等量関係を明らかにし、二次方程式を立式し、課題解決に取り組む。

Ｂ　図形では、長方形の紙でひし形を折る操作を通して、線対称な図形などの性質に着目し、作図の具体的なイメージをもつ。作図の方法を、数学的な表現を用いて説明する。

Ｃ　関数では、身近な題材を基に、「利益を得るためにどうすればよいか」という問いをもち、一次関数のグラフを活用し、考察する。

Ｄ　データの活用では、テストの得点や50m走のタイムなど身近なデータについて、四分位範囲や箱ひげ図を用いて比較・考察することを通して、それらの必要性と意味を理解し、課題に適したデータを選択し、また選択した根拠を示して説明できるようにする。

２　数学的な表現を用いて説明する力を身に付けるグループ活動の設定

全ての事例に共通して、次の活動を取り入れる。

・　個人で問題を解決し、ペア活動やグループ活動を通して考えを広げ、深める。

・　数学的な表現や用語をカード化したキーワードカードをヒントとして用いることにより、論理的で筋道を立てた説明をしやすくする。

３　数学的な見方・考え方を働かせ、発展的に学ぶための教材開発

Ａ　折り紙の折り方を様々に工夫し、自分で作った図形について考える教材

Ｂ　折り紙の折り線から図形の対称性を考え、垂直二等分線や辺など、多様な視点で作図し、説明する教材

Ｃ　日常生活における数学的な事象を、条件を変えて考える教材

Ｄ　日常生活における様々なデータを、箱ひげ図を用いて整理・比較し考察する教材

Ⅲ　研究の内容

１　【Ａ領域】第３学年　二次方程式の利用

(1)　研究主題との関連

二次方程式の計算はできるが文章題になると解けないといった生徒の姿がよく見られる。「全国学力・学習状況調査」数と式に関する問題の「事象を多面的に見る問題」においても、考察の対象を明確に押さえることは80.8%と相当数の生徒ができているが、事象を数学的に表現することや、事柄が成り立つ理由を筋道を立てて説明することは、15.5%と課題があるという結果が示された。そこで、折り紙を用いることにより、生徒が苦手な文章題を楽しみながら主体的に解決できるのではないかと考えた。折り紙は、様々な考え方ができる身近な素材である。折り紙を折ることで、等しい関係、変容する面積のイメージがわきやすくなる。また、折った箇所を繰り返し確認できることで、数式を立てることが不得意な生徒でも、操作活動を通して、楽しみながら問題解決ができる。また、文章題で正解は出せても説明ができない生徒のために､キーワードカードを用いる方法を取り入れた。キーワードカードをヒントにして互いに説明する活動を通して、自分の考えを確認するとともに、数学的な表現を用いて論理的に説明することにつながると考えた。

(2)　本時の目標

ア　折り紙を使った操作活動を通して、二次方程式を楽しみながら考える。

イ　自分の考えを、数学的な表現を適切に用いて表現する力を身に付ける。

ウ　自分で面積を求める問題を作成し、グループ活動で多様な考え方を共有する。

(3)　本時において生徒が働かせる数学的な見方・考え方

ア　折り紙を使った操作活動を通して、二次方程式を利用し、問題を解決する。

イ　二次方程式の解が、問題に適しているかどうか吟味する。

ウ　自分の考えを他の人に分かるように論理的に説明する。

(4)　本時の評価規準

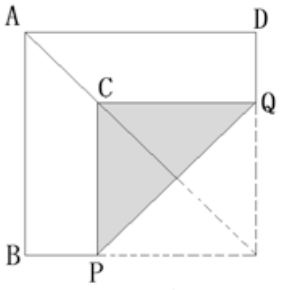
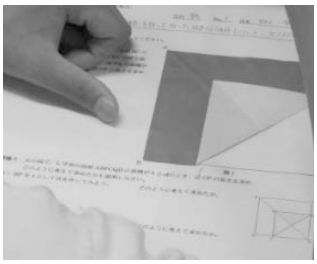
ア　関心・意欲・態度	イ　見方・考え方	ウ　技能	エ　知識・理解
○二次方程式を利用して問題を解決しようとしている。	○二次方程式を利用して問題を解決することができる。	○問題解決するために二次方程式を解くことができる。	○二次方程式を利用して問題を解決する手順を理解している。

(5)　生徒の変容

「次の問題を、方程式を作って解いてみよう」(プレテスト、ポストテストは(7)資料に掲載)

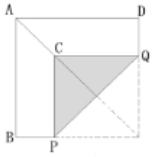
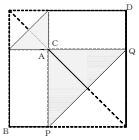
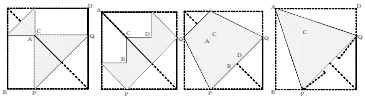
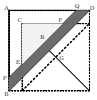
プレテスト ⇒	ポストテスト ⇒	期待される生徒の変容
縦10m横12mの長方形の土地に同じ幅の通路を作り、残りの面積が80㎡であるとき、通路の幅を求める。	縦20m横27mの長方形の土地に同じ幅の通路を作り、４つの花壇の面積の和がもとの長方形の土地の５/６倍であるとき、通路の幅を求める。	・等しい関係を方程式で表し、解を的確に吟味して解決できるようになる。 ・自分の考えを数学的な表現を用いて説明することができる。

(6)－1　本時の展開

	○学習活動	・指導上の留意点	◇評価（評価方法）
導入 10分	○一辺が 10 ㎝の折り紙を折り、ワークシートに貼る。  	【手順】 ①対角線ＡＣを折り、元に戻す。 ②対角線ＡＣの線上に頂点Ｃがくるように折り、直角二等辺三角形を折る。 ③辺ＢＣ,ＤＣを折り返してできた頂点をＰ、Ｑとする。 ④ワークシートに貼り、Ａ～Ｐの記号を書き入れる。	
展開 30分	個人 ○問題１ 辺ＢＣ折り返し点をＰ、辺ＤＣの折り返し点をＱとする。△ＣＰＱの面積が 18 ㎠のとき、辺ＣＰの長さを求める。 グループ ○問題２ Ｌ 字形の図形ＡＢＰＣＱＤの面積が 80 ㎠のとき、辺ＣＰの長さを求め、どのように考えて求めたかを説明する。 ・自分の考えをグループの友達に説明する。 ・解が無理数の場合、問題にあった解を吟味する。	・辺 CP の長さをｘｃｍとして、面積の関係から二次方程式を作れるようにする。 ・話し合いでなく、個人で解決に取り組ませる。 ・グループでの学び合いを価値付ける。 ・キーワードを用いて数学的な表現で説明できていることを価値付ける。 ・記号を用いて具体的に説明するよう促す。 	◇自分の考えを数学的な表現を用いてグループの人に説明することができたか。 （観察、ワークシート） ◇面積の求め方をグループ内で共有することができたか。 （観察、ワークシート）
まとめ 10分	○グループで今日の授業を振り返り、振り返りシートに記入する。	・振り返りの視点を全体で確認する（立式できたか、式の意味を説明することができたか、説明するときに数学的な表現を用いることができたか等）。	◇数学的な表現を適切に用いて表現する力を発揮できたか。 （ワークシート）

※　基礎コースは問題２までとする。

(6)－2　次時の展開

	○学習活動	・指導上の留意点	◇評価（評価方法）
導入5分	○前時の振り返りをする。	・ワークシート、見本を見せて確認する。 	
展開Ⅰ 10分	個人 ○問題３ 最初の問題から、更に図形を折り返し、自分で面積を求める問題を作る。 	予想される形  更に発展的な折り方の形 	◇意欲的に問題を作ることができたか。 （観察）
展開Ⅱ 30分	グループ ○問題４ 作成した問題をグループ内で説明し合い、グループとして発表する問題を決める。 ○全体で、各グループの問題を共有する。	グループ構成員の役割 ①折った図形を黒板に貼る。 ②式を作り計算し、確かめる。 ③数学的な表現を用いて説明する。 ④他の計算方法がないかを考える。 ⑤問題を更にアレンジできるか考える。	◇グループ活動で、問題を深く考え、発展させ共有することができたか。 （観察、ワークシート）
まとめ5分	○グループで、今日の授業を振り返り、振り返りシートに記入する。	・振り返りの視点を全体で確認する（折り方を工夫して問題を考えることができたか、友達が考えた問題を解決して説明することができたか等）。	◇数学的な表現を適切に用いて表現する力を発揮することができたか。 （ワークシート）

(7)　考察

ア　開発教材について

折り紙を折る操作活動は、生徒が興味をもって集中して取り組むために効果的であった。面積の問題でも、実際に折り紙を折る操作は、等しい関係や面積が変わっていく様子や長さなどを具体的にイメージするために効果的であった。問題２では、方程式を使わなくても答えを求められる生徒がいることを想定し、解が無理数になる問題を用いた。

イ　キーワードについて

答えは出せても数学的に説明するのが苦手な生徒にとって、キーワードカードは説明の手掛かりとなった。

例）選択したキーワードカード；台形、三角形、長方形、正方形、円の面積、長方形の周、～をｘとする、□＝□、ｘ＝□、□＜ｘ＜□、□≦ｘ≦□、二次方程式の解の公式、（　）（　）＝０
更にカードを選んで文章化；ｘ＞０なので問題に合わない　等

文章題では、説明することを最初からあきらめてしまう生徒が多いが、キーワードカードを用いることによって、例えば問題１で「ｘ＝６。－６は問題に合わない」と書いていた生徒が「ｘ＝±６。０≦ｘ≦10 よりｘ＝－６は問題に合わない。よってｘ＝６」と文章を補いながら書けるようになった。

ウ　グループ活動について

グループ内で説明することで、自分の考えを整理し矛盾点がないか確認することができた。また、自分の考えを相手に分かりやすく説明するために、数学的な表現を用いて工夫を重ねることが、考えを深めることにつながった。個人で問題解決をしているときは不安だった生徒も、グループ活動を通して「解は合っているか」「どのキーワードカードが使えるか」「この説明でよいか」等、確認し合うことができ、安心して問題解決に取り組む様子が見られた。

エ　プレテスト、ポストテストによる生徒の変容

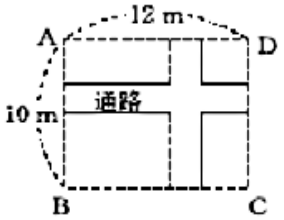
プレテストでは、無解答だったり、正解は出せるが説明できなかったりする生徒が見られたのに対し、ポストテストでは、立式できる生徒が増えた。また、解を的確に吟味し、自分の考えを表現できる生徒が増えた。

(8)　資料

＜プレテスト＞

３年　　組　　番　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

縦の長さが 10m、横の長さが 12mの長方形の土地がある。
右の図のように、縦と横に同じ幅のまっすぐな通路をつくり、通路を除いた土地の面積がちょうど 80 ㎡になるようにしたい。
通路の幅を何mにすればよいか。

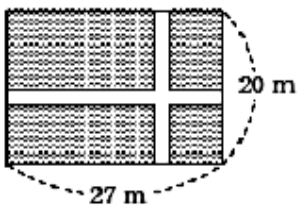


（答）＿＿＿＿＿＿＿＿

＜ポストテスト＞

３年　　組　　番　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿

縦の長さ 20m、横の長さが 27mの長方形の土地がある。
この土地に右の図のような同じ幅の道をつくり、４つの長方形の花だん（色の付いた部分）をつくる。４つの花だんの面積の和がもとの長方形の土地の面積の$\frac{5}{6}$倍であるとき、道幅を求めなさい。



（答）＿＿＿＿＿＿＿＿

２　【Ｂ領域】第１学年　平面図形の性質と基本的な作図

(1)　研究主題との関連

数学を苦手と感じる生徒は他教科と比べて多い傾向にあるが、図形の単元は普段の生活場面や、身の回りに様々な図形が使われていることから、数量に比べ身近な内容であるといえる。また、視覚的に捉えることができるため、生徒にとって理解しやすく、数学の楽しさを感じることができる教材であると考える。

一方、「全国学力・学習状況調査」の結果【平成 29 年度数学Ｂ１（２)】から、「数学的な表現を用いた理由の説明」に課題が見られ、図形についても同様であることが明らかになった。例えば、どのような回転移動になっているかを説明する問題では、東京都の正答率は 15.9%、全国の正答率は 14.0%であった。また、無解答率も 18.0%と高く、どのように説明したらよいのか分からないという生徒の反応が推測される。そこで本教材では、キーワードカードを用いることで、表現することへの抵抗感を減らすとともに、数学的な表現を用いることを促す。さらに、個人の学びの後にグループ活動を取り入れることにより、多様な視点を得たり、学び合いを通して解決の過程を振り返ったりすることができるようにした。

(2)　本時の目標

ア　ひし形の性質を利用し、その作図ができる。

イ　ひし形の作図の方法について、数学的な表現を適切に用いて説明できる。

(3)　本時において生徒が働かせる数学的な見方・考え方

どこに線を引けば垂直二等分線を作図できるか、四辺の長さは等しくなるかを考えながら作図する。

(4)　本時の評価規準

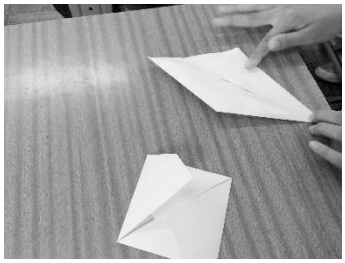
ア　関心・意欲・態度	イ　見方・考え方	ウ　技能	エ　知識・理解
○作図に関心をもち、基本的な作図を利用して、ひし形の作図の方法を考えたり作図をしたりしようとしている。	○ひし形の性質を利用して作図方法を考えることができる。 ○作図の方法を正しい用語を用いて表現することができる。	○ひし形の作図ができる。 ○いろいろな条件を満たす作図をすることができる。	○ひし形の作図方法を理解している。 ○ひし形の性質を理解している。 ○数学の用語の意味を理解している。

(5)　生徒の変容

「作図方法を説明しなさい」(プレテスト、ポストテストは(8)資料に掲載)

プレテスト ⇒	ポストテスト ⇒	期待される生徒の変容
線分ＡＢの垂直二等分線を作図し、作図の方法を語群の言葉を用いて説明する。	ひし形を、線分ＡＢを基にして作図し、作図の方法を語群の言葉を用いて説明する。	作図の仕方について、数学的な表現を適切に用いて説明することができる。

(6)　本時の展開

	○学習活動	・指導上の留意点	◇評価（評価方法）
導入6分	○紙を折ってひし形を作る。 	・長方形の紙を用意する。 ・机間指導を行い、生徒が課題を理解できているかを把握する。	◇ひし形の性質を確認しながらひし形を作ろうとしているか。（観察） 例）2本の対角線が互いに垂直二等分線になっている。
	○ひし形の性質を確認する。 ・辺の長さが等しい。 ・対角線が垂直に交わる。	・ひし形の特徴を板書する。	
展開30分	○紙を折ってできた線を確認する。	・ひし形を折るときに必要な線を全体で確認し共有する。	
	個人⇒グループ ○折り線を頼りに、コンパスと定規を使ってひし形を作図する。	・作図のルールを確認する。（定規は直線を引く道具、コンパスは円をかいたり等しい長さをはかりとったりする道具等） ・まず個人で作業し、途中からグループ（4人程度）で教え合いながら作図させる。	◇垂直二等分線や等しい長さの辺など、これまでに学習した作図の仕方を適切に用いて作図しているか。 （観察、ノート、ワークシート）
	○説明するときに使えそうなキーワードカードを選ぶ。 ○選んだキーワードカードを活用してひし形の作図の仕方を説明する。	・グループで選ばせる。選んだカードを全体で確認する。 ・キーワードカードを適切に用いた文章になるように補助する。	◇適切な言葉を用いて説明できているか。 （ノート、ワークシート）

まとめ 14分	○対角線に着目して、改めて作図の方法を説明する。 ＜振り返り＞ ○二人組で、今日の授業の内容を振り返りノートに記述する。	・対角線に着目させ、必要な作図を確認する。 ・振り返りの視点を全体で確認する（学んだことは何か、できるようになったことは何か等）。	 ◇学んだことなどを的確に記述することができているか。（ノート）

(7)　考察

ア　開発教材について

導入時のひし形を折る作業では、折り進めるうちに正方形ができてしまう生徒が多かった。ほとんどの生徒がひし形の性質を想起できていたにもかかわらず、折るという作業に転用できないという実態が明らかになった。しかし、ひし形を折るときに必要な線を全体で共有したことにより、作図はスムーズにできる生徒が多く見られた。折るという数学的活動が、ひし形の性質に着目した作図につながったと考える。

イ　キーワードカードの活用について

日頃から数学的な表現を用いて説明する経験が不足している生徒たちにとって、キーワードカードは次のように説明の手掛かりとなった。

例）選択したキーワードカード；線対称、中心、中点、直線、垂直、対角線、垂直二等分線
更にカードを選んで文章化；「ひし形は対角線で線対称な図形であり、対角線は垂直二等分線になっている。」等

このように、説明が苦手な生徒の中にも、キーワードカードを並べ、言葉をつないで自分なりに説明しようとする姿が見られた。また、話し合う姿から、キーワードカードは、生徒が数学的な表現を適切に用いて説明するだけではなく、既習事項を想起し、それぞれの意味を再確認する上でも有効であることが分かった。

一方、「垂直二等分線」というカードを選び、「垂直二等分線する」といった説明をする生徒もまだ見られたことから、数学的な表現を用いて説明する経験を積ませるとともに、適切な表現の仕方を繰り返し指導する必要があると考える。

ウ　グループ活動について

個人の作業からグループでの作業に切り替えたことで、「どのキーワードカードを使ったか」、「この説明でよいか」といった相談が始まった。各自が考えた説明の仕方について主体的に教え合い、よりよい説明の仕方へと修正する姿が見られた。また、それぞれのキーワードカードの意味について確認し合う姿も見られた。グループ活動では、まずは自分で考えた上で、それぞれの考えを伝え合うことにより、学びの深まりが見られた。

エ　プレテスト、ポストテストによる生徒の変容

語群の言葉を用いて説明しようという生徒が増え、数学的な表現を用いようとする意識の高まりが見られた。しかし、説明しようとするあまり、「点Ａにコンパスの針をさして」等、説明が細かくなりすぎてしまう生徒も見られた。

(8)　資料

＜プレテスト＞

クラス　　番号　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

1　線分ＡＢの垂直二等分線を作図しなさい。

A ——————————————————— B

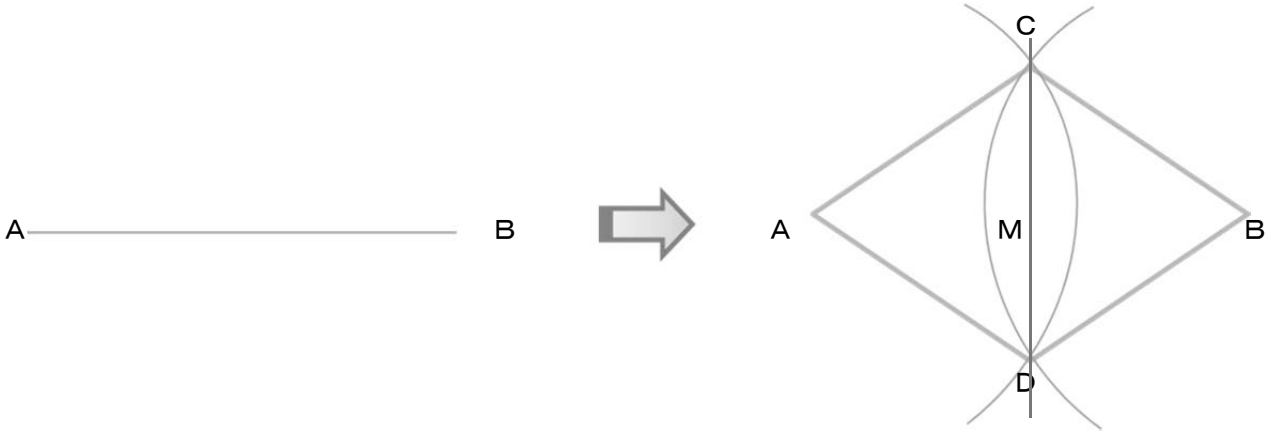
2　上の作図の方法を語群の言葉を使って説明してみよう。

【語群】垂直　垂線　直角　対称軸　対頂角　半径　弧　弦　直径　線対称　点対称
線分　直線　中点　中心　垂直二等分線　角の二等分線　交点　対角線　平行

＜ポストテスト＞

クラス　　番号　　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

ひし形を線分ＡＢを基にして、次のように作図した。作図方法を下の語群の言葉を用いて説明してみよう。



【語群】垂直　垂線　直角　対称軸　対頂角　半径　弧　弦　直径　線対称　点対称
線分　直線　中点　中心　垂直二等分線　角の二等分線　交点　対角線　平行

３　【Ｃ領域】第２学年　一次関数の利用

(1)　研究主題との関連

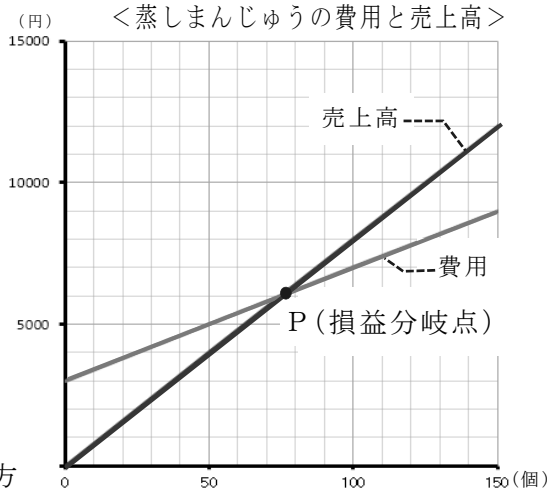
中学校における関数領域が生徒が苦手とする分野であることは、以前より指摘されていることである。これまで、様々な研究・実践が重ねられてきた。

新学習指導要領では、中学校第２学年における一次関数の活用について、「一次関数を用いて具体的な事象を捉え説明することが重要になる。そのために、具体的な事象を式で表現することによってそれが一次関数であると考えられるかどうかを判断したり、具体的な事象に関する観察や実験の結果を一次関数とみなすことによって未知の状況を予測したりできるようにする。」と述べられている。「全国学力・学習状況調査」の結果からも、関数の内容については、実生活の場面との関連を図りながら充実を図ることが期待されている。

そこで、「二つのグラフを扱う現実場面の問題を、グラフの交点を考察する数学的活動を行うことで解決し説明する過程を通して、一次関数と比例のグラフの交点の意味理解を深める」教材を開発することとした。

本教材では、蒸しまんじゅうを販売して収益を得るという場面を、右図のようにグラフ化する。グラフの交点Ｐ（損益分岐点）に着目し、交点の右側から収益が生まれることなどを考察できるようにする。

<蒸しまんじゅうの費用と売上高>



(2)　本時の目標

ア　グラフの交点が損益分岐点であることを理解する。

イ　損益分岐点に着目し、いくらで販売するか考察することができる。

(3)　本時において生徒が働かせる数学的な見方・考え方

ア　単価や仕入れ量が変化すると損益分岐点も変化することに着目して、問題解決に取り組む。（タブレットＰＣの操作）

イ　損益分岐点に着目し、問題解決の過程を説明する。

(4)　本時の評価規準

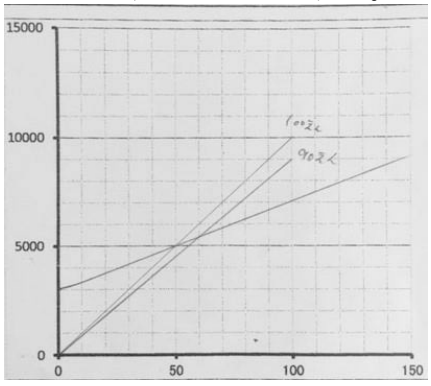
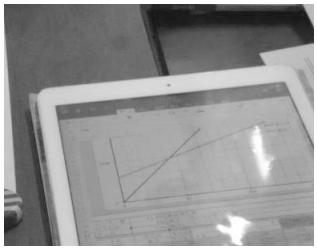
ア　関心・意欲・態度	イ　見方・考え方	ウ　技能	エ　知識・理解
○比例と一次関数のグラフを利用して問題を解決しようとしている。	○単価の変化に伴い損益分岐点がどのように変化するかを考えることができる。	○グラフの交点から、販売する個数と売上げを読み取ることができる。	○損益分岐点とグラフとの関係について理解する。

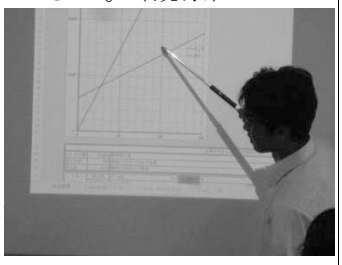
(5)　生徒の変容

「二つのグラフの交点の意味を考えてみよう」（プレテスト、ポストテストは(8)資料に掲載）

プレテスト ⇒	ポストテスト ⇒	期待される生徒の変容
一次関数と比例のグラフの交点の求め方の確認、比例のグラフの傾きと二つのグラフの交点の関係を見いだす。	一次関数と比例のグラフの交点の意味を説明する。 グラフの傾きに伴って交点がどのように変化するのか、数学的な表現を用いて説明する。	損益分岐点の意味を理解し、数学的な表現を適切に用いて説明できるようになる。

(6)　本時の展開

	○学習活動	・指導上の留意点	◇評価（評価方法）
導入 6分	○問題場面を理解する。 ○○中学校では、チャリティーバザーで蒸しまんじゅうを販売することになりました。蒸し器を1日3,000円で借りることにしました。蒸しまんじゅうの仕入れ値は1個40円です。売るためにかかる費用を必要経費といいます。 例）1個売る場合の必要経費 3000＋40＝3040円	・１個、２個ではなく、まとまった数を仕入れる必要がある等、実生活の問題場面として理解させていく。 ・「儲け」＝「売上」－「必要経費」であることを理解させる。	◇意欲的に現実場面を理解し、数学を用いて問題を解決しようとしているか。 （観察）
展開1 10分	個人 ○問題１ 30個売るときの必要経費を算出する。 ・40×30＝1200 1200＋3000（蒸し器）=4200(円)		◇必要経費を仕入れ値と個数、レンタル代から算出することができるか。（観察）
展開2 30分	グループ ○問題２ 80円で販売するとき、収益を得るためには何個売ればよいか、考察する。 ・売り上げは個数に比例するので、 ｙ＝80x ○問題３ 収益を得るために、いくらの単価で何個売ればよいかを考える。 ＜話合いを促す補助発問＞ ① あなたの班では、100個売るといくらの儲けがでますか。 ② あなたの班では50個から儲けがでるようにするためには、単価をいくらにすればよいですか。 	・1個80円で販売するとき、販売個数と売り上げの関係を表・式・グラフを用いてグループで考察する。 ・考察した結果をワークシートにまとめる。 ・タブレットＰＣを班に１台ずつ配布する。 ・４人のグループで、タブレットＰＣを用いて、単価を変えるとグラフ交点が移動することを観察する。  ・タブレットＰＣの操作を通して、二つのグラフの傾きによって交点が変化することを実感する。 ・売る個数を様々に想定	◇タブレットＰＣを用いた話し合いに積極的に参加できているか。（観察） ◇グラフの交点が傾きと連動して動くことを現実場面で理解している。 （観察、ワークシート） ◇他人の意見を理解

	○選んだ言葉（キーワードカード）を利用して比例のグラフの傾きと交点の関係を説明する。	し、必要経費を分かりやすく表現する。 ・班ごとにキーワードカードを配布し、活用を促す。	し､自分の意見を論理的に説明できているか。（観察） ◇グループの意見をまとめて説明できているか。（観察） 
まとめ4分	○損益分岐点とは何か、数学的な表現を用いた説明をノートに書く。	・数学的な表現を用いて説明させる。	◇損益分岐点の意味について説明できるかを振り返っている。（ノート、観察）

(7)　考察

ア　開発教材について

現実的な場面で関数を活用する教材に生徒は興味深く取り組んだ｡ポストテストでは、ほぼ全生徒が、仕入れ値、機材のレンタル代金、単価の関係という現実生活の場面を、比例と一次関数のグラフから読み取ることができた。また、説明も数学的な表現を用いたものに変化した。例えば､「比例のグラフの傾き（単価）が大きくなると交点（損益分岐点）がｙ軸に近づくので､より早く収益を上げることができる｡逆に売値を下げると、交点がｙ軸から離れる｡」などの説明をしていた。

イ　キーワードカードの活用について

損益分岐点を求める問題解決場面では、タブレットＰＣを用いた操作の後に「キーワードカード」を用いて説明の仕方を話し合う活動を設定した｡「キーワードカード」をヒントにして、数学的な表現を適切に用いて考察する姿が見られた。説明の中でも、積極的に数学的な表現を用いることができた。

選択したキーワードカード；ｘ軸、ｙ軸、原点、比例、一次関数、傾き、交点、移動、必要経費 売り上げ、仕入れ値、単価

ウ　グループ活動について

問題解決場面では、各グループに１台ずつタブレットＰＣを配布し、４人が協力して問題解決に取り組むことを促した。単価をいろいろと変えることでグラフの傾きが変わり交点の位置が変化していく様子を繰り返しの操作を通して確認することができたため、グラフの傾きと交点の関係について理解しやすくなったと考える。

また、多くの収益を得るためには単価と仕入れ量をどのように設定すればよいかについて､「60 円位ならば買ってもらえるのではないか」「仕入れ量が多いと売りさばくのに面倒だ」等、売り手の立場に立って考えることによって、損益分岐点の意味の理解を深めることができたと考える。

エ　プレテスト、ポストテストによる生徒の変容

プレテストでは、グラフの傾きに連動して交点が移動することについて理解できている生徒は約半数にとどまっていたが、ポストテストでは、ほぼ全員が単価と損益分岐点との関係を数学的な表現を用いて説明することができた。

(8)　資料

＜プレテスト＞

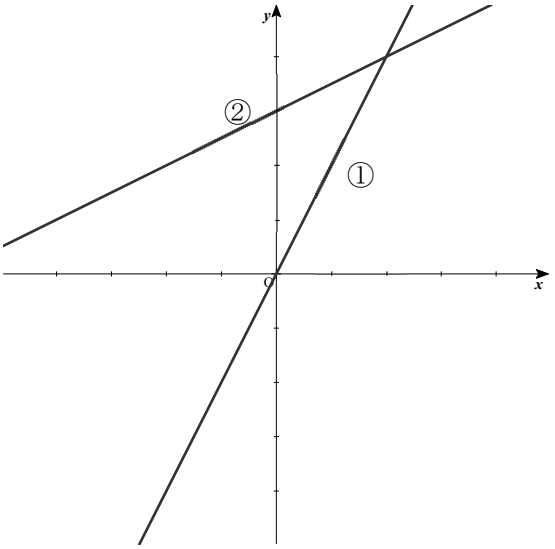
クラス　　番号　　氏名

1　次の２つのグラフ

y=80x…①

y=40x+3000…②

のグラフの交点の座標を求めなさい。



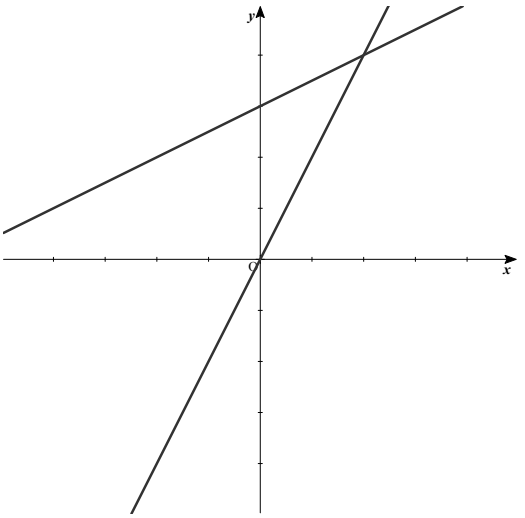
2　１において、①のグラフの傾きが大きくなると、グラフの交点はどうなりますか。

＜ポストテスト＞

クラス　　番号　　氏名

1　右のグラフは、仕入れ値が 40 円、販売するのに必要なレンタル代金 3000 円、１個 100 円で販売するときのグラフです。

グラフの交点の座標を求めなさい。



2　１で求めたグラフの交点は何を表していますか。自分の言葉で説明してみましょう。

3　１個当たりの値段を下げるとグラフの交点はどうなりますか。

４　【Ｄ領域】第２学年　四分位範囲と箱ひげ図の利用

(1)　研究主題との関連

新学習指導要領では、「資料の活用」の領域の名称が「データの活用」に改められる。小学校では度数の分布を表やグラフに表す、データの平均や散らばりを調べるなどの活動を通して、統計的に考察したり表現したりすることを学習するとともに、ドットプロットからデータの傾向を読み取ったり、最頻値や中央値を見付けたりすることを学ぶ。中学校数学ではこれらの学習を踏まえて、統計的な見方や考え方を更に深めていくことになる。

特に第２学年では、新たに四分位範囲や箱ひげ図の学習を通して、収集したデータを縮約することで、大量のデータを比較することを学ぶ。本教材では、生徒の興味や関心の高い区内全公立中学校の 50m 走のデータを箱ひげ図で示し、リレー競走を行ったときにどのチームが上位に入るのかをタブレット型パソコンを操作しながら予想させるという、楽しみながら考え、意欲的に意見を出し合える活動を設定した。

また、平成 28 年度「全国学力・学習状況調査」活用問題の結果からは、資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することに課題があることや、無解答率が 33.2%と最も多くなっていることが指摘されている。これらのことから、目的に応じて資料から必要なデータを抽出し、数学的な表現を適切に用いて考察できるよう、キーワードカードを補助として用いることにより説明する力を育成したいと考えた。

(2)　本時の目標

ア　多くのデータの傾向を視覚的に捉える手法として、箱ひげ図のよさを理解する。

イ　データ活用のための処理方法として、与えられた箱ひげ図から考察し判断することができる。

ウ　目的に応じて、箱ひげ図から読み取れる四分位範囲、中央値やひげの長さなどを用いて事象を考え、その結果を数学的な表現を用いて適切に説明することができる。

(3)　本時において生徒が働かせる数学的な見方・考え方

ア　与えられた箱ひげ図の特徴を捉え、数学的な表現を用いて説明する。

イ　データを考察し、最も条件を満たすものを選択する。

(4)　本時の評価規準

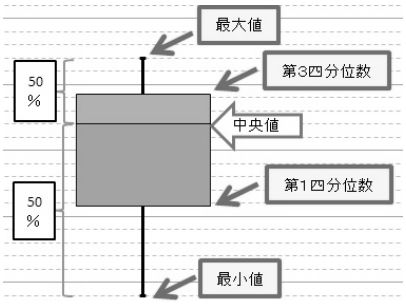
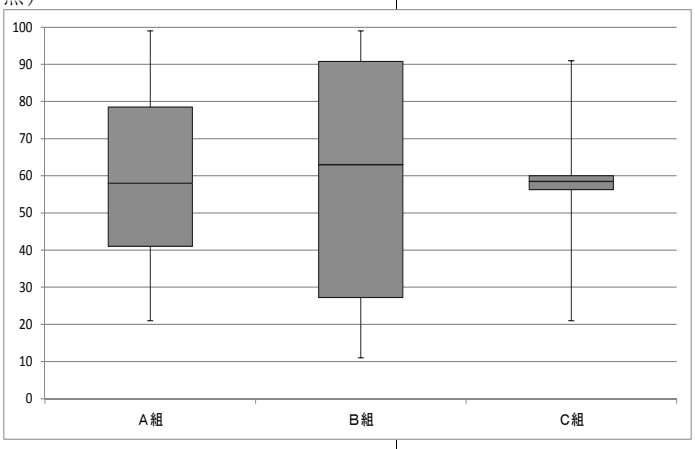
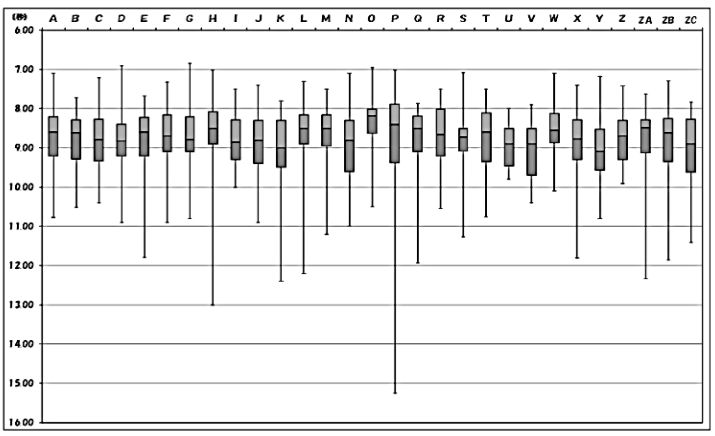
ア　関心・意欲・態度	イ　見方・考え方	ウ　技能	エ　知識・理解
○条件に当てはまるデータを選び､その理由を説明しようとする。 ○他者の意見と自分の意見を比較し、よりよい選択をしようとする。	○多くの箱ひげ図を見て、大まかな傾向を捉える。 ○他者の分析の結果から、自身の選択が本当に良いのか批判的に考察する。	○箱ひげ図を読み取ることができる。	○箱ひげ図を読み取るために必要な値を理解している。 ○四分位範囲・箱ひげ図の必要性と意味を理解する。

(5)　生徒の変容

「目的に応じてデータを分析し、的確な表現で説明する」(プレテスト、ポストテストは(8)資料に掲載)

プレテスト ⇒	ポストテスト ⇒	期待される生徒の変容
平均値（代表値）を求める。ヒストグラムを作成して、分布の違いを比較する。	箱ひげ図から目的に応じて分析する。	箱ひげ図のよさを生かして、分析結果を数学的な表現を用いて説明することができる。

(6)　本時の展開

	○学習活動	・指導上の留意点	◇評価（評価方法）
導入 5分	○前時に学習した「箱ひげ図」について復習する。	・図を示して確認する。 	
展開1 15分	○Ａ中学校の１年生で行った数学「方程式のテスト」の平均点を知る。 ・３クラスとも、58.7点 個人 ○平均点が同じということから、どのようなことが予想できるかを考える。 ・「平均点が同じ」だから、学力が同じくらい、また点数が同じくらいなのではないだろうか。	（点） 	
	グループ ○箱ひげ図を見て、それぞれのクラスの特徴について説明する。 ・ひげの長さ ・箱の大きさ ・中央値　等	○４人程度のグループで教え合い意見を交換させる。 ・キーワードカードを配布する。 ・数学的に適切な表現になるよう、必要に応じて補いながら進める。	◇箱ひげ図を読み取り、数学的な表現を用いて適切に説明することができる。（観察）
	全体 ○「方程式をよく理解している」と思われるクラスは三つのうちどのクラスですか。 ・何点取れたら理解したことになるのか。 ・半分以上は出来た方がよい ・60点以上ではないか。 ・単元末テストとしたら80点以上は取れていないと単元を理解したとはいえない。	・考え方を板書にまとめ共有する。	◇必要なキーワードを用いて、判断した理由を言うことができる。（発表）
展開2	○区内公立中学校の１年生各クラスの 50m走のタイムの箱ひげ図を見て、全員リレーを行ったときの１、２、３位を予想し、理由を説明する。	＜区内公立中学校第1学年各クラス　50m走タイムの箱ひげ図＞ 	

25 分	自力解決⇒グループ ○各自がキーワードカードを用いて、グループのメンバーに予想とその理由を伝える。 ○全員の発表が終わったところで班としての見解をまとめる。	・キーワードを用いて説明できるように補助をする。 ・似たような箱ひげ図の場合は着眼点によって予想が異なるとがあるため、意見が分かれたことを説明させる。	◇数学的な表現を適切に用いて説明しようとしているか。 （観察・ワークシート）
まとめ 5 分	○グループの意見を全体で共有。 ・同じ目的でも、活用するデータや着眼点によって判断が異なることに気付く。	・どのような視点からそのように考えたのかが分かるように「視点」と「考え」を分けて板書する。	◇観点や考え方によって多様に考察できることに気付く。 （観察）

(7)　考察

ア　開発教材について

最初は、ひげの長さや先端が気になってしまい、データの特徴を示す四分位範囲（箱の部分）に着目できない生徒が多かった。しかし授業を通して、箱ひげ図の見方の理解が深まり、中央値や上位 75%の集団、中央の 50%に相当する箱の部分に着目して考察できるようになった。展開１では「方程式をよく理解している」という判断基準が明瞭でない課題に取り組ませたところ、「60 点以上とった生徒の割合」など、自分で基準を決めて箱ひげ図に横線を引き、中央値や四分位範囲と横線の位置関係に着目して考える生徒が出てきた。このような考えを全体で共有することにより、展開２では、基準となるタイムを決めて箱ひげ図に横線を引き、データを選別する姿が見られた。

イ　キーワードカードの活用について

キーワードカードを配布することにより、説明の際に数学的な表現を使おうとする姿につながった。キーワードカードの有効性について生徒に行った事後アンケートでは、数学が得意ではない生徒から、「説明する場面で、何をどのような言葉で表現すればよいか分からないときにあって助かった」、「問題解決の際のヒントになる」という回答が多く寄せられた。このことからキーワードカードは、数学的な表現を適切に用いて説明させるために有効であるだけでなく、数学的な思考を促す効果もあると捉えられる。

なお、本単元では必要なキーワードは少ないが、多くのキーワードが必要となる単元では、生徒の実態に合わせてキーワードを精選する必要があると考える。

ウ　グループ活動について

本単元では、条件を満たすデータを選んでいく活動が主であったため、自分の意見に自信がもてず、友達の意見を参考にしたい場面が多かった。どのデータを選べばよいのかだけでなく、箱ひげ図に線を引いてデータを絞り込むという工夫まで、学び合いを通して生徒が主体的に数学的な見方･考え方を働かせ､解決に向かっていく姿が見られた。

エ　プレテスト、ポストテストにおける生徒の変容について

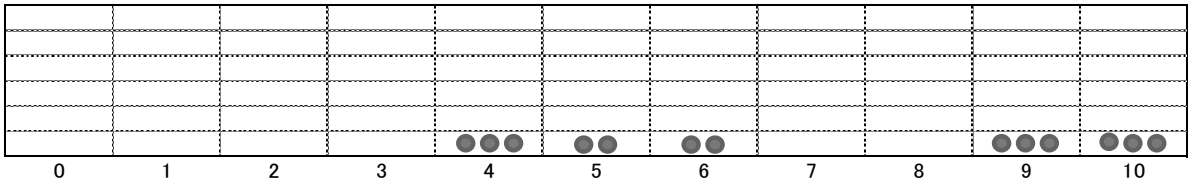
プレテストでは、ドットプロットとヒストグラムを扱い、同じ平均点であっても分布の様子が異なる場合を確認した。異なる分布を大まかに比較する手段として、箱ひげ図や四分位範囲を学習した。ポストテストでは、多くの生徒が、20 個の箱ひげ図を中央値の位置で数個に絞り込む、判断の基準となる横線を引く、最大値や最小値に捉われずに四分位範囲で比較する、といった方法を用いることができるようになった。

(8)　資料

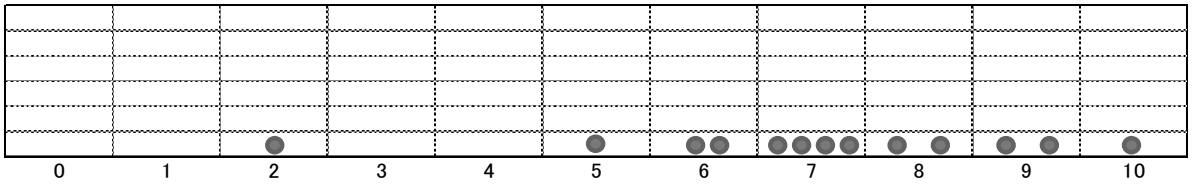
＜プレテスト＞

数学の二つの習熟度別少人数クラスで、数学の小テストを行いました。テストは 10 点満点で、次のような結果になりました。

クラスA　10点　10点　10点　9点　9点　9点　6点　6点　5点　5点　4点　4点　4点



クラスB　10点　9点　9点　8点　8点　7点　7点　7点　7点　6点　6点　5点　2点



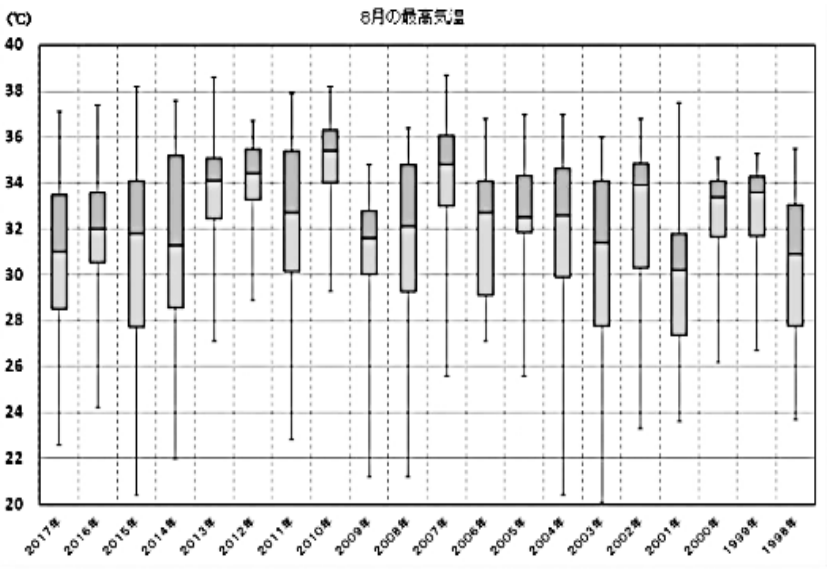
1　二つのクラスの平均点を求めなさい。

2　階級の幅を１として、上の図にヒストグラムを作成しなさい。

3　ヒストグラムから、二つのクラスの得点を比較して分かることを書きなさい。

＜ポストテスト＞

1　右の箱ひげ図は、東京都練馬区における 1998 年から 2017 年までの 20 年間の８月１日から 31 日の最高気温を、日ごとに集計し表したものです。



（１）あなたが考える、この 20 年間で最も暑かったと思う年を一つ挙げて、その理由を記入しなさい。必要に応じて語群にあるキーワードを使用しなさい。

（２）2009 年の夏と 2001 年の夏とでは、どちらの方が涼しかったと考えられますか。図から読み取れることを理由に挙げて記入しなさい。必要に応じて語群にあるキーワードを使用しなさい。

【語群】箱ひげ図　箱　ひげ　最大値　第１四分位数　中央値　第３四分位数　最小値　○℃を基準として　50%　25%

Ⅳ　研究のまとめ

開発した四つの教材に共通して効果が見られたのは、次の３点である。

１　教材について

作った図形を更に折って問題を作る、折り紙を折ることでひし形の性質を想起する、損益分岐点に着目して単価を決める、目的に応じて多くの箱ひげ図を効率よく的確に選別していく等、生徒が新たな解決に向けて視点を見いだすことができる教材であることが、生徒の意欲や好奇心を引き出し、発展的な学びを促すことにつながることが明らかになった。

また、身近な題材を用いて自力で取り組める活動を設定することが、生徒の主体性を引き出すことにつながるとともに、生徒が自分の考えを相手に伝えやすくなることが分かった。

新たに導入される箱ひげ図の指導では、近隣校からデータの協力を得た。今後、各区市町村内だけではなく、広く開発教材や実践事例を提供し、生徒が主体的に取り組める授業づくりを推進していくことが重要であると考える。

２　キーワードカードについて

キーワードカードは、生徒の主体的な取り組みを助ける効果的なツールであることが明らかになった。全ての事例を通じて、発表や説明に苦手意識をもっていた生徒がキーワードカードを並べるだけで表現できたことは大きな成果であった。また、生徒から「役立った」という感想が多く聞かれたことから、数学を苦手と感じる生徒の底上げにも有効であると考えられる。説明の仕方を考える活動では、説明するために必要なキーワードを取捨選択する姿が見られた。それぞれのキーワードが何を示し、どのような意味をもつのかを改めて考え、判断する姿から、数学的な見方・考え方を働かせて思考・判断する力の育成にもつながることが考えられる。また、グループ活動の中でキーワードカードが仲立ちとなり、話合いが深まる場面も多かった。

キーワードカードは、多くを与え過ぎるのではなく、生徒が主体的に取捨選択できるよう実態に合わせて準備することが重要である。そして、第１学年からキーワードカードを用いて説明する活動に継続的に取り組ませることで､数学的な表現を適切に用いて説明する力を、３年間を通して着実に育成することが期待される。

３　グループ活動について

問題解決に不安を抱えている生徒も､グループ活動において意見交換をすることを通して、様々な考えに触れて新たなヒントを得たり、自分の考えをより明確にしたりすることができた。検証授業では、生徒が主体的に友達に意見を求めて、自分の考えの妥当性を確かめたり違う方法で解決した結果を知ろうとしたりする姿が見られた。また、単に手順を教え合うのではなく､「何に着目すればよいか」「どのような表現を用いて説明するか」など、数学的な見方・考え方を働かせ、楽しみながら主体的に問題解決に取り組み、自分の考えを発展させることができた。

課題としては、話合いに全員が参加できない場合が見られることである。すぐにグループ活動に入るのではなく、まずは自力で考え解決に取り組ませる必要があるとともに、グループ内で役割分担を明確にしたり、数学以外の教科等においても日頃からペア活動やグループ活動に慣れ親しんだりすることも、生徒の学びの深まりのために重要であると考える。

中学校理科研究開発委員会

目　次

Ⅰ　研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62

Ⅱ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

Ⅲ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
　１　指導事例１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・66
　２　指導事例２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・70
　３　指導事例３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・74

Ⅳ　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79

〈中学校理科研究開発委員会〉

研究主題

「主体的・対話的で深い学びを実現させ、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する指導方法の開発」

研究の概要

新たに告示された「中学校学習指導要領理科（平成 29 年３月)」の理科の目標では、理科の学習で育成を目指す資質・能力を三つの柱で示し、これらの資質・能力を「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して」育成することをねらいとしている。

理科の目標や内容のねらいが達成できるようにするためには、内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るとともに、理科の学習過程の特質を踏まえ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなど、科学的に探究する学習活動の充実を図ることが重要である。

特に、理科における授業改善では、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点から学習過程を更に質的に改善していくことが必要である。

また、「平成 27 年度全国学力・学習状況調査」（文部科学省）において、理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりするほど平均正答率が高い傾向にある実態が分かった。

本研究では、研究主題を「主体的・対話的で深い学びを実現させ、科学的に探究するために必要な資質･能力を育成する指導方法の開発」と設定し、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を実現させ、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する指導方法を開発した。

Ⅰ　研究の目的

新たに告示された「中学校学習指導要領理科（平成 29 年３月)」の理科の目標では、理科の学習で育成を目指す資質・能力を三つの柱「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」で示し、これらの資質・能力を「自然の事物・現象に関わり、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなどを通して」育成することをねらいとしている。

理科の目標や内容のねらいが達成できるようにするためには、内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図るとともに、理科の学習過程の特質を踏まえ、理科の見方・考え方を働かせ、見通しをもって観察、実験を行うことなど、科学的に探究する学習活動の充実を図ることが重要である。

「平成 26 年度プロジェクト研究調査研究報告書資質･能力を育成する教育課程の在り方に

関する研究報告書Ⅰ　～使って育てて21世紀を生き抜くための資質・能力～」（国立教育政策研究所　平成27年３月）では、これまで行ってきた内容重視の教育は、特定の理論や概念、事実を児童・生徒に知識として詰め込むことが教育だと考えていた面があったのに対し、資質・能力重視の教育では、知識を使って、児童・生徒自身が学習内容の理解を深め、自分たちのもっている概念を変えていくことが教育だと考えている面があると指摘されており、これからは、資質・能力を重視する教育という視点で、児童・生徒の学びをどのように構築していくかということが重要であると示されている。

また、理科の見方・考え方については、平成29年６月に公表された「中学校学習指導要領解説理科編」（以下「新学習指導要領解説」という。）では、次のよう解説されている。

理科における見方については、理科を構成する領域ごとに示すことができる。（図表１参照）

〈図表１　理科における見方（柱とする領域別）〉

エネルギー	自然の事物・現象を主として量的・関係的な視点で捉えること。
粒　　子	自然の事物・現象を主として質的・実体的な視点で捉えること。
生　　命	生命に関する自然の事物・現象を主として多様性と共通性の視点で捉えること。
地　　球	地球や宇宙に関する自然の事物・現象を主として時間的・空間的な視点で捉えること。

理科における考え方については、探究の過程を通した学習活動の中で、例えば比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えることとして整理することができる。この考え方は、物事をどのように考えていくのかということであり、資質・能力としての思考力や態度とは異なる。

これらを踏まえ、中学校における「理科の見方・考え方」については、「自然の事物・現象を、質的・量的な関係や時間的・空間的な関係などの科学的な視点で捉え、比較したり、関係付けたりするなどの科学的に探究する方法を用いて考えること」と整理することができる。

以上のことを踏まえ、理科における授業改善では、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の三つの視点から学習過程を更に質的に改善していくことが必要である。なお、これら三つの視点はそれぞれが独立しているものではなく、相互に関連し合うものであることに留意が必要である。授業改善の三つの視点の具体的な内容については、新学習指導要領解説によると、次のように示されている。

（「主体的な学び」の視点）

１　「主体的な学び」については、例えば、自然の事物・現象から問題を見いだし、見通しをもって課題や仮説の設定や観察・実験の計画を立案したりする学習となっているか、観察・実験の結果を分析・解釈して仮説の妥当性を検討したり、全体を振り返って改善策を考えたりしているか、得られた知識や技能を基に、次の課題を発見したり、新たな視点で自然の事

物・現象を把握したりしているかなどの視点から授業改善を図ることが考えられる。

（「対話的な学び」の視点）

2　「対話的な学び」については、例えば、課題の設定や検証計画の立案、観察・実験の結果の処理、考察・推論する場面などでは、あらかじめ個人で考え、その後、意見交換したり、議論したりして、自分の考えをより妥当なものにする学習となっているかなどの視点から、授業改善を図ることが考えられる。

（「深い学び」の視点）

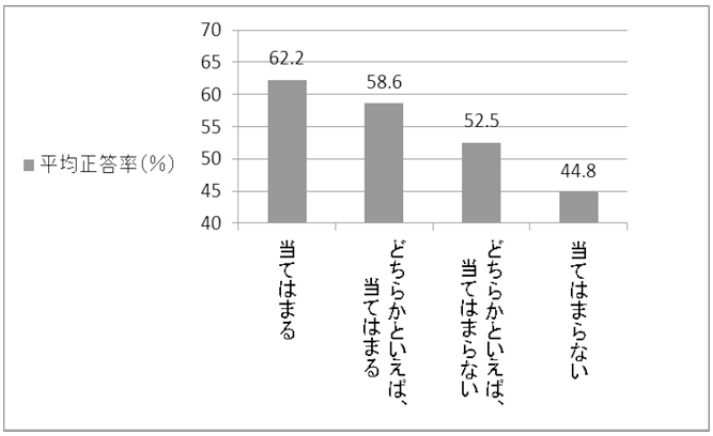
3　「深い学び」については、「理科の見方・考え方」を働かせて、探究の過程を通して学ぶことにより、理科で育成を目指す資質・能力を獲得するようになっているか、様々な知識がつながって、より科学的な概念を形成することに向かっているか、さらに新しく獲得した資質・能力に基づいた「見方・考え方」を次の学習や日常生活などにおける問題発見・解決の場面で働かせているかなどの視点から、授業改善を図ることが考えられる。

また、「平成 27 年度全国学力・学習状況調査」（文部科学省）において、理科の授業で、自分の考えをまわりの人に説明したり発表したりするほど平均正答率が高い傾向にある実態が分かった。（図表２参照）

〈図表２　平成 27 年度全国学力・学習状況調査（文部科学省）から作成〉

○理科の授業で、自分の考え（や考察）をまわりの人に説明したり発表したりしていますか。
（【中学校】生徒 1,056,921 人、平成 27 年４月 21 日実施）

	平均正答率（%）
当てはまる	62.2
どちらかといえば、当てはまる	58.6
どちらかといえば、当てはまらない	52.5
当てはまらない	44.8



このことから、他者への説明などの対話的な学習場面が多いほど、学習内容が定着していると考えられる。

このように、理科の授業において「主体的・対話的で深い学び」を実現し、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成することがこれからの教育の中で求められていることから、本研究では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた指導方法の開発を行うこととした。

Ⅱ　研究の方法

本研究では、前述の目的を踏まえ、研究主題を「主体的・対話的で深い学びを実現させ、科学的に探究するために必要な資質・能力を育成する指導方法の開発」と設定した。

「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を実現するための指導方法及びワークシートを開発し、科学的に探究するために必要な資質・能力の育成に有効であることを検証した。本研究の視点及び検証授業は以下のとおりである。

1　学習場面設定の視点

(1)　単元全体を通して、生徒の学び（思考の過程）を考えたマネジメントを工夫すること。

(2)　生徒自らが課題を見いだすことができる学習展開を設定すること。

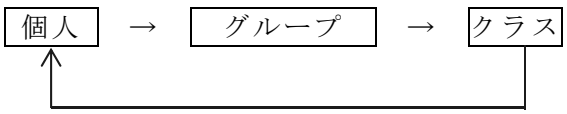
(3)　単元のまとめとして、それまでに学習した内容、観察方法及び実験方法を活用できる実験・観察を設定すること。

(4)　対話的な学習活動の場面において、多様な対話形式を設定すること。

2　指導上の工夫の視点

(1)　授業展開の中で、個人で考える学習活動から、グループやクラスにおける対話的な学習活動の流れを重視すること。その際、対話的な学習活動で学ぶ前後に、個人で考える学習活動を取り入れること。

＜イメージ＞



(2)　生徒の主体的な学習活動を促す発問の工夫を行うこと。

(3)　対話を活性化するための題材設定の工夫を行うこと。

ア　生徒から多様な意見・考えが出る題材とする。

イ　生徒とって簡単には答えは分からないが、取り組みやすい題材とする。

(4)　生徒の思考過程を共有させるための工夫を行うこと。

ア　ＩＣＴ機器等を活用する。

イ　ホワイトボード等を活用する。

(5)　ワークシートの工夫を行うこと。

ア　自分の考えと他者の考えを比較することができるようにする。

イ　根拠を明らかにして自分の考えを記述させる。

ウ　授業を通して、自分の考えの変容が分かるようにする。

３　検証授業（指導事例）

(1)　第１回検証授業（指導事例１）「遺伝」

(2)　第２回検証授業（指導事例２）「音」

(3)　第３回検証授業（指導事例３）「天気」

(4)　検証授業の前後に生徒へのアンケート調査を実施

・検証授業前―１学期に実施

・検証授業後―２学期、それぞれの検証授業の単元学習後に実施

（注）アンケートについては、「平成 28 年度東京都教育委員会中学校理科研究開発委員会」が「平成 25 年度及び平成 26 年度東京都教育委員会教育研究員」が使用したものから必要な項目を再編成して作成したものを使用した。

〈アンケート項目〉

項番	質　問
①	自分で考えながら授業に取り組むことができる。
②	「なぜそうなるのか」など、疑問をもちながら授業に参加している。
③	自分の考えを理由（根拠）とともに説明することができる。
④	自分の考えを文章で表現することができる。
⑤	これまでに学習して身に付けた知識や日常生活で身に付けた知識を、新しい学習内容に結び付けることができる。
⑥	学んだことや、知っていることを日常生活と関連付けることができる。
⑦	目的を理解して、観察や実験を行うことができる。
⑧	予想を立てて、観察や実験を行うことができる。
⑨	観察や実験の進め方や考え方が間違っていないかを振り返って考えている。
⑩	観察や実験の結果を表・図・グラフなどを用いて、表現することができる。
⑪	観察や実験の結果を、文章にまとめ、表現することができる。
⑫	観察や実験の結果をもとにして考察する（結果から何が分かるかを考える）ことができる。
⑬	話合い活動を行うとき、自分の意見を積極的に発言できる。
⑭	話合い活動を行うとき、友達の意見も参考にして、自分の意見をまとめている。
⑮	話合い活動を行うと、自分の考えを深めることができる。
⑯	これまでに学習して身に付けた知識や日常生活で身に付けた知識を使って考える学習が好きである。
⑰	これまでに学習して身に付けた知識や日常生活で身に付けた知識を使って考える学習は大切だと思う。

Ⅲ　研究の内容

１　指導事例１

(1)　学習指導案

ア　単元名　中学校第３学年「生命の連続性　遺伝の規則性と遺伝子」

イ　単元の目標

交配実験の結果などに基づいて、親の形質が子に伝わるときの規則性を見いだすこと。

ウ　単元の指導計画（全４時間）

時	主な学習活動
第１時 （本時）	ゴールデンハムスターの毛色の遺伝の規則について自ら考え、発表する。
第２時	エンドウ、ゴールデンハムスター等で見られる遺伝の仕組みを学び、Ａやａの文字を用いて原理を説明できるようになる。
第３時	カード等を用いた遺伝の模擬実習を行い、孫の代で優性形質の出現と劣性形質の出現の割合が３：１になることを見いだす。
第４時	遺伝子、ＤＮＡ等についての研究について知り、自分たちの生活とどのように関わっているのか調べる。

エ　研究主題に迫るための指導の工夫

(ｱ)　「不思議に感じることは何か」のように、生徒自身が自らの課題と捉えることができる問いを設定する。

(ｲ)　思考を促し、発言の機会を確保しやすくする少人数グループでの活動を中心に学習を行う。

(ｳ)　個人での思考からグループでの思考、そして個人で思考を深める流れを意識した授業構成で行う。

(ｴ)　画面転送ツール等のＩＣＴ機器を活用し、クラス全体での思考の共有を行う。

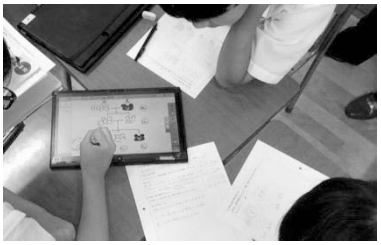
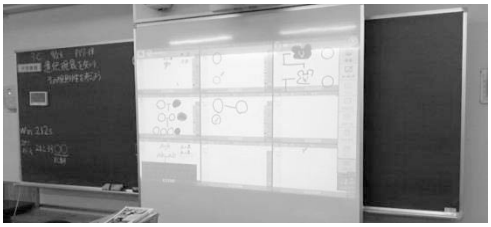
オ　本時の目標（４時間扱いの第１時間目）

○　ゴールデンハムスターの毛色の遺伝について、関心をもって話合いができる。

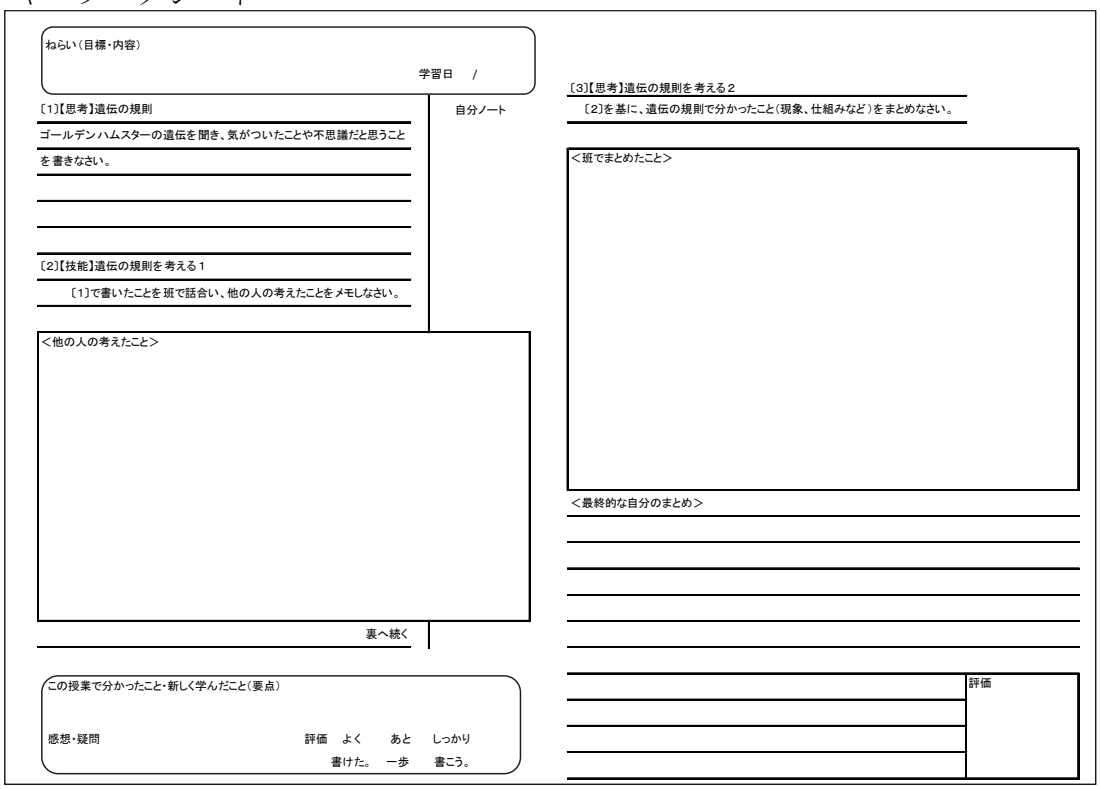
○　親のもっていた形質が、なぜ子では現れなかったり、また孫では現れるのか、考え表現することができる。

カ　展開

時間	具体的な学習活動	指導上の留意点・配慮事項
導入 ５分	・前単元（特に有性生殖と減数分裂）について振り返りを行う。	・両親から半分ずつ遺伝子を受けついでいることを確認する。
展開１ 40 分	・親から子、孫へのゴールデンハムスターの毛色の遺伝の様子を聞く。 発問１ 「ゴールデンハムスターの遺伝の様子を聞き、気が付いたことや不思議だと思うことを書こう。」【個人】 **検証授業での生徒の反応** 「なぜ子は全て茶なのか。」 「一回は現れなくなった黒が、なぜまた孫で現れるのか。」 ・考えた内容をノートに記入する。	・茶と黒の純系の親どうしの掛け合わせでは子では全て茶になり、孫では茶と黒が３：１の割合で現れる。 ・考えた内容はノートに記入させる。 ・発問２で深める、きっかけのための発問である。自由に気がついたこと、疑問に思ったことを書かせる。 ・個人での思考を深めるため、前単元の内容から考えて何かおかしくないか等、きっかけになりそうな声掛けをする。

展開２	発問２ 「発問１を基に、遺伝の規則を考え、分かったこと（現象、仕組みなど）をまとめよう。」【グループ】 ・個人の疑問をグループで発表し、遺伝の規則と関連しそうな事項をまとめていく。 **検証授業での生徒の反応** 「(子では現れていない）黒が孫で出てきた理由は、突然変異では。」 「子では絶対に黒は出ないのかな？」 「黒の方が強い。」「茶の遺伝子は隠れているだけ。」 ・グループとしての考えをタブレットＰＣに記入する。（画面転送で記入状況をリアルタイムで見られる。） ・各グループの発表を聞き最終的な自分の考えをまとめる。 【グループの考えをタブレットに入力】 	・発問１の内容をグループで共有させる。その中から遺伝の規則と結び付きそうな内容を選び、規則を考えさせる。 ・グループとしてまとめさせ、考えを深めさせる。 ・各グループの考えを発表させ、様々な考え方に気付かせる。 ・様々な考えを聞いた後、最終的な自分の考えをまとめさせる。 【リアルタイムに反映、全体に共有】 
まとめ ５分	・グループの考え方を振り返り、遺伝の仕組みについて深く知ろうとする。	・次時の予告（遺伝の規則を考える）を行う。

キ　ワークシート



(2)　授業の様子等

既に予習等により知識として遺伝の法則を理解している生徒にも「考える」機会をつくるため、発問１として「気が付いたことや不思議に思うことは何だろうか。」という、オープンエンド形式の発問を設定した。これにより、遺伝についての知識が様々な段階の生徒どうしでも、単なる知識の伝達ではなく、活発な意見交換を行う様子が見られた。

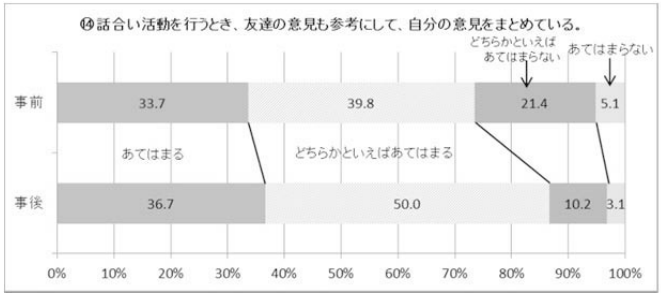
ワークシートも、「個人→グループ→クラス→個人」の流れを意識した。まずは個人の意見をワークシートに記入し、グループでの発表もワークシートにメモをとらせたことにより、最初の自分の意見と学習過程で他の意見との比較を行うことができた。

「思考の共有化」を図るため、タブレットＰＣを用いて話合い活動中の画面転送を行った。なかなか意見のまとめができなかったグループも、適宜、他グループの意見を参考にしながら自グループの意見をまとめていくことができた。他グループの考えを常に見られることにはメリット、デメリット両面があり、他グループの意見をそのまま取り入れてしまう可能性もあることから課題ともいえる。しかし、「他グループのよい説明の仕方を取り入れ、自グループの説明をもっとよくしよう」と、自分たちの考えをより深めようとする態度が見られたようにメリットは大きい。最終的にクラス全体での発表の場面では、全９グループ中７グループが単元でねらいとする内容と同じ方向性のまとめになっていたが、独自の発想・考えのままというグループもあった。

(3)　事前・事後アンケート結果

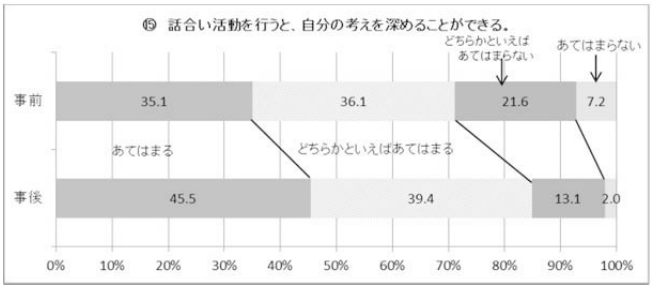
アンケートの項目において、肯定的評価の増加が見られた項目は、主に話合いに関わる項目であった。

⑭「話合い活動を行うとき、友達の意見も参考にして、自分の意見をまとめている。」という質問に対して、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」と回答した生徒の割合が、13.2ポイント増加した。〈図３〉



〈図３〉

⑮「話合い活動を行うと、自分の考えを深めることができる。」という質問に対して、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」と回答した生徒の割合が、13.7ポイント増加した。〈図４〉



〈図４〉

＜まとめ＞

- 生徒とって簡単には答えは分からないが、取り組みやすいオープンエンド形式の発問は、生徒の多様な発想や気付きを促し、学習意欲を高める上で有効であった。
- 「個人→グループ→クラス→個人」への流れにより、個人の意見を深めることができた。
- ＩＣＴを活用することでグループ間での「思考の共有化」を効率的に図ることができ、グループでの学習活動を活発にする効果が見られた。

２　指導事例２

(1)　学習指導案

ア　単元名　中学校第１学年「身のまわりの現象　音」

イ　単元の目標

身近な事物・現象についての観察、実験を通して、光や音の規則性、力の性質について理解させるとともに、これらの事物・現象を日常生活や社会と関連付けて科学的にみる見方や考え方を養う。

ウ　単元（題材）の指導計画（４時間扱い）

時	主な学習活動　＊めあてで記述
第１時	**課題「ピアノの鍵盤はなぜ 88 鍵なのか」** めあて　身のまわりの音に関係する現象では、どこでどんな音が出てどのように伝わっているのかを考える。
第２時	めあて　音の伝わり方や速さについて説明できるようにする。
第３時	めあて　音が出ている物体の振動と、音の大きさ、音の高さの関係を調べる。
第４時 （本時）	めあて　音の大きさが振幅によることを、音の高さが振動数によることを、それぞれ説明する。 **課題「ピアノの鍵盤はなぜ 88 鍵なのか」**　※第４時を２時間に分けてもよい。

エ　研究主題に迫るための指導の工夫

(ｱ)　単元全体を通して、生徒の学び（思考）を考えたマネジメントの工夫

○　単元を通して、毎時間話合い活動を設定する。その際、根拠を明らかにして自らの考えをまとめたり、表現したりすることを重視する。

○　生徒一人一人の考えを、グループでの対話により深めるため、個人で考える学習活動の時間を確保するとともに、グループにおける対話的な学習活動では、グループやグループ間における情報共有ができるよう、グループ用ワークシートをラミネート加工したボード（以下、「ラミネートボード」という。）を活用した。

(ｲ)　単元のまとめとして、それまでに学習した内容などを活用できる設定を工夫する。

○　単元の最初と最後に同じ発問を設定することで、生徒自らが学習を通して自分の記述内容を振り返り、自身の成長を実感できるようにする。

オ　本時の目標（４時間扱いの第４時間目）

○　音の大きさが振幅によることや、音の高さが振動数によることを、波形を用いて説明することができるようにする。

カ　展開

時間	具体的な学習活動	指導上の留意点・配慮事項
導入 5分	・モノコードの実験（前時）を振り返り、弦が振動する幅が大きさ、振動する回数が高さに影響していたことを確認する。 ・心電図の画像を見て、心臓の振動からでる電気信号を波に変えて読み取りやすくしていることを確認する。 ・「レインボースプリング」を用いて、音の縦波を示し、イメージを深めさせる。 **めあて　音の特徴を、波形を使って説明することができる。**	・空気の振動も波で表すことが出来るのではないかということを考える。 ・縦波や横波や疎密波には触れない。
展開1 25分	発問「オシロスコープを使って画像をみて、音の大小・高低と波形の関係はどのようになるか。」 ・音叉をたたいて、基準の波形を示す。 ・基準の音に対して、大小（高さ固定）、高低（大きさ固定）の音がどのような波形になるかを考える。 ・自分で考える時間をとり、ワークシートの「自分の考え」に記入する。 ・自分のグループ以外の人の考えも参考にするため、席を移動して話合いをする。 ・ラミネートボードをグループに1枚配布し、自分の考えを書き合いながらワークシートの「グループの結論」に記入する。 ・大きい音から始める。 ・ラミネートボードに書いた「グループの結論」を黒板に貼りに行く。	・デジタル教科書の、オシロスコープのプログラムを用いる。 ・前回のモノコードの実験を参考にする。 ・予習をして知っている生徒には、「なぜそうなるのか」を考えさせる。 ・机間指導の際に、生徒の予想を肯定する言葉掛けはしない。 ・話合いには、基本波形をＡ３版でラミネートしたボード、ホワイトボードマーカーを用意する。 ・全グループのラミネートボードを黒板に貼り、共通点や相違点を確認し、提示した条件に合うものをしぼっていく。

	考察「グループで話した考えを、理由を基に発表する。」 ・小さい音、高い音、低い音と、順に発表を繰り返す。	・思考を共有させながら、子供の考えからまとめを導く。
まとめ 10 分	**まとめ** **・音の３要素を、波形を基にまとめる**	
補足 ５分	発展「いろいろな周波数の音源を用いて、ヒトの可聴域を確認する。」	・低周波、高周波は聞こえづらくなるが、音量は変えていないことを説明しておく。
単元のまとめ ５分	・単元を通しての**課題「ピアノの鍵盤はなぜ 88 鍵なのか。」**に取り組む。	・音の学習を振り返り、自力解決を目指す。

キ　ワークシート

めあて 身のまわりのものを例に、なぜ音が出るのかを考える。　　音のプリント №.1

問 ピアノの鍵盤はなぜ88鍵なのでしょうか。

【自分の考え】※イラスト等でもかまいません。

問 ストロー笛で音が出るのはなぜでしょうか。

【自分の考え】※イラスト等でもかまいません。

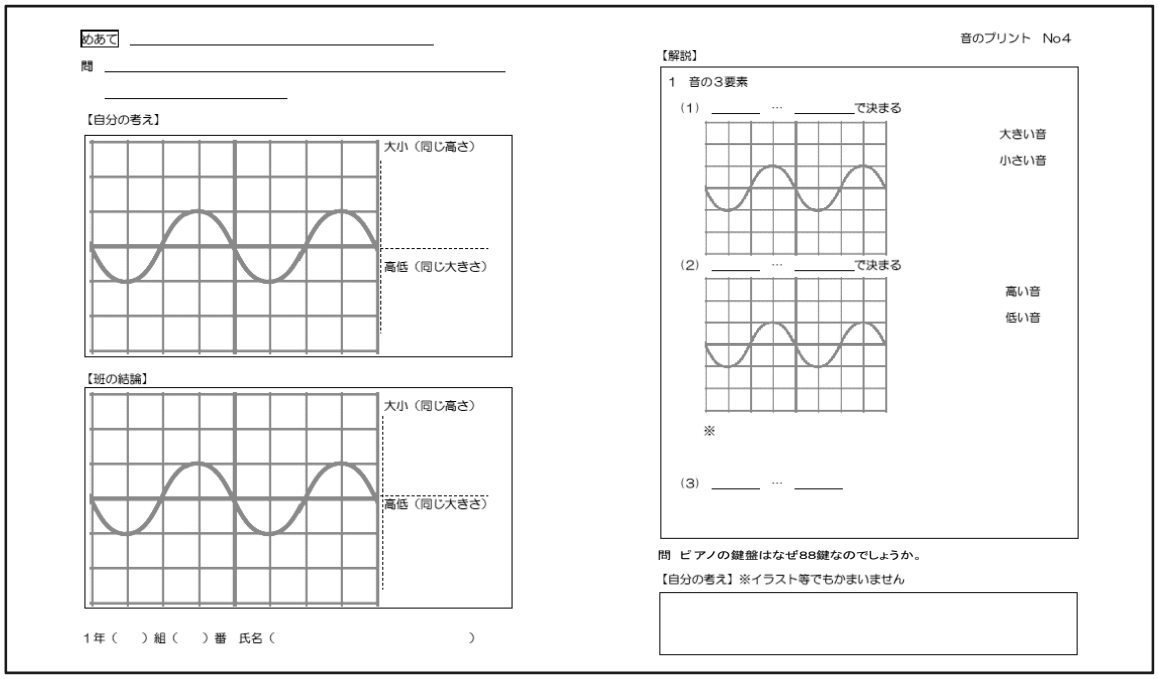
【みんなの考え】※イラスト等でもかまいません。

問 音が出ているものの共通点はなんでしょうか。

【自分の考え】

【グループの結論】

【解説】


めあて ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

問 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

＿＿＿＿＿＿＿＿

【自分の考え】

大小（同じ高さ）

高低（同じ大きさ）

【班の結論】

大小（同じ高さ）

高低（同じ大きさ）

1年（　）組（　）番　氏名（　　）

音のプリント　No4

【解説】

1　音の3要素

(1) ＿＿＿ … ＿＿＿で決まる

大きい音

小さい音

(2) ＿＿＿ … ＿＿＿で決まる

高い音

低い音

※

(3) ＿＿＿ … ＿＿＿

問　ピアノの鍵盤はなぜ88鍵なのでしょうか。

【自分の考え】※イラスト等でもかまいません

(2)　授業の様子等

単元の学習では、毎時間、話合い活動を行ったことで、根拠に基づいて話合いを進めることができた。また、根拠を示しながら発表することに慣れていき、生徒が積極的に話合いを行う様子が見られた。授業後の生徒のアンケートには、以下のような感想があった。

○「話合いを行う授業は、自分が考えていたことを深め、新しい考え方もできる。」
○「友達と話合うことで分かりやすい表現があって、自分の役に立つと思った。
○友達と話合うことによって考えを深められた。知っている人に聞くだけではなく、一回自分で考えることが大切だと思った。」

単元を通した発問の工夫では、「ピアノの鍵盤はなぜ 88 鍵なのか。」という発問を、単元を通した発問として設定したところ、単元末の段階では、学習した知識に基づいた説明をする様子が見られた。

○**最初の段階**の生徒の主な発言

・「88 は区切りがいいから。」　・「88 個の音があるから。」
・「両手を伸ばしたときの長さが 88 個分だったから。」

【音に関する学習】
振幅や振動数、可聴域などの知識を習得

○**最後の段階**の生徒の主な反応や発言

・再度発問をした瞬間、「分かった。」という発言があった。
・「人が音色としてきれいに聞ける音がこの音だから。」
・「人は 20Hz～20000Hz まで聞くことが出来るけれど、一定のラインを超えると不快な音になってしまうから」
・「88 以上でも聞き取れるが、きれいな音色ではなくなるから。」
・「人間の鼓膜が振動して更に音色として聞きとれるのが鍵盤 88 個だから。」

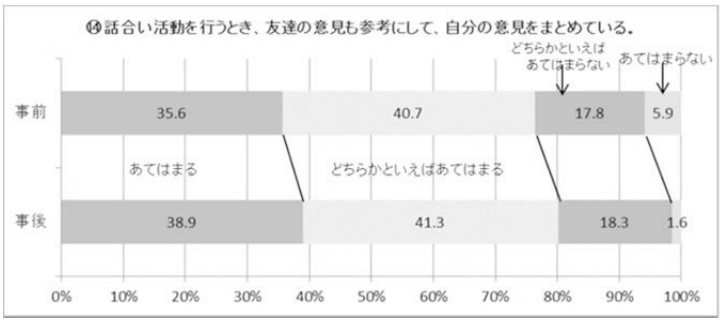
学習過程の工夫の視点では、授業の展開として、個人で考える学習活動からグループでの対話的な学習活動、その後再び個人の学習活動に戻る流れを取り入れたことにより、生徒自らが課題や疑問を見いだし、話合いの中で疑問を解決し、更に深める様子が見られた。

情報共有のツールとして、基本波形をＡ３版でラミネートしたボードを用意し、話合いをしながら何度も書き直し出来るようにしたところ、個人の考えを出し合うことが容易にでき、それぞれの思考を共有することができた。これにより、グループで推測しながら思考錯誤を繰り返すなど、グループにおける対話が活性化した。

また、一定の時間を設定し、他の班との情報交換を行わせることは、グループのまとめの段階において、話合いの結果の妥当性を生徒自ら検討する上で有効であった。

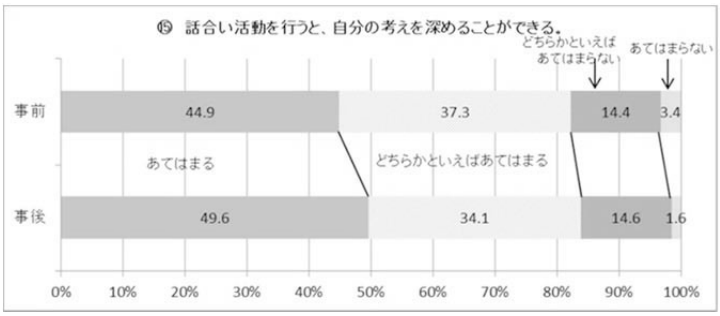
(3)　事前・事後アンケート結果

⑭「話合い活動を行うとき、友達の意見も参考にして、自分の意見をまとめている。」という質問に対して、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」と回答した生徒の割合が事前アンケートと比べて事後アンケートでは、3.9 ポイント上昇し、80.2%であった。〈図５〉



〈図５〉

⑮「話合い活動を行うと、自分の考えを深めることができる。」という質問に対して、「あてはまる」と回答した生徒の割合が事前アンケートと比べて事後アンケートでは、4.7ポイント上昇した。〈図６〉



〈図６〉

＜まとめ＞

- 学習して身に付けた知識や技能を活用するための発問の工夫は、生徒の主体的な学びを促す上で有効であった。
- 個人で思考する時間を設定するとともに、Ａ３版ラミネートボードを活用して、生徒それぞれの考えの共有を図ることは、個人の思考を出し合い、生徒一人一人の思考過程を整理し、対話を活性化するためのツールとして有効であった。

３　指導事例３

(1)　学習指導案

ア　単元（題材）名　第２学年「大気中の水蒸気の変化」

イ　単元（題材）の目標

身近な気象の観察・観測を通して、気象要素と天気の変化の関係を見いださせるとともに、気象現象についてそれが起こるしくみと規則性についての認識を深める。

ウ　単元（題材）の指導計画（６時間扱い）

時	主な学習活動
第１時 第２時	雲や霧の発生についての観察実験をもとに、大気中の水蒸気が凝結する現象は気温、湿度と深く関わっていることを捉える。
第３時	上昇気流について学び、上空の気温や気圧について知り、説明することができる。
第４時 （本時）	既習事項を基に雲のでき方について考え、話合い活動を通して理解を深め説明することができる。
第５時	雨や雪のでき方と上昇気流、気圧、気温、温度の変化を関連付けて捉える。
第６時	水の循環について考え、日常生活との関連を知り説明することができる。

エ　研究主題に迫るための指導の工夫

(ｱ)　授業の冒頭で既習事項について振り返ったことを基に考えさせる。

(ｲ)　個人での思考からグループでの思考、そして個人で思考を深める流れを意識した授業構成で行う。その際、生徒の思考を促し、発言の機会を確保しやすくするため、少人数グループでの活動を中心に学習を行う。

(ｳ)　グループでの考えを教師に説明する場面を設定し、教師との対話により思考を深められるようにする。

(ｴ)　個人での思考、グループでの思考を記述しやすいワークシートを作成し、評価にも活用する。

オ　本時の目標（４時間扱いの第１時間目）

・　既習事項を基に、雲のできる仕組みについて考え、説明することができる。
・　考えた雲のでき方について、グループで対話をし、考えを深めることができる。

カ 展開

時間	具体的な学習活動	指導上の留意点・配慮事項
導入 ５分	・ワークシートの配布と既習事項を確認する。 **課題**　雲のでき方について考えよう。	・ワークシートを見て、上空の気温や雲の状態について確認する。
展開① 30 分	・雲ができる仕組みを個人で考える。（全員） ・学習グループの形にし，意見の共有を行い、ホワイトボードをつかってグループの考えをまとめさせる。 ・各グループをまわり、自由に意見交換をさせる。（２分程度）	・個人で考える時間を７分程度とり、ヒントを出しつつ考えを導き出させる。 ・４人程度のグループをつくる。 ・グループごとにヒントや質問を行いながら考えを深めさせる。 ・書き写しにならないよう、机間指導を行う。

	・グループごとに教師に報告させ、更に考えを深めさせる。 **予想される生徒の不足** 「飽和水蒸気量や露点の説明」 「雲が落ちない理由」 「液体になる過程での不足」	・完成したグループから、前の黒板にホワイトボードを貼らせる。 **ポイント** 説明不足を指摘し、より考えを深めさせるよう、机間指導中に準備しておく。
展開② 10 分	・グループごとに貼られたホワイトボードを自由に見る時間を設定する。（２～５分） ・いろいろな意見を参考に最終的な自分の考えを書く。	・時間を区切り、希望者全員が見られるようにする。 ・個人で静かに書かせる。
まとめ ５分	・雲のでき方のまとめと解説を聞く。 ・ワークシートの回収	・生徒がまとめたホワイトボードを利用し解説を行う。

キ　ワークシート

雲はどうやって空にあるの？

天気のプリント №7

復習　①雲の状態は(固体・液体・気体)である。
②雲は(地上・上空)にある。
③上空は地上よりも気圧が(低く・高く)、温度も(低い・高い)。

問　雲はどのようにしてできるでしょうか？

【自分の考え】※イラスト等でもかまいません。

【みんなの考え】※イラスト等でもかまいません。

【グループの結論】

自分の考えや話し合いの結果、他のグループの結論などを総合し、最終的な自分の考えを書いてみよう。イラストと文章などを組み合わせてもかまいません。

【最終的な自分の考え】

【解説】

(2)　授業の様子等

本時では、既習事項を用いたまとめに当たる話合いということと、１年次から話合い活動等を行っているということにより、多くの生徒が自分の意見をもって話合いに取り組むことができていた。このことは、後日、復習として「雲ができる仕組み」について問い掛けたところ、９割程度の生徒が記述して説明することができたことから、学習内容を十分に理解することができたといえる。

発問の工夫の視点では、これまでも、生徒から様々な考え方や意見が出てくる発問を設定することを重視している。今回の授業においても、少し考えただけでは答えの出ない、複数の考えや既習事項を重ね合わせることで完成される結論になるよう、「雲はどうやって空にあるのか」という曖昧な表現で発問した。このような“議論に足る発問”を実践することで、生徒は、自分と他者の考えを比較検討、あるいは重ね合わせることで結論にたどり着ける学習活動に主体的に取り組むことができていた。

学習過程の工夫の視点では、情報共有と議論の方法は重要である。本時では、生徒の４人組と教師との対話という活動を設定した。まず、個人の考えをイラストやキーワードだけでも構わないという形で、十分に時間をとって考えさせる。その後、司会等を決めずに自由な議論をさせ、グループの結論を考えさせる。次に、完成した結論を教師に説明させる。その後、教師が議論に余地がある部分を指摘し、思考を更に深めさせることを繰り返す。この一連の活動を通して、生徒は活発に活動し学びを深めることができた。その際、教師は各班に滞在する時間を短くするなどの工夫とともに、更なる議論を活性化させるための「発問」や「指摘」を行うことが重要である。そのような「発問」や「指摘」を行うためには、教師は学習事項に対する高度な知見を踏まえた上で、生徒との対話では一問一答になることのないよう、生徒の思考の流れに応じて臨機応変かつ的確な「発問」を行うことが求められる。

ホワイトボードの利用については、色やイラストを適切に利用し、分かりやすく表現できているグループが多くみられた。また、何度も消して検討できるという点においても、教師との対話やグループ内の対話から、足りない部分を補ったり訂正したりと上手に利用していた。さらに、他のグループが教師と対話している内容を聞き、自分たちの参考にしているグループもあり、より意欲を向上させることができたと考えられる。

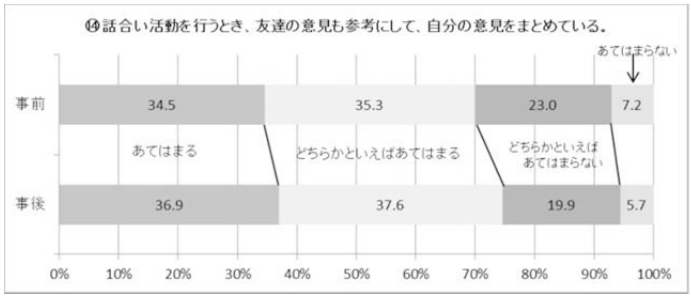
授業のまとめの部分では、教師が板書することなく、生徒のホワイトボードを用いながら解説を行った際には、各グループの学習を評価しつつ、生徒からの意見だけで結論付けることができた。また、生徒から質問が出るなど学習内容に対する意欲が高まっている様子から、生徒の達成感を促すことができたと考えられる。また、発表形式ではなく、各グループのホワイトボードを自由に見る時間を設定することで、生徒が考える時間を確保することができた。教師が一文字も板書しない授業であっても、生徒の主体性を促すことができ、対話的で深い学びが実践できた。

ワークシートの工夫の視点では、以下の①～⑥の項目を設けたことで、各グループの意見を見比べながら自分の論理を完成させることができていたことが、前述したように、後日の復習から明らかになった。

①本時の学習のヒントとなる事項の振り返りができる質問を設定
②生徒が思考の過程を認識するために「自分の考え」の欄と根拠を示せる欄を設定
③グループの生徒がどのような意見をもったかを確認するために「みんなの考え」の欄を設定
④グループで話した内容をまとめる「グループでの結論」の欄を設定
⑤各グループの意見を見比べながら自分の論理を完成させるために「最終的な自分の考え」の欄を設定
⑥各グループから出てきた意見を見比べて、条件に合うものをしぼっていき、まとめていくための「解説」の欄を設定

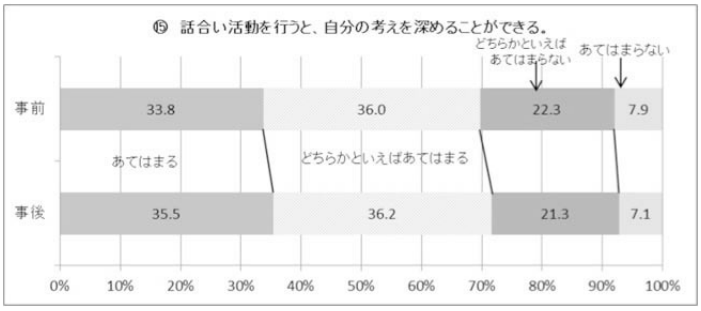
(3)　事前・事後アンケート結果

⑭「話合い活動を行うとき、友達の意見も参考にして、自分の意見をまとめている。」という質問に対して、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」と回答した生徒の割合が事前アンケートと比べて事後アンケートでは、4.7ポイント上昇した。〈図７〉



〈図７〉

⑮「話合い活動を行うと、自分の考えを深めることができる。」という質問に対して、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」と回答した生徒の割合が事前アンケートと比べて事後アンケートでは、1.9ポイント上昇し、71.7%であった。〈図８〉



〈図８〉

＜まとめ＞

・　既習事項を活用する学習活動は、生徒の主体的な学びを促す上で有効であった。
・　ワークシートの工夫とホワイトボードの活用は、「生徒に試行錯誤を促す点」、「学級全員での共有やまとめの場面」において、生徒の思考を深める上で非常に有効であった。
・　生徒の思考過程に応じた教師の発問の工夫や机間指導による効果的な対話（助言）は、多様な表現方法により生徒の考えを引き出すことができるとともに、主体的・対話的な学習活動を活性化する上で有効であった。

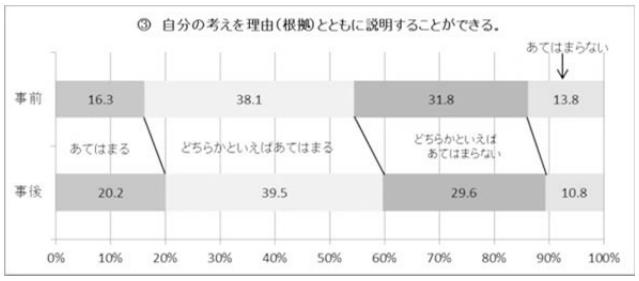
Ⅳ　研究のまとめ

１　成果

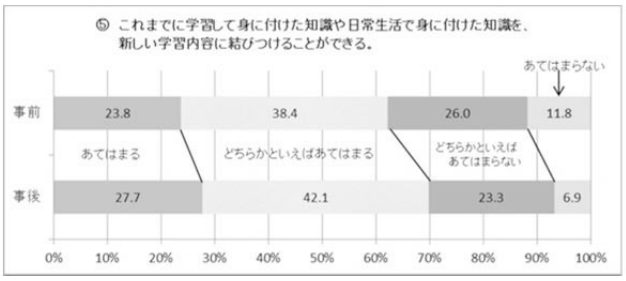
(1)　検証授業の事前・事後のアンケート結果

＜アンケート項目＞

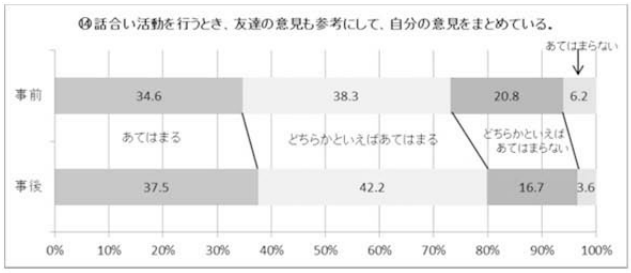
③　自分の考えを理由（根拠）とともに説明することができる。〈図９〉
⑤　これまでに学習して身に付けた知識や日常生活で身に付けた知識を、新しい学習内容に結び付けることができる。〈図 10〉
⑭　話合い活動を行うとき、友達の意見も参考にして、自分の意見をまとめている。〈図 11〉
⑮　話合い活動を行うと、自分の考えを深めることができる。〈図 12〉



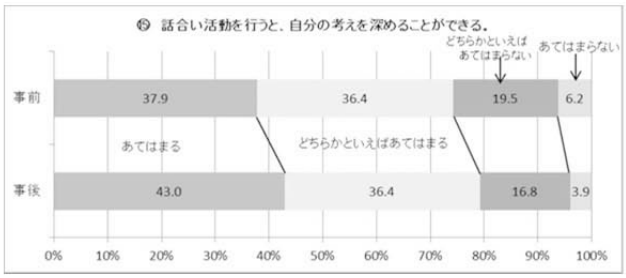
〈図９〉



〈図 10〉



〈図 11〉



〈図 12〉

(2)　成果

アンケート調査③、⑤、⑭、⑮の項目で、検証授業実施後に、「あてはまる」、「どちらかといえばあてはまる」と回答する生徒が増加する結果となった。

⑤からは、単元のまとめとして、それまでに学習した内容を活用して説明する学習活動を設定することは、生徒自身が学習過程を振り返る上で有効であると考えられる。

③、⑭及び⑮からは、学習過程の中で、個人で考える学習活動から、対話を重視した学習活動の流れを重視し、学習の終末場面で個人の考えを振り返る学習活動を取り入れることは、生徒の「主体的な学び」、「対話的な学び」の実現とともに、生徒自身が「深い学び」を実感することができる点で有効であると考えられる。

指導事例１では、生徒自身の気付きや疑問点を学習課題とする教師の発問により、生徒は自分の考えた学習課題に対して、解決のための議論を活発に行う姿が見られた。特に単元の最初などに、このような発問を行うことで生徒の「主体的な学び」を実現できると考えられる。

2　今後に向けた課題

(1)　オープンエンド形式で終える授業では、生徒たちが考えた内容が「正しい」とは限らない。今回出された各グループの意見を次時も取り上げ、それぞれの意見の妥当性を生徒自らが「検証」し、学んでいくような学習展開がより求められる。

(2)　各グループが考えをまとめ、深めていく中で、その「思考過程を共有」するため、指導事例１ではＩＣＴ機器を活用した。この「思考過程の共有」は、必ずしも指導事例１のようなＩＣＴ機器が無くても実現は可能である。

生徒の活動に注目すれば、グループで誰かが他グループの意見を聴きに行ったり、他グループへ説明に行ったりする方法などがあり、教具に注目すれば指導事例２及び指導事例３のようにホワイトボードを使用したり、印刷した授業用の大きめの紙を使う、クリアシートを使うなどの方法が考えられる。

(3)　各グループの意見をＡ３ラミネートに書き、黒板に貼り、各グループの結果を見比べながら教師が生徒の考えを引き出し、整理することを主として学習内容を集約していく授業展開についてさらに事例を積み重ね、検証する。

(4)　「対話的な学び」を通した学習活動の評価として、対話による学習を積み重ねて身に付けた力を評価する工夫や他の生徒へ自身の考えが波及したことが分かるようにするため、ワークシートに生徒が他の生徒の考えについて評価するチェック項目を設けることなどの工夫について、今後、研究を行う必要がある。

中学校保健体育開発委員会

目　次

Ⅰ　研究の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82

Ⅱ　研究構想図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83

Ⅲ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84

Ⅳ　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98

〈中学校保健体育研究開発委員会〉

Ⅰ　研究主題

「生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する学習過程の工夫　～　保健体育科の見方・考え方を働かせる授業づくり　～」

Ⅱ　研究の概要

1　主題設定の理由

これまで学習指導要領は、時代の変化や子供たちの状況、社会の要請を踏まえ、おおよそ10年ごとに、改訂されてきた。現行の学習指導要領（平成20年３月告示）は、平成18年度の教育基本法の改正により明確になった教育の目的・目標及び学校教育法の見直しにより明確になった確かな学力を育むに当たって重視すべき点等を踏まえ、教育の目標や指導すべき内容等を示している。中学校保健体育科の現行の学習指導要領においては、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、体育と保健の一層の連携や発達の段階に応じた指導内容の明確化･体系化を図りつつ指導と評価の充実を進めてきた。

こうした中で、平成28年12月に中央教育審議会より学習指導要領等の改善等について答申が出された。答申では、今の子供たちが生きていくこれからの時代の見通しについて、急激な少子化が進む日本においては、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や絶えまない技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく、また急速に変化し、子供たちが社会で活躍する頃には、厳しい挑戦の時代を迎えていると予測されている。

このような時代にあって、学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め、知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようになることが求められている。

中学校学習指導要領保健体育（平成29年３月）では、心と体を一体として捉え生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することを重視する観点から、体育や保健の見方・考え方を働かせ、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を育成することが目標として示された。この目標の達成を図るためには、学習内容・方法の両方を重視し、学習過程を質的に高めていく必要がある。具体的には、各領域において、「資質・能力（何ができるようになるか)」を明確にし、「見方・考え方」を軸としながら、「学習内容（何を学ぶか)」と、「学習過程（どのように学ぶか)」を組み立て、授業改善の工夫を行う必要がある。

そこで、平成 29 年度研究開発委員会（中学校保健体育）では、中学校保健体育科において、「育成を目指す資質・能力を明確化し、学習内容や学習過程を構造的に整理する。そして、保健体育科の見方や考え方を働かせ、主体的・対話的で深い学びを実現する学習過程を工夫することで、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することができる。」と考え、本研究主題を設定した。

Ⅲ　研究構想図

〈共通テーマ〉

個々の能力を最大限に伸ばすための指導方法及び教材開発

〈現行の中学校保健体育科の目標〉

心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。

〈改訂の経緯〉

○ 急激な少子高齢化の進展に伴う、生産年齢人口の減少
○ グローバル化の進展や技術革新等による社会構造や雇用環境の急速な変化

〈関連する法令・答申等〉

○ 教育基本法
○ 学校教育法
○ 次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ
○ 中央教育審議会答申

〈改訂後の中学校保健体育科の目標〉

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

〈研究仮説〉

中学校保健体育科において、「育成を目指す資質・能力を明確化し、学習内容や学習過程を構造的に整理する。そして、保健体育科の見方・考え方を働かせ、主体的・対話的で深い学びを実現する学習過程を工夫することで、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することができる。」

〈研究主題〉

生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成する学習過程の工夫

～　保健体育科の見方・考え方を働かせる授業づくり　～

〈研究内容〉

1　基礎研究

「改訂後の中学校保健体育科の目標」、「保健体育科で育成を目指す資質・能力」、「保健体育科の見方・考え方」、「主体的・対話的で深い学び」の関係性の整理

2　実践研究

(1)　保健分野と体育分野のそれぞれ一領域で、育成を目指す資質・能力、見方・考え方を働かせる内容、主体的・対話的で深い学びの位置付けを明確にした単元計画の作成及び授業実践

(2)　授業実践及び結果の考察による成果と課題の明確化

Ⅳ　研究の内容

１　基礎研究「中学校保健体育科の目標の理解」

新学習指導要領（平成 29 年３月公示）及び中学校学習指導要領解説保健体育編（平成 29 年７月、以下「解説」という表記。）に基づき、改訂後の目標の文言について具体化し、実践研究の基礎とした。

(1)　現行学習指導要領の目標

「心と体を一体としてとらえ、運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り、明るく豊かな生活を営む態度を育てる。」

目標に基づき、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現することを重視し、体育と保健の一層の連携や発達の段階に応じた指導内容の明確化・体系化を図りつつ、指導と評価の充実を進めてきた。

(2)　新学習指導要領の目標

「体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを実現するための資質・能力を次のとおり育成する。」ことを目指す。

目標に基づき、心と体を一体として捉え生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することを重視する観点から、体育や保健の見方・考え方を働かせ、運動や健康に関する課題を発見し、その解決を図る主体的・協働的な学習活動を通して、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」を育成することを目指している。

ア　保健体育科で育成を目指す資質・能力

解説の目標及び内容に基づき、各分野の「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」で育成を目指す「資質・能力（何ができるようになるか)」を包括的に表２・３に整理した。各領域においては、学習指導要領の「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の内容及び解説の例示の内容に基づいて具体化する。

（表２）保健分野で育成を目指す資質・能力

資質・能力（何ができるようになるのか）		
保健分野	知識及び技能	○個人生活における健康・安全についての科学的な知識や技能 ・現代的な健康課題を踏まえた心身の機能の発達と心の健康、健康と環境、傷害の防止、健康な生活と疾病の予防に関する知識 ・ストレス対処、応急手当に関する基礎的な技能
	思考力、判断力、表現力等	○健康課題を把握し、適切な情報を選択、活用し、課題解決のために適切な意思決定をする力 ・自他の健康課題を発見する力 ・健康情報を収集し、批判的に吟味する力 ・健康課題や知識を活用して多様な解決方法を考える力 ・多様な解決方法の中から適切な方法を選択・決定し、自他の生活に生かす力 ・自他の健康の考えや解決策を対象に応じて表現する力
	学びに向かう力、人間性等	○健康の保持増進のための実践力を育成し、明るく豊かな生活を営む態度 ・自他の健康に関心をもつ。 ・自他の健康に関する取組のよさを認める。 ・自他の健康の保持増進や回復のために協力して活動する。 ・自他の健康の保持増進に主体的に取り組む。

（表３）体育分野で育成を目指す資質・能力

資質・能力（何ができるようになるか）		
体育分野	知識及び技能	○運動の特性に応じた行い方や運動の一般原則などの知識 ○スポーツに関する科学的知識や文化的意義等の基礎的な知識 ・技術の名称や行い方の知識 ・運動の特性や成り立ちの知識 ・体力の要素や高め方の知識 ・運動観察の方法の知識 ・伝統的な考え方の知識 ○各種の運動が有する特性や魅力に応じた基本的な技能 ○知識を踏まえて、基本的な運動の技能として発揮したり身体表現したりする。
	思考力、判断力、表現力等	○自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫できる思考力・判断力・表現力 ・自己の課題に応じた運動の行い方の改善すべきポイントを見付ける力 ・運動実践の場面で、自己の課題に応じて、適切な練習方法を選ぶ力 ・運動実践の場面で、健康や安全を確保するために、体調に応じて適切な活動を選ぶ力 ・状況に応じた自己や仲間の役割を見付ける力 ・作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための適切な関わり方を見付ける力 ・運動を継続して楽しむための、スポーツとの多様な関わり方を見付ける力 ・思考・判断したことを、根拠を示しながら相手に伝えたり表現したりする力
	学びに向かう力、人間性等	○生涯にわたって運動に親しみ、明るく豊かな生活を営む態度 ・運動の楽しさや喜びを味わい、自主的に学習活動に取り組む態度 ・運動における競争や協同の場面を通して、多様性を認識し、公正に取り組む、互いに協力する、自己の責任を果たす、参画するなどの意欲をもつ。 ・相手を尊重し伝統的な行動の仕方を大切にしようとする。 ・運動実践の場面で、健康・安全を確保する。 ・スポーツとの多様な関わり方を場面に応じて選択し、実践することができる態度

イ　保健体育科の見方・考え方

保健体育科としての見方・考え方については、解説の教科の目標及び内容に基づいて、「保健体育科の特質に応じた見方・考え方」を明確にした上で、「各分野における見方・考え方」、「見方・考え方を働かせる学習内容」、「見方・考え方を働かせるための学習過程」を整理した。

ウ　保健体育科の特質に応じた見方・考え方

保健体育科の特質に応じた学習内容に対して、「見方」とは、「どのような視点で物事を捉えるか。」であり、「考え方」とは、「どのような考え方で思考していくか。」ということである。

エ　保健分野における見方・考え方

ウの内容を踏まえ、保健分野における見方・考え方について表４に整理した。

（表４）保健分野の見方・考え方

見方・考え方	「個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉え、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること。」
見方 どのような視点で物事を捉えるか。	個人及び社会生活における課題や情報を、健康や安全に関する原則や概念に着目して捉えること。
考え方 どのような考え方で思考していくか	疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けること。

(ｱ)　保健分野で見方・考え方を働かせる学習内容

保健分野の見方・考え方を働かせる学習内容については、表４に整理した解説の保健分野の見方・考え方では、「原理や概念に着目して」としている。

「原理や概念」については、保健分野の特質に応じた学習内容と捉えることができ、解説の保健分野の各領域の内容に基づき、表５に整理した学習指導要領の「知識及び技能」の内容に対応していると考えられる。具体的な学習内容として、学習指導要領の「知識及び技能」ア～カ及び解説の例示に示されている。

なお、「思考力、判断力、表現力等」については、学習内容が「知識及び技能」と対応していること、「学びに向かう力、人間性等」については、目標において全体としてまとめて示されていることから、見方・考え方を働かせる具体的な学習内容としないことと整理した。

（表５）保健分野で見方・考え方を働かせる学習内容

学習内容（何を学ぶか）	
知識 及び 技能	・健康な生活と疾病の予防、心身の機能の発達と心の健康、傷害の防止、健康と環境の知識に関する知識を理解すること。 ※　学習指導要領に示されたア～カで知識に関する内容
	・心身の機能の発達と心の健康におけるストレスへの対処の技能 ・傷害の防止における応急手当の技能 ※　学習指導要領に示されたア～オで技能に関する内容 具体的な学習内容が例示として示されている。

(ｲ)　保健分野で見方・考え方を働かせるための学習過程

解説に基づき、保健分野において見方・考え方を働かせるための留意点を整理した。

- 生涯にわたって正しい健康情報を選択することができる。
- 健康に関する課題を適切に解決することができる。

オ　体育分野における見方・考え方

ウの内容を踏まえ、体育分野における見方・考え方について表６に整理した。

（表６）体育分野の見方・考え方

見方・考え方	「運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉え、自己の適性等に応じた『する・みる・支える・知る』の多様な関わり方と関連付けること。」
見方 どのような視点で物事を捉えるか。	運動やスポーツを、その価値や特性に着目して、楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点から捉えること。
考え方 どのような考え方で思考していくか	自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けること。

(ｱ)　体育分野で見方・考え方を働かせる学習内容

体育分野の見方・考え方を働かせる学習内容については、表６に整理した解説の体育分野の見方・考え方では、「価値や特性に着目して」としている。

「価値」については、中央教育審議会答申（以下、「答申」という。）において、「公正、協力、責任、参画、共生、健康・安全」等とあり、学習指導要領の「学びに向かう力、人間性等」の内容に対応していると考えられる。

「特性」については、体育分野の特質に応じた学習内容と捉えることができ、解説の体育分野の各領域の内容に基づき、表７に整理した学習指導要領の「知識及び技能」の内容に対応していると考えられる。具体的な学習内容として、学習指導要領の「知識及び技能」ア～オ及び解説の例示に示されている。

なお、「思考力、判断力、表現力等」については、「体の動かし方や行い方」等が示されているが、解説の各領域の例示においても学習内容が「知識及び技能」と対応しているため、ここでは見方・考え方を働かせる具体的な学習内容としないことと整理した。

（表７）体育分野で見方・考え方を働かせる学習内容

学習内容（何を学ぶか）	
知識及び技能	体の動かし方や用具の操作方法などの具体的な知識、運動の実践や生涯スポーツにつながる概念や法則などの汎用的な知識を理解すること。
	各領域における技能や攻防の様相、動きの様相、各領域の特性や魅力に応じた楽しさや喜びを味わうこと。 ※　学習指導要領に示されたア～オで技能に関する内容具体的な学習内容が例示として示されている。
学びに向かう力、人間性等	各領域において愛好的態度及び健康・安全は共通事項とし、公正（伝統的な行動の仕方）、協力、責任、参画、共生の中から、各領域で取り上げることが効果的なもの

(ｲ)　体育分野で見方・考え方を働かせるための学習過程

解説に基づき､体育分野において見方･考え方を働かせるための留意点を整理した。

- 運動やスポーツの特性や魅力を実感することができる。
- 運動やスポーツが多様な人々を結び付けることができる。
- 豊かな人生を送る上で重要であることを認識することができる。

カ　保健体育科における主体的・対話的で深い学び

「学習過程（どのように学ぶか)」について、生徒が教科の特質に応じた見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視した「主体的・対話的で深い学び」が位置付けられた。その学習過程について、表８に整理した。

（表８）「主体的・対話的で深い学び」における学習過程

学習過程（どのように学ぶか）	
主体的・対話的な学び	運動の楽しさや健康の意義等を発見し、運動や健康について興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く取り組み、学習を振り返るとともに、それを考察し、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの学習過程
	運動や健康についての課題解決に向けて、生徒が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げ深め、課題の解決を目指すなどの学習過程
深い学び	自他の運動や健康について課題を発見し、解決に向けて思考錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決する学習過程

キ　「育成を目指す資質・能力」､「見方・考え方」､「主体的・対話的で深い学び」の関係

保健体育科において、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成するためは、各分野において､「資質・能力（何ができるようになるか)」を明確にし､「見方・考え方」を軸としながら､「学習内容（何を学ぶか)」と､「学習過程（どのように学ぶか)」を組み立て、授業改善を行う必要がある。そのため、学習指導要領及び解説の内容を基礎研究に基づいて精査し、表９に関係を整理した。

（表９）「育成を目指す資質・能力」、「見方・考え方」、「主体的・対話的で深い学び」の関係

		資質・能力（何ができるようになるか）	学習内容
保健分野	知識及び技能	個人生活における健康・安全について理解することができる。	健康な生活と疾病の予防、心身の機能の の知識に関する学習内容
		欲求やストレスへの対処の方法及び、応急手当の基本的な技能を身に付けることができる。	①心身の機能の発達と心の健康におけ ②傷害の防止における応急手当の技能
	思考力、判断力、表現力等	健康についての自他の課題を発見し、よりよい解決に向けて思考し判断するとともに、他者に伝える力を身に付けることができる。	・健康な生活と疾病の予防、心身の機能 事象や情報から課題を発見し、疾病等 りする視点から解決方法を考え、適切 ・傷害の防止に関わる事象や情報から課題 回避したり、障害の悪化を防止したりす
	学びに向かう力、人間性等	生涯を通じて、心身の健康の保持増進を目指し、明るく豊かな生活を営む態度を身に付けることができる。	自他の健康に関心をもち、現在だけでな 指す実践力の基礎
体育分野	知識及び技能	各領域の特性や魅力を理解したり、運動やスポーツの価値等を理解したりすることができる。	体の動かし方や用具の操作方法などの具 つながる概念や法則などの汎用的な知識
		運動種目等の固有の技能や動き等を身に付け、各領域の特性や魅力に応じた楽しさや喜びを味わうことができる。	各領域における技能や攻防の様相、動きの や喜びを味わう学習内容
	思考力、判断力、表現力等	自己や仲間の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己（や仲間）の考えたことを他者に伝えることができる。	「体の動かし方や運動の行い方に関する 安全に関する思考力、判断力、表現力等」、 判断力、表現力等」、「生涯スポーツの設 中から、各領域で取り上げることが効果
	学びに向かう力、人間性等	公正に取り組む、互いに協力する、自己の責任を果たす、参画する、一人一人の違いを大切にしようとすることができる。	各領域において愛好的態度及び健康・安 仕方）、協力、責任、参画、共生の中から、
保健の見方・考え方		生涯にわたって正しい健康情報を選択したり、健康に関する課題を適切に解決したりできる。	健康な生活と疾病の予防、心身の機能の 知識に関する知識を理解すること。 心身の機能の発達と心の健康におけるス 応急手当の技能
体育の見方・考え方		各種の運動やスポーツが有する楽しさや喜び及び関連して高まる体力などの視点から自己の適性等に応じた多様な関わり方を見い出すことができる。	体の動かし方や用具の操作方法などの具 がる概念や法則などの汎用的な知識を理 動きの様相、各領域の特性や魅力に応じ 愛好的態度及び健康・安全は共通事項と 各領域で取り上げることが効果的なもの
主体的・対話的な学び		学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげることができる。	各領域で示されている「知識及び技能」、 力、人間性等」
		生徒同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深めることができる。	各領域で示されている「知識及び技能」、 力、人間性等」
深い学び		習得・活用・探求という学びの過程の中で、「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより、深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見出して解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることにむかうことができる。	各領域で示されている「知識及び技能」、 力、人間性等」

（何を学ぶか）	学習過程（どのように学ぶか）
発達と心の健康、傷害の防止、健康と環境	個人生活を中心として科学的に理解できるようにする学習過程
るストレスへの対処の技能	①リラクセーションの方法等を取り上げ、ストレスによる心身の負担を軽くするような対処の方法ができるようになる学習過程 ②胸骨圧迫、ＡＥＤ（自動体外式除細動器）使用などの心肺蘇生法、包帯法や止血法としての直接圧迫法など取り上げ、実習を通して応急手当ができるようになる学習過程
の発達と心の健康、健康と環境に関わる のリスクを軽減したり、生活の質を高めた な方法を選択し、それを伝え合うこと を発見し、自他の危険の予測を基に、危険を る方法を選択し、それを伝え合うこと	学校での身近な生活における健康・安全に関する基礎的な内容について思考・判断し、それらを表現することができるようにするという考え方を生かすとともに、抽象的な思考なども可能になるという発達の段階を踏まえて、個人生活における健康・安全に関する内容について科学的に思考し、判断するとともに、筋道を立てて他者に表現できるようにする学習過程
く生涯を通じて健康の保持増進や回復を目	生徒の内容への興味・関心を高める発問を工夫すること、自他の日常生活に関連が深い教材・教具を活用すること、学校や地域の実情に応じて、保健・医療機関等の参画、養護教諭や栄養教諭、学校栄養職員などとの連携・協力を推進することなど指導方法の工夫を取り入れた学習過程
体的な知識、運動の実践や生涯スポーツに	運動種目等における具体的な知識と汎用的な知識との往還を図ったり、運動に関する領域と体育理論等との関連を図る中で、各領域の特性や魅力を理解したり、運動やスポーツの価値を理解したりすることができる学習過程
様相、各領域の特性や魅力に応じた楽しさ	各領域および運動種目等における技能や攻防の様相、動きの様相との関連に留意した学習過程
思考力、判断力、表現力等」、「体力や健康・ 「運動実践につながる態度に関する思考力、 計に関する思考力、判断力、表現力等」の 的な学習内容	体の動かし方や協力の仕方などの「どのように」行うのかといった具体的な知識だけでなく、その運動を支える原理や原則、意義などの「何のために」行うのかといった汎用的な知識を関連させて理解させた上で、学習場面に適用したり、応用したりして、他者に伝える学習過程
全は共通事項とし、公正（伝統的な行動の 各領域で取り上げることが効果的な学習内容	・上達していくためには繰り返し粘り強く取り組むことが大切であることなどを理解させ、取り組むべき課題を明確にしたり、課題に応じた練習方法を選択するなどを示したりするなど、生徒が練習や試合、発表などに意欲をもって取り組める学習過程 ・各領域に応じて、勝敗などを冷静に受け止め、ルールやマナーを大切にしようとすること及び相手を尊重し、伝統的な行動の仕方を大切にしようとすることに取り組める学習過程 ・よい演技を讃えようとすること及び互いに助け合い教え合おうとすること、自己の責任を果たそうとすることに取り組める学習過程 ・話合いに貢献しようとすること、一人一人の違いを大切にしようとすることに取り組める学習過程 ・自己の体調の変化に応じて段階的に運動したり、用具や場所の安全を確保したりすることに取り組める学習過程
発達と心の健康、傷害の防止、健康と環境の トレスへの対処の技能、傷害の防止における	生徒が生涯にわたって正しい健康情報を選択したり、健康に関する課題を適切に解決したりする学習過程
体的な知識、運動の実践や生涯スポーツにつな 解すること。各領域における技能や攻防の様相 た楽しさや喜びを味わうこと。各領域において し、公正、協力、責任、参画、共生の中から	運動やスポーツの特性や魅力を実感したり、運動やスポーツが多様な人々を結び付けたり豊かな人生を送ったりする上で重要であることを認識したりする学習過程
「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう	運動の楽しさや健康の意義等を発見し、運動や健康について興味や関心を高め、課題の解決に向けて粘り強く取り組み、学習を振り返るとともに、それを考察し、課題を修正したり新たな課題を設定したりするなどの学習過程
「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう	運動や健康についての課題解決に向けて、生徒が他者（書物等を含む）との対話を通して、自己の思考を広げ深め、課題の解決を目指すなどの学習過程
「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう	自他の運動や健康について課題を発見し、解決に向けて思考錯誤を重ねながら、思考を深め、よりよく解決する学習過程

２　指導事例１　［保健分野］

(1)　単元名　心身の機能の発達と心の健康「知的機能、情意機能、社会性の発達」

(2)　単元の目標　［第１学年及び第２学年］

(1)　心身の機能の発達と心の健康について、課題を発見し、その解決を目指した活動を通して、心身の機能の発達と心の健康について理解を深めるとともに、ストレスへの対処を行うことができるようにする。**（知識及び技能）**

(2)　心身の機能の発達と心の健康について、課題を発見し、その解決に向けて思考し判断するとともに、それらを表現することができるようにする。**（思考力、判断力、表現力等）**

(3)　生涯を通じて心身の健康の保持増進を目指し、明るく豊かな生活を営む態度を養うことができるようにする。**（学びに向かう力、人間性等）**

(3)　単元で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
①生活経験などの影響を受けて発達する精神機能について学習した具体例を挙げている。 ②自己の認識の深まりと自己形成について学習した具体例を挙げている。 ③精神と身体の相互影響について学習した具体例を挙げている。 ④欲求やストレスの心身への影響について学習した具体例を挙げている。 ⑤欲求やストレスへの適切な対処について学習した具体例を挙げている。	① 精神機能の発達と自己形成について、課題を発見し、その解決に向けて思考し判断するとともに、それらを表現している。 ② 欲求やストレスへの対処と心の健康について、課題を発見し、その解決に向けて思考し判断するとともに、それらを表現している。	①生涯を通じて、心身の健康の保持増進を目指し、明るく豊かな生活を営もうとしている。
① ストレスへの対処を行うことができる。		

※1　現段階で、文部科学省から評価に対する具体的な考え方や評価規準が示されていないことから、本研究においては、育成を目指す資質・能力について、単元計画の中で重点的に評価することとした。

※2　保健分野における「学びに向かう力、人間性等」については、保健分野の目標において全体としてまとめて示されている。

（表10）保健体育単元学習指導計画【中学校第1学年】心身の機能の発達と心の健康（6時間）

時		1	2	3	4	5	6
資質・能力（何ができるようになるか）	知識及び技能	①生活経験などの影響を受けて発達する精神機能（知識）	②自己の認識の深まりと自己形成（知識）	③精神と身体の相互影響（知識）	④欲求やストレスの心身への影響（知識） ⑤欲求やストレスへの適切な対処（知識）		④欲求やストレスの心身への影響(知識) ⑤欲求やストレスへの適切な対処(知識) ①ストレスへの対処の方法（技能）
	評価	○		○	○		○
	思考力判断力表現力等	①精神機能の発達と自己形成について、課題を発見し、その解決に向けて思考し判断するとともに、それらを表現する。		②欲求やストレスへの対処と心の健康について、課題を発見し、その解決に向けて思考し判断するとともに、それらを表現する。			
	評価		○			○	○
	学びに向かう力・人間性等	①生涯を通じて、心身の健康の保持増進を目指し、明るく豊かな生活を営む態度					
	評価	○			○	○	
学習内容（何を学ぶか）	単元名	心身の機能の発達と心の健康					
	学習内容 知識及び技能	精神機能の発達	自己形成	欲求やストレスへの対処と心の健康			
		・知的機能、情意機能、社会性などの精神機能は、生活経験などの影響を受けて発達すること（知①）	・思春期においては、自己の認識が深まり、自己形成がなされること（知②）	・精神と身体は、相互に影響を与え、関わっていること（知③）	・欲求は、心身に影響を与えることがあること（知④） ・心の健康を保つには、欲求に適切に対処する必要があること（知⑤）	・ストレスは、心身に影響を与えることがあること（知④） ・心の健康を保つには、ストレスに適切に対処する必要があること（知⑤）	・心の健康を保つには、欲求やストレスに適切に対処する必要があること（知⑤） ・ストレスによる心身の負担を軽くするような対処の方法（技①）
	見方・考え方	上記の学習内容（知①）に着目する。	上記の学習内容（知②）に着目する。	上記の学習内容（知③）に着目する。	上記の学習内容（知④、⑤）に着目する。	上記の学習内容（知④）、（知⑤）に着目する。	上記の学習内容（知⑤）、（技①）に着目する。
		上記の学習内容（知①）を生活の質の向上と関連付ける。	上記の学習内容（知②）を生活の質の向上と関連付ける。	上記の学習内容（知③）を生活の質の向上と関連付ける。	上記の学習内容（知④）、（知⑤）を生活の質の向上と関連付ける。	上記の学習内容（知④）、（知⑤）を生活の質の向上と関連付ける。	上記の学習内容（知⑤）、（技①）を生活の質の向上と関連付ける。
学習過程（どのように学ぶか）	・学習活動	・今の心の様子を確認する。 ・心の働きが発達したと感じたことを考える。 ・意見交換をする。(ペア) ・心の働きを分類し、知的機能、情意機能、社会性について理解する。 ・心の発達を感じた経験について考える。 ・意見交換をする。(ペア) ・精神機能の発達に与える影響について考える。※１ ・生活を振り返り、生活の質の向上を図るために大切な考え方や行動を考える。	・前時の学習内容を振り返る。 ・私から見た私について考える。 ・思春期には、様々な経験から次第に自己を認識し、自己形成が図られることを理解する。 ・私から見た友人について意見交換をする。(グループ) ・自分と友人の意見の共通点や相違点などからさまざまな自分を理解する。※２ ・意見を発表し、感じたことを書く。 ・生活を振り返り、生活の質の向上を図るために大切な考え方や行動を考える。	・緊張した場面で体に出る症状について考える。 ・精神と身体は、相互に影響を与え、関わっていることを理解する。 ・精神と身体が相互に関わっていると感じた場面について考える。 ・意見交換をする。(ペア) ・神経などの働きが作用していることを理解する。 ・自分の生活に当てはめて、よりよい行動を考える。(グループ)※３ ・他者の意見を踏まえて、よりよい行動について振り返る。	・欲求について考え、発表する。 ・欲求は心身に影響があることを理解する。 ・心の健康を保つには、欲求に適切に対処する必要があることを理解する。 ・欲求を分類し、生理的な欲求と心理的、社会的欲求について理解する。 ・精神的な安定を図るための適切な対処法について議論する。(グループ)※４ ・グループでの意見を発表し、感じたことを書く。 ・自分の生活に当てはめて、精神的な安定を図るための適切な対処法を考える。	・ストレスについて考え、発表する。 ・ストレスや過度なストレスの体への影響を理解する。 ・心の健康を保つには、ストレスに適切に対処する必要があることを理解する。 ・事例から、ストレスへの適切な対処法について議論する。（グループ）※４ ・グループでの意見を発表する。 ・ストレスによる心身の負担を軽くするような対処の方法を考える。 ・自分の生活に当てはめて、精神的な安定を図るための適切な対処法を考える。	・前時の学習内容を振り返る。 ・自分や周囲の状況に応じた対処方法を選択することが大切であることを理解する。 ・ストレスによる心身の負担を軽くするような対処の方法を行う。 ・他者の対処の方法を観察し、学習した知識と関連付けて適切な対処について考える。※５ ・自分の生活に当てはめて、心の健康を保つための自分に合った適切な対処の方法とその理由についてまとめる。
	主体的・対話的な学び	生活や経験を振り返る活動(※１)を通して、自己の課題を修正したり、新たに設定したりする。	自己や友人の意見を比較する活動(※２)を通して、自己の課題を修正したり、新たに設定したりする。	他者の意見から自分の意見を振り返る活動(※３)を通して、自己の課題を修正したり、新たに設定したりする。	適切な対処法を議論する活動(※４)を通して、自己の課題を修正したり、新たに設定したりする。		
			自己や友人の意見を比較する活動(※２)を通して、自己の思考を広げ深め、課題解決を図る。	他者の意見から自分の意見を振り返る活動(※３)を通して、自己の思考を広げ深め、課題解決を図る。	適切な対処法を議論する活動(※４)を通して、自己の思考を広げ深め、課題解決を図る。		
	深い学び						他者の対処の方法と知識を関連付けて考える活動(※５)を通して、思考を深め、よりよく解決する。

保健体育学習指導案　心身の機能の発達と心の健康「知的機能、情意機能、社会性の発達」

1　本時のねらい

・心の健康を保持増進する視点から、生活と結びつけて振り返る活動を通して、知的機能、情意機能、社会性等は、生活経験や学習の影響を受けながら脳の発達とともに発達することを理解することができるようにする。

・心の健康を保持増進する視点から、生活と学習内容を関連付けて考える活動を通して、自分の生活に関心をもち、健康の保持増進に積極的に取り組もうとすることができるようにする。

段階	○学習内容　・学習活動 ※主体的・対話的で深い学びの場面	○発問　・指導の重点	資質・能力
導入 7分	○本時の確認 ・挨拶　・点呼　・本時のねらいを確認 ○心について考える ・心の様子を学習カードに記入する。	・心の発達と脳の発達の関連性について触れる。	
展開 35分	○心の働きの発達について理解する。 ・発問について学習カードに記入する。 ・意見を伝え、他者の意見を赤ペンで学習カードに記入する。(ペア) ・意見を発表し、分類する。 ○精神機能について理解する。 ・分類した意見を基に、知的機能、精神機能、社会性について理解する。 ○生活を振り返り、心の発達を実感する。 ・発問について学習カードに記入する。 ・意見を伝え、他者の意見を赤ペンで学習カードに記入する。(ペア) ○精神機能の発達は、生活経験や学習の影響等を受けることを理解する。 ・発問に対する自分の意見を学習カードに記入する。※１主体的な学び	○心の働きが発達するとは、どんなことか考えてみよう。 ・発表して出た意見を板書する際には、知的機能、情意機能、社会性の視点で分類する。 ○小学校の低学年の頃と比べて、自分の心の働きが発達したと感じたことを考えてみよう。 ○感情が複雑になったり、記憶や理解する力が向上したりするのは、何が影響しているのか考えてみよう。	学びに向かう力・人間性等
まとめ 8分	○学習内容と自己の生活を振り返る。 ・生活を振り返り、生活の質の向上を図るために、大切な考え方や行動を学習カードに記入する。 ・次時の確認　・挨拶	○生活を振り返り、よりよく心の働きが発達するためには、どんな場面で何を心がけて生活を送ることが大切か考えてみよう。	知識及び技能

考える心・感動する心の発達

人との関わりと自分らしさ

1．学習のねらい

・心の健康を保持増進する視点から、グループでの話し合い活動を通じて、知的機能・情意機能・社会性等は生活経験や学習活動の影響を受けながら脳の発達とともに発達することを理解することができるようにする。

・心の健康を保持増進する視点から、よりよく生活することと学習内容を関連付けてまとめる活動を通して、自分の生活に関心をもち、健康の保持増進に取り組もうとすることができるようにする。

＊心の様子を見てみよう。

	そう思う	やや思う	思わない	わからない
①学習したことをよく記憶できるようになってきた	＋2	＋1	0	－1
②難しい問題も理解できるようになってきた	＋2	＋1	0	－1
③言葉で説明されたことが何かを理解できた	＋2	＋1	0	－1
④自分の考えで行動を決められ瑠ようになってきた	＋2	＋1	0	－1
⑤自分の言葉で気持ちを伝えられるようになった	＋2	＋1	0	－1
⑥人を好きになった（愛されたいと思うようになった）	＋2	＋1	0	－1
⑦自分と合わない人に冷たくなってしまう	＋2	＋1	0	－1
⑧嬉しいと思う気持ちが単純でなくなった ＊成功して嬉しいとか、褒められるだけでないうれしさ	＋2	＋1	0	－1
⑨悲しさが複雑になった ＊嫌な思いだけで無く、愛されないなとか、認められないなとか	＋2	＋1	0	－1
⑩怒るときの心の荒々しさが増した	＋2	＋1	0	－1
⑪合わない友達でも上手くやっていけるようになった	＋2	＋1	0	－1
⑫学校のルールに自分で納得できてきた	＋2	＋1	0	－1
⑬自分の思いや考えを相手に上手に伝えられ瑠ようになってきた	＋2	＋1	0	－1

2，「心の働き」が発達するとは、どんなことかを考えてみよう。【自分の意見は、黒色で、仲間の意見は赤色で書いてみよう。】

A

記憶、見分ける、理解する、判断する、行動しようとするなど

B

感情（好き、嫌い、喜び・悲しみ、怒り）や意志（努力する我慢する、、やり続ける、集中させる）など

C

友達と上手くつきあう、ルールを理解して守る、考えを適切に相手に伝え、など

3．小学校の低学年の頃と比べて、自分の心の働きが発達したと感じたことを考えてみよう。（自分→黒・他人→赤）

4．感情が複雑になったり、記憶や理解する力が向上したりするのは、何が影響しているのか考えてみよう。

5．自分の生活を振り返り、よりよく心の働きが発達するためには、どんな場面で何を心掛けて生活を送ることが大切か考えてみよう。

どんな場面で？

何を心掛けて生活を送る？

1年　　組　　番　　氏名

（授業で使用したワークシート）

3　指導事例２［体育分野］

(1)　単元名　球技 ゴール型「バスケットボール」

(2)　単元の目標　［第１学年及び第２学年］

(1)　勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開できるようにする。

・ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防をすること。**（知識及び技能）**

(2)　攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えることができるようにする。**（思考力、判断力、表現力等）**

(3)　球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、作戦などについての話合いに参加しようとすること、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとすること、仲間の学習を援助しようとすることなどや、健康・安全に気を配ることができるようにする。**（学びに向かう力、人間性等）**

(3)　単元で育成を目指す資質・能力

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
① 特性や成り立ちについて学習した具体例を挙げている。 ② 関連して高まる体力について学習した具体例を挙げている。 ③ 技能の名称や行い方について学習した具体例を挙げている。 ④ 試合の行い方について学習した具体例を挙げている。 --- ① ゴール前での攻防を展開するための基本的なボール操作ができる。 ② ゴール前での攻防を展開するための空間に走り込むなどの動きができる。	① 攻防などの自己の課題を発見している。 ② 合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫している。 ③ 自己や仲間の考えたことを他者に伝えている。	① 球技に積極的に取り組もうとしている。 健康・安全に気を配っている。 ② フェアなプレイを守ろうとする。 ③ 仲間の学習を援助しようとしている。 ④ 作戦などについての話合いに参加しようとしている。 ⑤ 一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとしている。

※　現段階で、文部科学省から評価に対する具体的な考え方や評価規準が示されていないことから、本研究においては、育成を目指す資質・能力について、単元計画の中で重点的に評価することとした。

保健体育学習指導案　球技　ゴール型「バスケットボール」（６／12 時間）

1　本時のねらい

・空間に走り込む動きの視点から、課題解決に向けたチーム練習での活動を通して、得点しやすい空間にいる味方にパスを出すことができるようにする。

・空間に走り込む動きの視点から、課題解決に向けたチーム練習や話合いの活動を通して、動きのポイントやつまずきの事例を参考に、仲間の課題や出来映えを伝えることができるようにする。

段階	○学習内容　・学習活動 ※主体的・対話的で深い学びの場面	○発問　・指導の重点	資質・能力
導入 7分	○本時の確認 ・整列　・挨拶 ・前時の内容と本時のねらいを確認 ・準備運動	・生徒の健康安全を把握する。 ・得点しやすい空間とは、ゴールの近くであることを共通理解させる。	
展開 36分	○基本的なボール操作を身に付ける。 ・シュート練習 ・スクエアパス ○得点しやすい空間にいる味方へパスをつなげる。また、チーム練習や話合いを通して、ねらいの達成を図る。 ・３：３ひし形チーム練習 ※３主体的・対話的な学び ・活動を振り返り、本時のねらいの達成を目指して話し合う。 ※４主体的・対話的な学び ○本時のねらいに沿って振り返る。 ・本時のねらいの達成を目指した活動と関わり方を振り返り、学習カードに記入する。	・狙った方向へ投げること、ゴールの近くでシュートをすることを意識させる。 ・得点しやすい空間にいる味方にパスを出すための動き方のポイントや、つまずきの事例を理解させる。 ○得点しやすい空間にいる味方にパスを出す動きについて考えてみよ ・本時のねらいを達成するために、仲間の課題や出来栄えを伝えることを意識させる。 ○ねらいの達成を目指した活動や、練習や話合いの中での関わり方を考えてみよう。	知識及び技能
まとめ 7分	○ペアにアドバイスをしよう。 ・本時のねらいに即したアドバイスを記入し、伝え合う。 ・ねらいを達成できたか記入する。 ・整理運動、健康・安全確認 ・整列　・次時の確認　・挨拶	・ペアや先生のアドバイスを記入させながら理解を深めさせる。 ・振り返る際には、本時のねらいと関連付けさせる声掛けを行う。	思考力 判断力 表現力 等

（表11）保健体育単元学習指導計画【中学校第1学年】球技　ゴール型「バスケットボール」（12時間）

<table>
<tr><td colspan="2">時</td><td>1</td><td>2</td><td>3</td><td>4</td><td>5</td><td>6</td></tr>
<tr><td rowspan="6">資質・能力（何ができるようになるか）</td><td>知識及び技能</td><td>①特性や成り立ち（知識）
②関連して高まる体力（知識）
③技術の名称や行い方（知識）</td><td>①ゴール前での攻防を展開するための基本的なボール操作（技能）
③技術の名称や行い方（知識）</td><td colspan="4">②ゴール前での攻防を展開するための基本的なボール操作と空間に走り込むなどの動き（技能）</td></tr>
<tr><td>評価</td><td>○</td><td>○</td><td></td><td>○</td><td></td><td>○</td></tr>
<tr><td>思考力判断力表現力等</td><td></td><td></td><td colspan="4">①攻防などの自己の課題を発見する。
②合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫する。
③自己や仲間の考えたことを他者に伝える。</td></tr>
<tr><td>評価</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td>○</td></tr>
<tr><td>学びに向かう力・人間性等</td><td>①球技に積極的に取り組む。</td><td>②健康・安全に気を配る。</td><td colspan="4">③フェアなプレイを守ろうとする
④仲間の学習を援助しようとする
⑤作戦などについての話合いに参加しようとする</td></tr>
<tr><td>評価</td><td>○</td><td></td><td>○</td><td></td><td>○</td><td></td></tr>
<tr><td rowspan="5">学習内容（何を学ぶか）</td><td>単元名</td><td colspan="6">球技　ゴール型　「バスケットボール」</td></tr>
<tr><td rowspan="2">学習内容
知技</td><td>・球技の特性や成り立ち(知①)
・運動に関連して高まる体力(知②)
・技術の名称(知③)</td><td>・基本的なボール操作(技①)
・技術の名称や行い方(知③)</td><td colspan="4">・基本的なボール操作と空間に走り込むなどの動き(技②)</td></tr>
<tr><td>学び</td><td>・愛好的な態度（学①）</td><td>・健康・安全（学②）</td><td colspan="4">・公正（学③）
・協力や責任（学④）
・参画や共生（学⑤）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">見方・考え方</td><td>上記の学習内容
（知①、②、学①）
に着目する。</td><td>上記の学習内容
（知③、学②）
に着目する。</td><td colspan="4">上記の学習内容
（技②、学④）
に着目する。</td></tr>
<tr><td>上記の学習内容
（知①、②、学①）
を「知る」の関わり方と関連付ける。</td><td>上記の学習内容
（知③、学②）
を「見る、知る」の関わり方と関連付ける。</td><td colspan="4">上記の学習内容
（技②、学④）
を「する、見る、支える」の多様な関わり方と関連付ける。</td></tr>
<tr><td rowspan="4">学習過程（どのように学ぶか）</td><td>学習活動</td><td>・本時の学習のねらいを確認する。

・授業の約束事と学習の見通しを確認する。
・ゴール型の特性や、特性に応じた楽しみ方を理解する。
・関連して高まる体力について知る。
・バスケットボールの技術の名称を理解する。
・授業での多様な関わり方を考える。

・今後、学びたいことについて考える。</td><td>・本時の学習のねらいを確認する。
・バスケットボールの技術を身に付けるためのポイントがあることを理解する。
・授業の健康・安全について理解する。

・ボールワーク
・シュート練習
・スクエアパス

・試しのゲーム
３対３ゲーム
(ハーフコート半面)

・学習のねらいの達成を目指した活動と関わり方を振り返り、次時の確認をする。</td><td colspan="2">・本時の学習のねらいを確認する。

・シュート練習
・スクエアパス
・学習のねらいの達成を目指した３対２ひし形チーム練習　(ハーフコート半面)※１
・学習のねらいの達成を目指したチームでの話合い※２
・学習のねらいの達成を目指した活動と関わり方を振り返る。

・ペア同士で学習のねらいに即したアドバイスをする。</td><td colspan="2">・本時の学習のねらいを確認する。

・シュート練習
・スクエアパス
・学習のねらいの達成を目指した３対３ひし形チーム練習　(ハーフコート半面)※３
・学習のねらいの達成を目指したチームでの話合い※４
・学習のねらいの達成を目指した活動と関わり方を振り返る。

・ペア同士で学習のねらいに即したアドバイスをする。</td></tr>
<tr><td>主体的・対話的な学び</td><td></td><td></td><td colspan="2">課題解決に向けた練習(※１)や、話合いの活動(※２)を通して、自己の課題を修正したり、新たに設定したりする。

課題解決に向けた練習(※１)や、話合いの活動(※２)を通して、自己の思考を広げ深め、課題解決を図る。</td><td colspan="2">課題解決に向けた練習(※３)や、話合いの活動(※４)を通して、自己の課題を修正したり、新たに設定したりする。

課題解決に向けた練習(※３)や、話合いの活動(※４)を通して、自己の思考を広げ深め、課題解決を図る。</td></tr>
<tr><td>深い学び</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

<table>
<tr><td>7</td><td>8</td><td>9</td><td>10</td><td>11</td><td>12</td><td colspan="2">時</td></tr>
<tr><td>②ゴール前での攻防を展開するための基本的なボール操作と空間に走り込むなどの動き（技能）</td><td>④試合の行い方（知識）</td><td colspan="4">④試合の行い方（知識）
②ゴール前での攻防を展開するためのボール操作と空間に走り込むなどの動き（技能）</td><td>知識及び技能</td><td rowspan="11">資質・能力（何ができるようになるか）</td></tr>
<tr><td></td><td>○</td><td></td><td>○</td><td></td><td>○</td><td>評価</td></tr>
<tr><td>①攻防などの自己の課題を発見する。</td><td>①攻防などの自己の課題を発見する。
③自己や仲間の考えたことを他者に伝える。</td><td colspan="4">①攻防などの自己の課題を発見する。
②合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫する。
③自己や仲間の考えたことを他者に伝える。</td><td>思考力判断力表現力等</td></tr>
<tr><td>○</td><td></td><td></td><td>○</td><td></td><td>○</td><td>評価</td></tr>
<tr><td>⑤作戦などについての話合いに参加しようとする。
⑥一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする。</td><td colspan="2">③フェアなプレイを守ろうとする。
④仲間の学習を援助しようとする。
⑤作戦などについての話合いに参加しようとする。</td><td colspan="2">①球技に積極的に取り組む。
③フェアなプレイを守ろうとする。
⑥一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする。</td><td></td><td>学びに向かう力・人間性等</td></tr>
<tr><td>○</td><td></td><td>○</td><td></td><td>○</td><td></td><td>評価</td></tr>
<tr><td colspan="6">球技　ゴール型　「バスケットボール」</td><td>単元名</td><td rowspan="5">学習内容（何を学ぶか）</td></tr>
<tr><td>・基本的なボール操作と空間に走り込むなどの動き(技②)</td><td colspan="5">・球技　ゴール型「バスケットボール」の試合の行い方(知④)
・基本的なボール操作と空間に走り込むなどの動き(技②)</td><td>知技</td></tr>
<tr><td>・参画や共生
(学⑤)(学⑥)</td><td colspan="3">・公正（学③）
・協力や責任（学④）
・参画や共生（学⑤）</td><td colspan="2">・愛好的な態度（学①）
・公正（学③）
・参画や共生（学⑥）</td><td>学習内容
学び</td></tr>
<tr><td>上記の学習内容
（技②）
に着目する。</td><td>上記の学習内容
（知④）
に着目する。</td><td colspan="4">上記の学習内容
（技②、学①）
に着目する。</td><td rowspan="2">見方・考え方</td></tr>
<tr><td>上記の学習内容
（技②）
を「見る、知る」の多様な関わり方と関連付ける。</td><td>上記の学習内容
（知④）
を「支える」の多様な関わり方と関連付ける。</td><td colspan="4">上記の学習内容
（技②、学①）
を「する、見る、支える、知る」の多様な関わり方と関連付ける。</td></tr>
<tr><td>・本時の学習のねらいを確認する。
・前時までの学習内容を振り返る。

・学習してきた内容の視点から、映像や資料を通して、自己やチームの課題を考える。
・チームでの話合い※5

・学習のねらいの達成を目指した活動と関わり方を振り返る。

・チーム内で学習のねらいに即したアドバイスをする。</td><td>・本時の学習のねらいを確認する。
・シュート練習
・スクエアパス

・試合の行い方や運営の仕方を考える。
・自己やチームの課題を確認する。
・試しのゲーム
・５対５ゲーム
(ハーフコート全面)
・チームでの話合い※6
・自己やチームの課題の解決に向けた活動と関わり方を振り返る。

・チーム内で学習のねらいに即したアドバイスをする。</td><td colspan="2">・本時の学習のねらいを確認する。
・前時までの内容を振り返り、個人やチームの能力に応じた作戦を確認する。
・試合や試合運営での関わり方を考える。

・チームの作戦に応じた練習
・５対５エリア設定ゲーム
（ハーフコート全面）
・試合運営(審判等)
・作戦に応じた攻防を目指した活動と関わり方を振り返る。※7

・チーム内で学習のねらいに即したアドバイスをする。</td><td colspan="2">・本時の学習のねらいを確認する。
・前時までの内容を振り返り、個人やチームの能力に応じた作戦を立てる。
・試合や試合運営での関わり方を考える。

・５対５エリア設定ゲーム
（ハーフコート全面）
・試合運営(審判等)
・作戦に応じた攻防を目指した活動と関わり方を振り返る。※8

・チーム内で学習のねらいに即したアドバイスをする。</td><td>学習活動</td><td rowspan="4">学習過程（どのように学ぶか）</td></tr>
<tr><td>課題解決に向けた話合いの活動(※5)を通して、自己の課題を修正したり、新たに設定したりする。</td><td>課題解決に向けた話合いの活動(※6)を通して、自己の課題を修正したり、新たに設定したりする。</td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td><td rowspan="2">主体的・対話的な学び</td></tr>
<tr><td>課題解決に向けた話合いの活動(※5)を通して、自己の思考を広げ深め、課題解決を図る。</td><td>課題解決に向けた話合いの活動(※6)を通して、自己の思考を広げ深め、課題解決を図る。</td><td colspan="2"></td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td></td><td></td><td colspan="2">作戦に応じた攻防を目指した練習や試合を振り返る活動(※7)を通して、思考を深め、よりよく解決する。</td><td colspan="2">作戦に応じた攻防を目指した試合を振り返る活動(※8)を通して、思考を深め、よりよく解決する。</td><td>深い学び</td></tr>
</table>

Ⅴ　研究のまとめ

1　授業実践及び結果の考察

(1)　育成を目指す「資質・能力（何ができるようになるか)」を明確にした授業づくり

ア　保健分野

単元計画において、単元全体及び各時間に育成を目指す「資質・能力（何ができるようになるか)」を明確にして授業を展開した。そして、授業の終わりに本時のねらいに関連して、「自分の生活を振り返り、よりよく心の働きが発達するためには、どんな場面で何を心掛けて生活を送ることが大切ですか。」と発問することで、自分自身の生活に関連付けて考えることができているか確認した。

その結果、34 人中 33 人の生徒が自分自身の生活に関連付けた記述をすることができた。課題としては、心身の機能の発達は生活経験や学習の影響を受けながら発達することを理解させるため、教材や発問等の工夫により生徒に具体的な視点を与え、実生活のより多様な場面と関連付けることができるようにすることである。

「実生活と関連付けることができた生徒の記述（学習カードより抜粋)」

A	友達関係で、学校でみんなで協力するとき、苦手な子も仲良しの子も一緒にいられるようにたくさんの人の長所を見付けていく。

イ　体育分野

保健分野と同様に単元計画において、単元全体及び各時間に育成を目指す「資質・能力（何ができるようになるか)」を明確にして授業を展開し、授業の終わりに本時のねらいに関連して、「パスを受けるために、ゴール前の空いている場所に動くことができたか。」について達成度やその理由を聞くことで、実現状況を確認した。

その結果、33 人中 27 人の生徒が学習のねらいである「空間に走り込む動き」の達成度について「できた」と肯定的な回答をし、「自分が動くことができたか。」や「仲間や相手の動きを見ることができたか。」などの発問に具体的に記述することができた。

課題は、「仲間に動き方の助言を伝えることができたか。」の発問に記述できる生徒が少ないため、学習活動とカード等の関連を一層図り具体的な視点を与えることである。

「仲間に動き方の助言を伝えることができなかった生徒の記述（学習カードより抜粋)」

B	自分のプレイに夢中で、あまり意識できなかった。

(2)　見方・考え方を働かせる「学習内容（何を学ぶか)」を明確にした授業づくり

ア　保健分野

見方・考え方を働かせる「学習内容（何を学ぶか)」を明確にした授業「何を学ぶか」を明確にして授業を展開した。そして、学習カードで、見方・考え方を働かせる学習内容である「知的機能」、「情意機能」、「社会性」に着目して、小学校の低学年の時代に比べて、どのように発達しているかを発問することで、生活の質の向上に関連付けて考えることができているか確認した。

その結果、34 名中 30 名が見方を働かせる「知的機能」、「情意機能」、「社会性」に着目して、生活の質の向上に関連付けた考え方を記述することができた。課題としては、心身の機能の発達に影響を与える要素について、見方・考え方を働かせるため、教材や発問等の工夫により生徒に具体的な視点を与え、生活の質の向上と関連付けることである。

「学習内容に着目して、生活の質の向上に関連付けている記述（学習カードより抜粋)」

	知的機能	情意機能	社会性
C	実物がなくても自分の頭の中で想像して考える事ができるようになった。	自分の感情を制御できるようになった。	相手がどう受け止めるかを考えながら行動できるようになった。

イ　体育分野

見方・考え方を働かせる学習内容である「空間に走り込む動き」について、授業の導入で「知識（知る視点)」を学習し、授業の終わりに振り返ることで、「する・みる・支える」の多様な関わり方に関連付けて考えることができたか確認した。

その結果、見方・考え方を働かせる「空間に走り込む動き」に着目して、自己の適性等に応じた「する・みる・支える」の多様な関わり方に関連付けて具体的に記述できた生徒は、34 名中「する視点」では 25 名、「みる視点」では 23 名、「支える視点」では 12 名であった。課題としては、「支える視点」の記述ができる生徒が少ないため、学習カード等の工夫を図り、学習内容に着目して生徒同士が伝え合う活動を意図的に設定することである。

「する・みる・支える」の視点について、生徒の具体的な記述（学習カードより抜粋)」

D する視点	スペースを見付けて走り込み、パスをもらうことができた。
E みる視点	仲間の場所を見てパスを出して、シュートを打ってもらった。
F 支える視点	仲間がセットシュートをしようとしている場面で、ランニングの方がよいと教えた。

(3)　「学習過程（どのように学ぶか)」を明確にした授業づくり

ア　保健分野

育成を目指す資質・能力、見方・考え方を働かせる学習内容との関連を考え、「学習過程（どのように学ぶか)」を明確にして、本時では主体的・対話的な学びを意識して授業を展開した。まず授業の導入で、「知的機能」、「情意機能」、「社会性」について学習し、授業の展開で小学校の低学年の時代に比べて、それらがどのように発達しているかを考えた。次に、「感情が複雑になったり、記憶や理解する力が向上したりするのは、何が影響しているのか。」を発問することで、自分の生活や経験を振り返り考えることができているか確認した。

その結果、34 名中 31 名が自分の生活や経験を振り返り、自分の考えを記述することができた。課題としては、生徒の「主体的・対話的で深い学び」を引き出すため、教師が、教材や発問等の工夫により生徒に具体的な視点を与え、学習の見通しを振り返る場面、グループなどで対話する場面等を計画的に設定した「学習過程」の工夫を図ることである。

「自分の生活や経験を振り返り考えている生徒の記述（学習カードより抜粋)」

G	様々な経験で学んだこと、感じたこと、考えたことが影響していると思う。

イ　体育分野

本時では「学習過程（どのように学ぶか)」を明確にして、主体的・対話的な学びを意識して授業を展開した。そして、「空間に走り込む動き」について、授業の導入で「知識（知る視点)」を具体的な動きを通して全体で学習し、「パスを受けるために、ゴール前の空いている場所への動き方」について各自が考えた上で、課題解決に向けたチーム練習を行った。そしてまとめで、互いに工夫した点や練習や話合いでの関わり方を振り返った。

その結果、34名中27名が「空間に走り込む動き」に関連し、「課題の修正や新たな課題の設定」などの主体的な学びに関わる発問に具体的に記述することができた。課題としては、「自己の役割に応じた活動の仕方」の対話的な学びに関する発問に記述できる生徒が少ないため、学習活動とカード等の関連を一層図り「対話的で深い学び」を引き出す「学習過程」の工夫を図ることである。

「課題の修正や新たな課題の設定について、生徒の具体的な記述（学習カードより抜粋)」

H	マンツーマンで守備をされた時に、どうやってフリーになるか。

2　研究の成果と今後の課題

本研究では、中学校保健体育科において、「育成を目指す資質・能力を明確化し、学習内容や学習過程を構造的に整理する。そして、保健体育科の見方・考え方を働かせ、主体的・対話的で深い学びを実現する学習過程を工夫することで、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力を育成することができるのではないか。」という仮説に基づき、研究を進めた。その結果、以下のような成果と課題が明らかになった。

ア　成果

(ｱ)　基礎研究

「中学校保健体育科の目標」の内容を理解し、学習指導要領改訂の方向性の柱である「資質・能力（何ができるようになるか)」、「学習内容（何を学ぶか)」、「学習過程（どのように学ぶか)」を軸として、「中学校保健体育科の目標」、「育成を目指す資質・能力」、「保健体育科の見方・考え方」、「主体的・対話的で深い学び」を一覧にして整理することで、それぞれの関係性を明確にすることができた。

(ｲ)　授業実践

- 「育成を目指す資質・能力」、「見方・考え方を働かせる内容」、「主体的・対話的で深い学び」の位置付けを明確にした単元計画を作成することで、生涯にわたって健康を持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成を目指す学習過程作成の考え方を明らかにすることができた。
- 単元計画に基づいて、学習指導案や学習カードを作成し、「資質・能力」、「学習内容」、「学習過程」を明確にして授業を展開することで、生涯にわたって健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現する資質・能力の育成を目指す授業の進め方を明らかにすることができた。

イ　課題

- 基礎研究の内容をより理解しやすいように精査し、中学校保健体育科の次期学習指導要領への円滑な移行を図るため、研究発表等を通して普及・啓発を図ること。
- 保健分野の授業では、生徒が学習内容を実生活のより多様な場面に当てはめ、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付けることができるよう、教材や発問、学習過程の工夫により具体的な視点を与えること。
- 体育分野の授業づくりでは、生徒が見方・考え方を働かせる学習内容に着目して「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付けることができるよう、教材や発問、学習過程の工夫により具体的な視点を与えること。

中学校外国語研究開発委員会

目　次

Ⅰ　研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・102

Ⅱ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・103

Ⅲ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・107

Ⅳ　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・120

〈中学校外国語研究開発委員会〉

研究主題・副主題

即興性を高める指導手順とポイント

～「主体的・対話的で深い学び」の視点を通して～

研究の概要

新学習指導要領では、情報化やグローバル化等による急激な社会の変化に対応できる人材を育成するため、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進すること、また、外国語科としては、対話的な言語活動を重視する観点から、実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能を身に付けるようにすることが求められている。

本研究では、中学校外国語科において、即興性を高める指導手順とポイントを、新学習指導要領の中で授業改善の視点として述べられている「主体的・対話的で深い学び」から研究開発するものとする。

Ⅰ　研究の目的

中学校学習指導要領解説外国語編（文部科学省 平成 29 年 7 月）において述べられているように、今の子供たちが成人して社会で活躍する頃には、グローバル化の進展や絶え間ない技術革新等により、社会構造や雇用環境が大きく、急速に変化し、一人一人が個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出していくことが期待されている。学校教育には、子供たちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で目的を再構築することができるようにすること、すなわち、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進することが求められている。また、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会の開催を控え、日常的に外国人とのコミュニケーションを図る機会が増加することが予想されており(「都民ファーストでつくる『新しい東京』～2020 年に向けた実行プラン～」平成 28 年 12 月)、世界の人々とコミュニケーションを図ることができる能力を身に付けることが重要な課題となっている。

中学校外国語科においてはこれまでの授業改善の成果として、授業における生徒の英語による言語活動の割合などが改善されてきていることが挙げられる一方で、文法・語彙等の知識の習得に重点が置かれ、「話すこと」及び「書くこと」などの言語活動や「やり取り」、「即興性」を意識した言語活動、技能統合型の言語活動が十分に行われていないなどの課題や、学年が上がるに従って英語の学習意欲に課題が生じるという指摘がされている。そこで、新学習指導要領では互いの考えや気持ちなどを伝え合う対話的な言語活動を一層重視する視点から、「話すこと」を新たに「話すこと［やり取り］」と「話すこと［発表］」の２領域として設定するとともに、言語の使用場面や言語の働きを適切に取り上げ、語、文法事項などの言語材料を効果的に関連付けた言語活動とするなどの改善・充実が図られている。また、目標を達成するための重要な条件として「発表」、「やり取り」両領域において、「即興で」が掲げられている。

しかし、このように新学習指導要領で求められている生徒の「即興性」については、平成29年7月31日から平成29年８月２日まで行われた東京都の英語科教員を対象とした「生徒の英語によるパフォーマンスを高めるための研修」に参加した1,275人を対象としたアンケート調査において「即興で話す力を高めていく指導」について、60%の教員が「不安がある」または「とても不安がある」と回答しており、その指導方法を確立している教員は少ないと言える。また、平成31年度から文部科学省が中学校３年生を対象に「話すこと」ことも含めた４技能を測る英語の学力調査を実施するとともに(「全国学力・学習状況調査における中学校英語の実施に関する最終報告」全国的な学力調査に関する専門家会議　平成29年３月29日)、大学入学者選抜においても平成32年度から大学入試センター試験にかえて「大学入試共通テスト（仮称)」が実施されるなど、「話すこと」を含めた４技能評価へ転換する動きがあり（「高大接続改革の実施方針等の策定について」文部科学省　平成29年７月13日)、教員の「即興的に話す力」に関する指導力を高めていくことは、日本の英語教育の質的向上を図る上で、喫緊の課題となっている。

そこで、本研究では、これらの背景と実態を踏まえ、目指す生徒像を①学ぶことに興味や関心をもち、意欲的に学ぶことができる生徒（「主体的な学び」)、②他者との協働や対話等を通して、自分の考えを広げ深められる生徒（「対話的な学び」)、③自分の考えや思いなどを即興的に発信する表現力がある生徒（「深い学び」）とし、研究主題を「即興性を高める指導手順とポイント　～『主体的・対話的で深い学び』の視点を通して～」とした。

Ⅱ　研究の方法

１　研究の視点

本研究では、生徒の発達の段階に応じ、身の回りのこと及び社会や世界との関わりを重視した内容等、現実感のある目的・場面・状況を設定した上で、「話すこと」を中心とした言語活動を行う。教師は生徒が意欲や見通しをもって学習に取り組むことのできる「主体的な学び」を工夫した上で、「対話的な学び」を通して自己の発信する表現内容や英語による表現方法を広げさせ、現実にその場面に遭遇した際に英語で発信のできる「深い学び」を得させることにより、生徒の即興的な自己表現力を育成することを目指す。指導方法を、「帯活動」、「文法指導」、「教科書本文の指導」の場面ごとに研究するとともに、指導方法の提案を行う。

２　研究の仮説

生徒にとって現実感のあるコミュニケーションの目的・場面・状況を設定した上で、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を視点とし、既習事項を繰り返し使わせる指導を充実させれば、即興的な自己表現力が身に付くであろう。

３　研究の手順

(1)　即興的な自己表現力を身に付けさせるための具体的な指導の方向性

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申)」(文部科学省　平成28年12月21日)、中学校学習指導要領

解説外国語編（平成 29 年７月）を基に、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の３点を視点として、具体的な指導の方向性を考察した。

視点①　主体的な学び

「主体的な学び」では、外国語を学ぶことに興味や関心をもち、どのように社会や世界と関わり、学んだことを生涯にわたって生かそうとするかについて、見通しをもって粘り強く学ぶとともに、自分の意見や考えを発信したり評価したりするために、自らの学習のまとめを振り返り、次の学習につなげることが重要である。このため、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等を明確に設定し、学習の見通しを立てたり振り返ったりする場面を設けるようにする。

＜具体的な実践＞

○CAN-DO リストに対応した単元の目標（単元に該当する指標形式の目標）を設定し、その単元が終了した際に「英語で何ができるようになるか」を明確にし、生徒の学習意欲を喚起する。

○学習を生徒自身の興味・関心や目標と関連付けたり、実生活に即した親しみやすい題材や実際に使われている広告、店のメニューなどを素材としたりすることで、生徒の知的好奇心を喚起したり、学ぶことへの関心を高める。

視点②　対話的な学び

「対話的な学び」では、他者を尊重した対話的な学びの中で、社会や世界との関わりを通じて情報や考えなどを伝え合う言語活動の改善・充実を図ることが重要である。このため、言語の果たす役割が他者とのコミュニケーション（対話や議論等）であることを重視しつつ、コミュニケーションを行う目的・場面・状況に応じて、他者を尊重しながら対話が図られるような言語活動を行う学習場面を計画的に設けるようにする。

＜具体的な実践＞

○互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を設定する（ペア・グループワークなど)。

視点③　深い学び

「深い学び」では、言語の働きや役割に関する理解、外国語の音声、語彙・表現、文法の知識や、それらの知識を五つの領域において実際のコミュニケーションで運用する力を習得し、実際に活用して、情報や自分の考えなどを話したり書いたりする中で、外国語教育における「見方･考え方」を働かせて思考･判断･表現し、学習内容を深く理解し、学習への動機付け等がされる「深い学び」につながり、資質・能力の三つの柱に示す力が総合的に活用・発揮されるようにする。このため、授業において、コミュニケーションを行う目的・場面・状況等に応じた言語活動を効果的に設計する。

＜具体的な実践＞

○即興的なやり取りを行う言語活動を設定する。

○Sharing Time（個々の学びを共有する時間）を設定する。

○Reflection Time（Sharing Time で共有した個々の学習成果を、さらに教師が効果的なインタラクション(やり取り)を行うことにより、生徒全体に広げ深める。)を設定する。

(2)　学びの場面ごとの指導方法の研究

本研究では、(1)の視点を以下の学びの場面から研究するものとし、仮説を検証するとともに、指導方法の提案を行うものとする。

帯活動

知識や技能を習得するために、帯活動を通してスパイラルな学習機会をもつことが、大切であると考え、本研究では、CAN-DO リストに対応した単元の目標（単元に該当する指標形式の目標）を達成するために、単元を通して帯活動を活用する指導の研究を行った。またその活動を、前述の「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の視点を基に実施し、指導内容や教材を開発した。

文法指導

文構造の解説や文型練習を中心とした指導ではなく、コミュニケーションを行う目的・場面・状況を設定して言語活動を行うことにより、理解・習得・活用を目指す指導方法を研究した。

また、指導の流れ（導入－言語活動－まとめ）の中で、教師と ALT が見本を見せたり、教師が生徒に対して効果的なインタラクションを行ったりすることで、実質的なコミュニケーションのモデルを示したり、実際のコミュニケーションの機会を与えたりする実践を行った。

教科書本文の指導

単に教科書本文の内容理解を行うのではなく、オーラル・インタラクションによる導入や、教科書本文を活用した言語活動を取り入れた授業デザインを研究した。また、生徒自身が教科書の本文を自分と関連付けて考えられるよう指導の工夫を研究した。

(3)　検証授業における、成果と課題の整理

生徒にとって現実感のあるコミュニケーションの目的・場面・状況を設定した上で、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を視点とし、既習事項を繰り返し使わせる指導を充実させれば、即興的な自己表現力が身に付くという仮説の検証のために、研究開発委員の所属校において、３回の検証授業を行った。

検証授業では、コミュニケーションの目的・場面・状況を設定し、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の指導の視点に基づいた言語活動を学びの場面に応じて実施した。検証授業実施後、それぞれの言語活動がねらいに即したものであったか、生徒にアンケート調査を実施し、成果と課題を整理した。

研究構想図

社会的背景

1　情報化やグローバル化等、将来の変化を予測することが困難な時代を生きる中で、子供たちが他者と協働し課題を解決する力が必要とされる。
2　訪日外国人の増加、2020 年オリンピック・パラリンピックの開催等、一層の実質的な外国語運用能力が必要とされる。
3　平成 31 年度から文部科学省が「話す」ことも含めた 4 技能を測る英語の学力調査を実施する。
4　2020 年度から大学入試共通テスト（仮称）を実施する。４技能を評価する新しい形に変わる。

＜新学習指導要領改訂のポイント＞

○互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を重視し、具体的な課題等を設定するなどして、学習した語彙・表現などを実際に活用する活動を充実させ、言語活動の実質化を図る。
○「話すこと」について[やり取り]、[発表]両領域で「即興性」が求められる。

＜生徒の実態＞

○学年が上がるに従って英語の学習意欲に課題
○４技能のうち、特に発信能力（話す、書く）に課題

＜指導の実態＞

○「やり取り」、「即興性」を意識した言語活動が十分ではない。
○東京都の英語科教員 1,275 人を対象としたアンケート調査において、「即興で話す力を高めていく指導について」60%の教員が「不安がある」または「とても不安がある」と回答

目指す生徒像

① 学ぶことに興味や関心をもち、意欲的に学ぶことができる生徒（「主体的な学び」）
② 他者との協働や対話等を通して、自分の考えを広げ深められる生徒（「対話的な学び」）
③ 自分の考えや思いなどを即興的に発信する表現力がある生徒（「深い学び」）

研究主題：即興性を高める指導手順とポイント ～「主体的・対話的で深い学び」を通して～

研究仮説

生徒にとって現実感のあるコミュニケーションの目的・場面・状況を設定した上で、「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」を視点とし、既習事項を繰り返し使わせる指導を充実させれば、即興的な自己表現力が身に付くであろう。

研究内容

現実感のあるコミュニケーションの目的・場面・状況の設定と表現活動を学びの場面（帯活動・文法指導・教科書本文の指導）に応じて行う。

①主体的な学び

意欲や見通しをもって学習に取り組ませる。

○CAN-DO リストに対応した単元に該当する指標形式の目標を設定
○学習を生徒自身の興味・関心や目標と関連付け、生徒の知的好奇心を喚起

②対話的な学び

外国語で伝え合う対話的な言語活動を設定する。

○互いの考えや気持ちなどを外国語で伝え合う対話的な言語活動を設定

③深い学び

即興的なやり取りを行う言語活動を設定するとともに、活動を共有し振り返らせる場面を設定する。

○即興的なやり取りを行う言語活動を設定
○Sharing Time（個々の学びを共有する時間）を設定
○Reflection Time（対話的に学びを振り返る時間）を設定

Ⅲ　研究の内容

１　単元の指導手順とポイント

「主体的・対話的で深い学び」の実現を図り、即興的な自己表現力を付けさせるために、以下のような授業手順と実施のポイントをまとめた。

１ 生徒の実態を把握	**適切な課題を設定するために、既習事項の定着状況や学習上の課題を把握する。**
２ 単元目標の設定	**思考力・判断力・表現力等の育成を目指し、「英語で何ができるようになるか」という視点で、「単元に該当する指標形式の目標」を設定する。** ＜ポイント＞ 2-(1)文法事項の定着そのものではなく、ターゲットとする文法事項を用いて「単元末に何ができるようになるか」を具体的に示す目標と活動を設定する。 2-(2)目標は、即興的に話すことに関する目標とする。 2-(3)具体的なゴールイメージをもつことで、生徒が学習に見通しをもてるようにする。
３ 単元計画の作成	**単元末に上記の「２ 単元目標の設定」で設定した「単元に該当する指標形式の目標」が達成できるように、バックワードデザイン（逆向き設計）で単元指導計画を作成する。目標の達成に向けて、１回１回の授業でできるようになることを積み上げ、単元を通して実現を図るようにする。** ＜ポイント＞ 3-(1)単元のはじめに、教師が生徒に具体的なゴールモデルを見せる（教師が実際にやってみせるなど)。 3-(2)毎回の授業のはじめに、帯活動を行う。帯活動は、「単元に該当する指標形式の目標」のためのスパイラルな練習（言語活動）を行う機会とする。 3-(3)文法指導においては、現実感のあるコミュニケーションの場面・目的・状況を設定した上で、言語活動を行う。文構造の解説や、文型練習を中心とした指導にならないようにする。 3-(4)教科書本文の指導においては、内容理解や音読練習だけでなく、本文の表現を素材とした、言語活動を設定する。 3-(5)言語活動において、自己との関連性をもたせるようにする。英語を使って自分のことを伝え合うことで、学習への関心が高まることが期待できる。 (ペア・グループワークなど)

	3-(6)互いの気持ちや考えを外国語で伝え合う、対話的かつ即興的な言語活動を設定する 3-(7)対話的に学びを振り返る時間や、個々の学びを共有し、更に学びを深める時間を設定する。
4 指導実践（授業の実施）	**単元計画に基づき、授業を実施する。** ＜ポイント＞ 4-(1)授業を実施する中で、即興的なコミュニケーションを行う機会を小刻みに与え、教師と生徒が実際にやり取りを行い、実質的なコミュニケーションのモデルを示す。
5 目標達成への具体的な取組 **評価** **振り返り**	**「単元に該当する指標形式の目標」を達成したか評価するためのパフォーマンス活動・テスト等を実施する。** ＜ポイント＞ 5-(1)活動後、生徒に振り返りをさせ、次の学習につなげられるようにする。 5-(2)生徒の自己評価内容、教師による評価から学習活動を見直し、次の学習場面でより実態に即した指導内容とすることで、主体的な学びの実現を目指す。

2 学びの場面ごとの指導手順とポイント

(1) 帯活動の指導手順とポイント

「単元に該当する指標形式の目標」を達成するため、スパイラルな練習（言語活動）を行う機会として、帯活動を実施する。(→110 ページ 検証授業２を参照)

手順１ 言語活動の実施

Ｑ＆Ａ、インタビュー、チャット、即興スピーチなど、「単元に該当する指標形式の目標」に応じた即興的に話すことに関わる内容の帯活動を授業のはじめに毎回行う。

資料）第１学年 Ｑ＆Ａ活動用シート（検証授業２で使用したもの）

	話題	Questions	Answers
1	あいさつ	How are you?	(I'm) good[fine], thanks.
2	あいさつ	How are you doing?	Fine, thank you.
3	あいさつ	How do you do?	How do you do?
4	天気	How's the weather today?	It's sunny[cloudy / rainy].

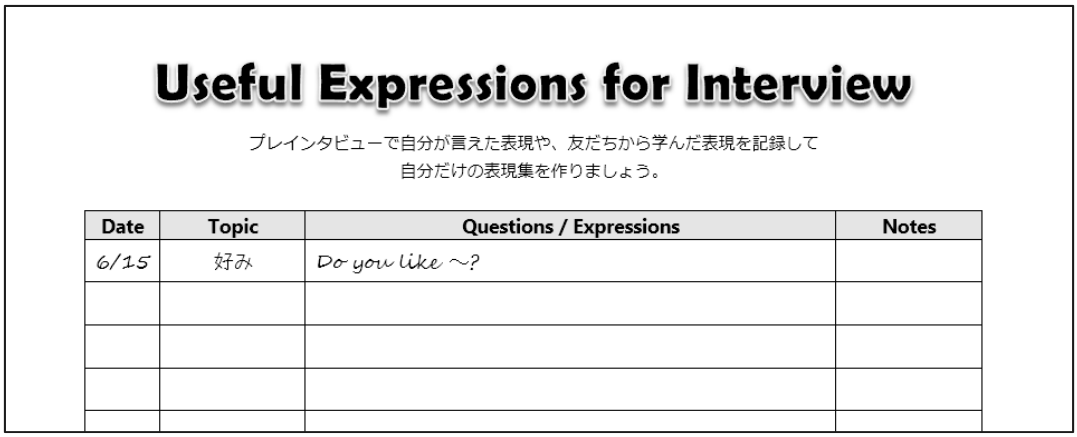
手順２　Sharing Time / Reflection Time

手順１の言語活動で自分が使った表現や、ペアの相手から学んだ表現内容を、別の生徒やクラス全体とシェアする。他の生徒の発話内容を知ることで、自分の発話内容を改善したり、表現を増やしたりすることをねらいとする。

＜ポイント＞

○活動後、教師と生徒が実際に英語でやり取りをしながら、発話内容をシェアし、実質的なコミュニケーションのモデルを示す。モデルを見せたあと、もう一度すぐにそれを実践してみることで、よりよいコミュニケーションの成功体験をさせる。

資料）表現の記録用紙（検証授業１で使用したもの）



Useful Expressions for Interview

プレインタビューで自分が言えた表現や、友だちから学んだ表現を記録して
自分だけの表現集を作りましょう。

Date	Topic	Questions / Expressions	Notes
6/15	好み	Do you like ～?	

ポイント1

自由なトピックで生徒同士が会話を行った後、1トピックを取り上げ、話題の広げ方を教師がモデルとして示し、再び生徒に活動させている。

＜検証授業１の例＞

例）３年生　ペアでのインタビュー活動（帯活動のＱ＆Ａ）の後で

T: Who was your partner, S1?

S1: S2.

T: What did you ask S2?

S1: “What’s your favorite *sushi*?”

T: I see.　S2, do you like *sushi*?

S2: Yes.

T: What’s your favorite *sushi*?

S2: I like salmon.

T: Salmon!　Nice.　Everyone, do you like *sushi*?

“Yes, I do.” Hands up.　（多くの生徒が手を挙げる。）

“No, I don’t.” Hands up.　（数名の生徒が手を挙げる。）

Really?　Why not?

（寿司が好きでない生徒の一人に対して）

What's your favorite Japanese food?　（話題を広げる。）

S3: I like *mochi*.

T: Oh, you like *mochi*. I see.

OK, everyone. Now ask your partner, "What's your favorite Japanese food."

（生徒たちがペアで即興の会話をする。）

T: OK. S4, please ask S5.

（全員の前で、S4 と S5 が実際に会話をする。）

ポイント2

単元末に設定した ALT へのインタビュー活動において、「これまでに学んだ表現を活用し、聞きたい情報を引き出したり、円滑に会話を進めたりすることができる」ように段階的に帯活動を行っている。

＜検証授業２の例＞帯活動の設定例（指導案より抜粋）

ア　使用教科書

三省堂 NEW CROWN ENGLISH SERIES 1　Lesson5 "Our New Friend"

イ　単元に該当する指標形式の目標

話すこと（やり取り）	ＡＬＴにインタビューをすることを通して、これまでに学んだ表現を使って、聞きたい情報を引き出したり、円滑に会話を進めたりすることができる。

ウ　指導計画（全 10 時間）

時	学習内容・学習活動　◆研究の視点	評価				
		関	表	理	知	方法
第１時	◆Ｑ＆Ａ活動、30 秒チャット、BINGO（帯活動） **「相づちをうつ」**工夫への取組 ○Yes/No で応えられない疑問文の理解 ○「答え」から「質問文」を考える活動	①	①		①	観察 ワークシート
第２時	◆Ｑ＆Ａ活動、30 秒チャット、BINGO（帯活動） 相手の発言に対して**「聞き返す」**工夫への取組 ○教科書 Get 1 内容理解 聞き取り・読み取り・Ｑ＆Ａ・音読・スキット作り等			①	①	観察
第３時	◆Ｑ＆Ａ活動、40 秒チャット、BINGO（帯活動） 相手の発言を**「確認する」**工夫への取組 ○歴史上の人物について質問し合う活動	①			②	観察

第４時	◆Ｑ＆Ａ活動、40 秒チャット、BINGO（帯活動） 自分の答えに**「もう一言付け加える」**工夫への取組 ○教科書 Get 2 内容理解 聞き取り・読み取り・Ｑ＆Ａ・音読・スキット作りなど			①	①	観察 ワークシート
第５時 （本時）	◆Ｑ＆Ａ活動、50 秒チャット、BINGO（帯活動） 相手の発言に対して**「関連した質問をする」**工夫への取組 ○教科書 Get 3 内容理解 聞き取り・読み取り・Ｑ＆Ａ・音読・スキット作りなど	①			①	観察 ワークシート
第６時	◆Ｑ＆Ａ活動、50 秒チャット、BINGO（帯活動） 自分の発言に**「もう一言付け加える」**工夫への取組 ○学習のまとめ 学習した文構造や語彙の振り返り・音読など			①	① ②	観察 定期考査（後日）
第７時	○ＡＬＴにインタビュー①（目標達成に向けての準備） ・聞き手が必要な情報を聞き取る活動 ・インタビューでの質問をしぼり込む。	①		①	①	観察 ワークシート
第８時	○ＡＬＴにインタビュー②（目標達成に向けての準備） ・インタビューでの質問をしぼり込む。 ・グループで模擬インタビューの練習	①		①		観察
第９時	○ＡＬＴにインタビュー③（目標達成への取組） ・実際に、１人ずつＡＬＴにインタビューを実施		①	①	① ②	インタビューテスト
第 10 時	○ＡＬＴにインタビュー④（目標達成への振り返り） ・インタビューをもとに、「プロフィールカード」作成する活動 ・インタビューの振り返りを行う。 （内容面・言語面・態度面）	①	①			観察

(2)　文法指導の指導手順とポイント

手順１　導入

＜ポイント＞

○実生活に即した題材等を用いて、生徒とやり取りをしながら導入する。

○文脈を参考にしながら、文の意味を推測し、文構造の特徴に気付かせる。

＜検証授業１の例＞

３年生　現在完了形（経験用法）の指導で

T:　Today, I have some beautiful pictures. Look at this.

（天の川の写真を見せる。）What's this?

SS:　天の川！

T: Yes.　How do you say 天の川 in English?

S1: Star river?

T: That's a good guess.　It looks like a river, but it's not "the Star River." It's called "the Milky Way."

SS: へえー。

T: Now, I have a question.

Did you ever see the Milky Way before? （既習表現を使って話題を推測させる。）

Yes?　No?

"Yes, I did."（数名の生徒が手を挙げる。）

"No, I didn't."（残りの生徒が手を挙げる。）

T: （見たことがある生徒に対して）Where did you see it?

S2: In *Karuizawa*.

T: Really?　I have seen the Milky Way in *Karuizawa*, too!

Now, how about this? （オーロラの写真を見せる。）

Have you ever seen the aurora before?（話題を理解したところで、新出表現を使う。）

"Yes, I have seen the aurora before."（誰も手を挙げない。）

"No, I have never seen the aurora before."（全員が手を挙げる。）

Can we see the aurora in Tokyo?

S2: No, we can't.

（流れ星、虹、ダイアモンドダストなどの写真を見せ、同じようなやり取りを繰り返した後で）

T: OK, everyone. What are we talking about?　What is today's topic?

Please talk with your partner.

Check the meaning and the form of the sentences.

（生徒は、今使った文の伝える内容や、文構造の特徴をペアで考える。）

手順２　本時の目標・学習内容・展開の確認

「英語で何ができるようになるか」を意識させることで、学習に見通しと目的意識をもたせ、学習意欲を向上させる。また、本時で学習する表現が、単元の目標（単元に該当する指標形式の目標）を達成するために活用できることを確認する。

＜単元のゴールに対応した活動例＞

(1)　１年生

文法項目	場面・目的・状況・題材	言語使用例
三人称単数 現在形	ALT を紹介しよう	This is David. He likes curry. He plays baseball.

(2)　２年生

文法項目	場面・目的・状況・題材	言語使用例
過去形	春休みのことを伝えよう	I went to Karuizawa during spring vacation. I bought some post cards there. They were beautiful.

(3)　３年生

文法項目	場面・目的・状況・題材	言語使用例
現在完了形 （継続用法）	スポーツ選手のプロフィールを紹介しよう	We call him King Kazu. Kazu has played soccer for 44years. He has played it since he was 6 years old.

手順３　口頭練習

新出の文構造に慣れることを目的とし、練習を行う。

＜ポイント＞

○文字による学習の前に、音声による学習を行う。(→111 ページ導入例)

○単なるパターンプラクティス（入れ替え練習）にならないように、発話する文を自己選択し、即興で簡単な自己表現を行う機会となるよう工夫する。

○ペアで伝え合う対話形式（話し手がいれば聞き手がいるという現実的な設定）にする。

○練習の途中で、生徒の発話を拾い上げ、教師と生徒が実際にスモールトークを行い、その文法項目が使われている実際のコミュニケーションのモデルや会話の発展例を示す。

例）自己表現の要素を含めた口頭練習の例

【一般動詞の指導で】　スポーツの名前を示し、それぞれのスポーツについて、I play … または I don't play … の形で自分のことを相手に伝える。

【助動詞 can の指導で】　play tennis, play the piano, speak Chinese などのフレーズを示し、それぞれの事柄について、I can … または I can't …の形で自分のことを相手に伝える。

【過去形の指導で】　go to school, watch TV, cook dinner などのフレーズを示し、それぞれの事柄について、Did you …?の形で、ペアで質問し、答える。

手順４　アクティビティー等の言語活動の実施

新出の文構造の習得をねらいとし、生徒が互いに考えや気持ちなどを英語で伝え合う対話的な言語活動を設定する。(→115 ページ⑥の過程)

＜ポイント＞

○ワークシート等の原稿などを読み上げるだけの活動ではなく、即興的な発話を促す要素を含める（相手の発言に相づちを打つ、コメントを言う、もう１文付け足して返答する、質問を更に重ねるなどの工夫)。

手順５　まとめ

学習したことを内在化させるためのまとめの活動を行う。(→116 ページ⑦の過程)

＜ポイント＞

○「話したことを書く」というような技能統合型の活動につなげると、定着が期待できる。

○音声により学習した知識や技能を文法事項として概念化することで､深い学びにつなげる。

ポイント3

教員が実生活に即した親しみやすい題材･素材を用いてインタラクションを行うことにより、生徒が文脈を参考にしながら、新出言語材料の意味を推測し、文構造の特徴に気付き、実際に対話の中で使用しながら新出の文構造等を習得する。

＜検証授業１の例＞文法指導の手順例（指導案より抜粋）

ア　使用教科書

学校図書 TOTAL ENGLISH 3　Lesson3 “E-mails from Alaska and India”

イ　単元に該当する指標形式の目標

話すこと（やり取り）	これまでに学んだ表現を使って、ＡＬＴにインタビューし、日常的な話題について、不自然な沈黙なしに、２分間会話を続けることができる。

ウ　本時（全 12 時間中の第５時）

(ｱ)　本時の目標

a 学んだ表現を用いて、積極的に言語活動に参加し、コミュニケーションを図ろうとしている。

b 現在完了形を使って、自分の経験について伝えたり、相手の経験についてたずねたり、応答したりすることができる。

c 現在完了形の文構造や意味、経験用法でよく使われる語句の意味を理解している。

(ｲ)　本時の展開

過程・時間	学習内容・学習活動	◇指導上の留意点　◆研究の視点	評価
① Greetings (1 min.)	○英語で挨拶する。		
② Warm-Up Song (4 min.)	○英語の歌詞を確認しながら歌を聴く。	◇歌えそうな箇所は、歌詞を見ながら歌わせる。 ◇既習の表現が歌詞の中で使われ	

		ている歌を選び、オーセンティックな言語使用例に触れる機会とする。	
③ 帯活動 模擬インタビュー （10 min.）	○ペアでインタビューを行う。 ○Sharing Time ○Reflection Time （自分が使えた表現や、ペアの相手から学んだ表現を記録し、言語活動の振り返りを、周りの生徒とシェアする） →P 109 参照	◆単元の最後の活動に向け、既習事項を繰り返し使わせる。 ◆他の生徒とのコミュニケーションを通して、自分のインタビューの内容を改善させたり、表現を増やしたりさせる。 ◆別のペアのインタビュー内容を知ることで、さらに改善を図らせる。	
④ 新出言語材 （現在完了/経験用法） 導入 （8 min.）	**○教員とのやり取りを通し、文脈を参考にしながら、新出言語材料の意味を推測し、文構造の特徴に気付く。** ○本時の目標・学習内容・流れの確認を確認する。 **現在完了形を使って自分の経験を伝えたり、相手の経験を尋ねたりすることができる。**	◇写真を使用したり、簡単な英語を使って、生徒とやり取りをしたりしながら、新出言語材料を導入する。 ◇新出言語材料の意味や文構造は、教師から説明するのではなく、生徒に気付かせるようにする。 ◇学習内容は板書で明示する。 ◇ワークシートを使って、今日のゴールを確認させるとともに、それに至るまでの学習の流れを確認させる。本時の最後の姿を意識させることで、学習に見通しと目的意識をもたせ、学習意欲を高めさせる。 ◇本時で学習する表現が、単元のゴールを達成するために活用できることを確認する。	
⑤ Oral Practice （10 min.）	○モニターに映し出された写真を参考に、自分の経験を“I have…”または“I have never…”のかたちで、パートナーに伝える。	◇新出の文構造に慣れることをねらいとする。 ◇写真を使って視覚的な補助を与える。 ◇解答を選択肢の中から選択できるようにし、簡単な自己表現の機会とする。 ◇ペアで伝え合う形式をとることで、発話の機会を増やす。	
⑥ Activity （Interview Bingo） （10 min.）	○活動の説明を聞く。 ○ペアで語句を確認する。 ○“Have you ever…?” の形で、できるだけたくさんの生徒に経験をたずねる。	◇ゲーム的要素を用いて、楽しめる内容にする。 ◇一部の表現を自分で選択できるようにすることで、主体的な学習を促す。 ◇活動で使う語句は、活動の前にペアで確認する時間を取る。	ア② イ① （観察）

		◇モデルダイアローグを基に、自分たちで会話を広げさせる。	
⑦ Writing (5 min.)	○本時に学習した言語材料を使って、ＡＬＴへのインタビューで、自分が聞いてみたい内容を英文で書く。	◆本時の学習内容を、単元に該当する指標形式の目標に結び付ける。 ◇書いた英文をペアでシェアしたり、発表したりさせる。	エ①（ワークシート）
⑧ 自己評価 (1 min.)	○本時のゴールの達成度を自己評価する。		
⑨ Closing (1 min.)	○宿題の指示と次回の予告 ○英語で挨拶する。		

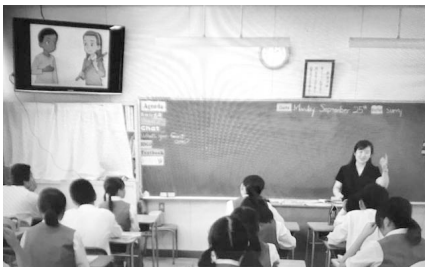
(1)　教科書本文の指導手順とポイント

手順１　導入・内容理解・新出単語練習

既習の表現や簡単な語句を使用しながら、生徒とのやり取りを通して本文の内容を理解させる。ピクチャーカードや写真等の視覚教材を使用すると、生徒の理解を助けることができる。

＜検証授業２の例＞

１年生の指導で



T:　Today's situation is after school.　After school?

S:　放課後

T:　Yes, "after school".　After school, Raj is talking with...　Who is Raj talking with?　（視覚教材を指さす。）

S:　Emma.

T:　Yes.　Raj is talking with Emma.　After school, they are talking.　So, Emma has something in her hand.　What is that?　（視覚教材を指さす。）　Try to guess what it is?

S:　フルート！

T:　Yes, she has a flute.　Do you know this musical instrument?　Why does she have it?

S:　Music... Play...　演奏する　music club...

T:　OK.　She is in the music club and she plays the flute.　That's why she has a flute in her hand.　She is in the music club and she practices the flute.

S:　Every day!

T: So, today, we are going to listen to the dialog. We try to catch the two listening points.

No1 “When does she practice the flute?”

No2 “Where does she practice the flute?”

Are you ready? Listen.

＜ 教科書の音声 ＞

T: Do you know the answers?

手順２ 音読

＜ポイント＞

〇ペアでの音読練習を取り入れることで、学び合う姿勢を身に付けさせる。

手順３ 言語活動

教科書の本文を活用して、言語活動を行う。活動の内容は、即興的な発話を伴う自己表現が含まれるものとする。

例）即興的な発話を伴う自己表現が含まれる活動例

【スキット作成】

教科書の本文を参考に、自分たちのオリジナルスキットを作成する。内容は自分や相手に関連した現実感のあるものとする。

【暗唱からのピクチャー・ディスクライビングやリテリング】

教科書の暗唱ののち、ピクチャーカードを活用しながら、リテリングを行う。その際に、自分の考えなどをコメントとして挿入したりする。

【チャット】

本文の題材や内容についてのチャットを行う。

【ミニスピーチ】

本文の題材や内容についてのミニスピーチを行う。

ポイント4

第１時から第６時に扱った関係代名詞を含む文を、続く USE Read5 を活用して定着させていく。教師が単元末に設定した、プレゼンテーションのゴールイメージを USE Read5 のオーラル・イントロダクションの場面で見せる。

＜検証授業３の例＞教科書本文の指導例（学習指導案より抜粋）

３年生 関係代名詞の指導で

ア 使用教科書

三省堂 NEW CROWN ENGLISH SERIES ３ Lesson5“Places to Go, Things to Do ”

イ　単元に該当する指標形式の目標

話すこと （発表）	関係代名詞を含む文を使って、行きたい場所について、聞き手に伝わるようにプレゼンテーション(発表)することができる。

時	学習内容・学習活動　◆研究の視点	評価				
		関	表	理	知	方法
第７時 (本時)	◆Q&A 活動 英語で質問しよう、３ヒントクイズ（帯活動） 自分の発言に「もう一言付け加える」工夫への取組 ○USE Read5 の内容理解（大筋をつかむ）		①		①	観察 ワークシート
第８時	◆Q&A 活動 英語で質問しよう、３ヒントクイズ（帯活動） ○USE Read5 の内容理解（詳細な内容をつかむ）		①		①	観察 ワークシート
第９時	○プレゼンテーション（目標達成への取組） ・プレゼンテーションの練習をする。		①		①	観察
第 10 時	○プレゼンテーション（目標達成への取組） ・実際に、1 人ずつプレゼンテーションをする。		①	①	① ②	スピーキングテスト
第 11 時	○プレゼンテーション（目標達成への振り返り） ・プレゼンテーションの振り返りを行う。 （内容面・言語面・態度面）	①	①			観察

ウ　本時（全 11 時間中の第 7 時）

(ｱ)　本時の目標

関係代名詞を含む文等を聞いたり読んだりして､その内容を理解することができる。

(ｲ)　本時の展開

過程・時間	学習内容・学習活動	◇指導上の留意点　◆研究の視点	評価
① Greetings (1 min.)	○英語で挨拶をする		
② Warm-Up (3 min.)	○教師から生徒へ 3 hints quiz	◇既習事項を使って教師が生徒とやり取りを行う。	
③ 帯活動 (6 min.) Q&A 活動 2分のチャット	○ペアでＱ＆Ａを行う。 英語で質問しようを見ながらペアでやり取りをする。 ○生徒同士で「修学旅行」で行ったところ及び外国人にインタビューしたことについて、相手の言葉	◆既習事項を繰り返し使わせる。 ◆自分の発言に対して「もう一言付け加える」ことに気を付けて取り組ませる。	

	に反応して２分間会話を続けることを目標にやり取りする。 ○Sharing Time （自分が使えた表現やペアの相手から学んだ表現、また今後使いたい表現等を記録する。） ○Reflection Time （今日の振り返りを、クラス全体でシェアする。）	◆他の生徒とのコミュニケーションを通して、自分の発話の内容を改善させたり、表現を増やしたりさせる。 ◆別のペアのチャットの内容を知ることで、更に改善を図らせる。	
④ Today's Goal **健が行きたい場所について内容の大筋をつかむことができる。**	○今日の学習内容・ゴール・流れを確認する。	◇学習内容は板書で明示する。 ◇学習の流れを確認させ、「英語で何ができるようになるか」を意識させることで、学習に見通しと目的意識をもたせ、学習意欲を高めさせる。	
⑤ 教科書本文の導入 （7 min.）	○教員とのやり取りを通し、文脈を参考にしながら、本文の意味を推測し、内容を捉える。	**◇デジタル教科書、パワーポイント、写真を使用し、既習事項を生かし、簡単な英語を使って、生徒とやり取りをしながら、本文を導入する。** ◇生徒がつまずいているようであれば、ヒントとなる単語を伝え発話を促す。	
⑥ 本文の内容理解 （15 min.）	○ワークシートを使って、４人グループで本文の内容を理解する。（内容の大筋をつかむ。） ・英問英答（ワークシート）	◆グループでの活動（対話的な学習）を通して、学びを深めさせる。	ウ① （観察）
⑦ Writing （10 min.）	○本時に学習した言語材料を使って、自分が行きたい国について英文を３文書く。	◆本時の学習内容を、最終目標であるプレゼンテーションにつなげられるよう自分の内容で英文を書く。 ◇書いた英文をペアでシェアしたり、発表したりさせる。	ア① イ① （観察）
⑧ 自己の振り返り （5 min.）	○本時の授業を振り返る。 ○自分が本時の授業の中で、一番大切だと思った英語表現を個々に主体的に選択させ、その表現を活用できるようワークシートに書き留める。		
⑨ Closing （3 min.）	○宿題の指示と次回の予告		

Ⅳ　研究のまとめ

１　成果

教師が単元最後に「英語で何ができるようになるか」を生徒に伝えるとともに、目標達成の図られる単元構成を考え授業を行うことで、生徒は学習の見通しをもって、毎授業の帯活動等即興性を高めるための言語活動を意欲的に行うことができた。その結果、検証授業２の単元学習後の意識調査では、９割以上の生徒が「目標達成を意識して、最後まで授業に取り組むことができた」と答え、８割以上の生徒が「授業で学んだ新しい表現を使うことができた」と答えており、自己の学びを肯定的に評価できた生徒が多く見られた。

また、指導の実践においては、授業の中で具体的なコミュニケーションのモデルを教師が示し、その場ですぐにそれを真似て実践練習をさせたことが有効だった。小刻みにくり返し生徒に英語で表現活動をさせ、コミュニケーションの成功体験を実感させることができ、生徒からは「疑問に思ったことをすぐ質問したり、再確認したりすることができた」という声とともに、恐れることなくコミュニケーションに取り組もうとする姿勢が見られた。検証授業１を含む単元を終えた際に、ＡＬＴから「ひとつの話題を広げていく非常に自然な会話のスタイルができている」との評価を得た。

活動の後に学んだことを振り返る時間 Sharing Time や Reflection Time を設定したことが効果的だった。ペア・グループ活動を通して、自分の発表の内容を改善したり、英語表現の幅を広げたりすることができたと実感した生徒が検証授業１では全体の約９割にのぼり、「友達と使った表現をシェアし合ったりすることで、たくさんの表現を身に付けられた」などの意見が出た。話す活動を徹底して行うことで、書く力の伸長も見られた。いずれの検証授業を含む単元後の定期テストでも、以前に比べ間違いを恐れずに書こうとする姿勢が見られた。書く分量も多く、正答率も高かった。

２　課題

教師自身の意識改革が求められる。「目の前の生徒はどのような実態なのか」、「彼らに何をできるようにさせたいのか」をよく考え、明確で具体的なゴールを設定し、これを達成するためにバックワードデザインで単元の指導計画を作成する必要がある。このように目的意識と見通しをはっきりともった指導を継続して行うためには、教師側のしっかりとした意識と綿密な準備が必要である。また、全体のバランスを考慮して授業構成していくことも大切である。「発信力」ばかりを追い求め、アウトプットばかりをさせてもうまくいかない。大切なのは、十分なインプットを行った上で、アウトプットさせることである。教師と生徒との十分なインタラクションを授業の中に取り入れ、会話モデルの提示や文構造等のインプットを行うとともに、生徒同士、教師と生徒での十分なアウトプットの時間をとる必要がある。

生徒の即興で話す力という点においては帯活動や授業内で繰り返し言語活動を行うこと等を通して、生徒の流暢さが高まり、一定の成果があったと言えるが、同時に正確性を追究していくことが必要である。全体での振り返り等を通して、生徒の発信する意欲を大切にしながら教師が意図的・計画的に生徒の間違いを直していくなど、今後即興性とともに正確性を追究していく必要がある。

中学校道徳研究開発委員会

目　次

Ⅰ　研究の目的・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122

Ⅱ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・122

Ⅲ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・124

Ⅳ　研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140

〈中学校道徳研究開発委員会〉

研究主題

「人間としてよりよく生きるための判断力が広がる授業の工夫」

研究の概要

平成 27 年３月､学校教育法施行規則の一部を改正する省令及び学習指導要領の一部改正に関する告示が公示された。これにより、これまでの「道徳の時間」が「特別の教科である道徳」（以下「道徳科」とする。）と改められた。この改正により、道徳教育の抜本的改善・充実について、具体的な取組やその方向性が示された。

道徳の教科化に当たっては、具体的なポイントとして、「検定教科書を導入」、「内容について、いじめの問題への対応の充実や発達の段階をより一層踏まえた体系的なものに改善」、「問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れ、指導方法を工夫」、「数値による評価ではなく、児童・生徒の道徳性に係る成長の様子を把握」といった点が示された。

人は一人では生きることができず、周りの人たちに支えられて生きている。このことから本研究の主題には「人」ではなく、「自分と他者」という意味を含めた「人間」という表現を使用した。また、道徳科の目標にある「人間としての生き方についての考えを深める」、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」の詳細の中にある「“主体的な判断に基づく、よりよく生きていこうとする道徳的実践”」や「“道徳性とは、人間としてよりよく生きようとする人格的特性”」等の文言に着目し、主題を「人間としてよりよく生きるための判断力が広がる授業の工夫」と設定し、多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深めることができる授業の工夫について研究を進めた。

Ⅰ　研究の目的

道徳の教科化は､「各教科等に比べて軽視されがち」､「資料の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導」､「分かりきったことを言わせたり書かせたりする授業」といった道徳の時間の課題を改善することを意図している｡(平成 25 年 12 月　道徳教育の充実に関する懇談会「今後の道徳教育の改善・充実方策について」(報告)) よって本委員会では、答えが一つではない道徳的な課題を生徒一人一人が自分自身の問題として捉え、生徒達が今後出会うであろう諸問題に対して“よりよい判断”ができるよう多面的・多角的な視点から考え、議論する検証授業を通して判断力が広がるような授業を研究・開発することとした。

Ⅱ　研究の方法

１　仮説

生徒たちは日常生活の中で、様々な道徳的価値に対面し、どのように解決するかを自ら思い悩み、時には他者と協働しながら対応していく。中学生になると、生徒たちは視野が広まり公共的な問題も道徳的問題として受け止めるようになる。このような実情を踏まえ、道徳科は「自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育活動」(「中学校新学習指導要領解説特別の教科道徳編」) とされている。

本研究では、「考え、議論する」ことを通して、道徳的問題を「自分のこととして」考えられるようになることを目指した。生徒の実態や発達の段階、教材の特質に応じた指導の充実を図る中で、生徒が自分とは異なる考えや意見と向かい合い、議論することで物事を一面的に捉えるのではなく、自らが道徳的価値の理解を基に、様々な視点から物事を理解し、主体的、能動的、協働的に望ましい行動を判断・選択できる「道徳的判断力」を育てることができるだろうと考えた。

２　教材選定

(1)　『「３．１１」外国人から見た日本』（対象：第１学年）

「日本から学ぶ 10 のこと」（『東京都教育委員会「特別の教科　道徳」移行措置対応　東京都道徳教育教材集』）

生徒の中に幼い日の記憶として残っていると考えられる「３．１１」東日本大震災を教材にして、日本人が避難所などでとった行動の理由を多面的・多角的に考えさせる。本教材では、彼らの行動が先人が形成してきた我が国の伝統や文化の証であり、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚について再考できる内容となっている。本教材を通じて、生徒の「道徳的判断力」を育てたいと考えた。

(2)　「卒業文集最後の二行」（文部科学省「私たちの道徳」）（対象:第２，３学年）

新学習指導要領では、「善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしない」といったことが生徒たちは十分に育っていないのではないかと指摘されている。いじめられている生徒に寄り添うとともに、一方では、してよいことと、悪いことを適切に判断し、望ましい行動を選択できる生徒の育成が急がれる。

次の資料は「平成 27 年度　全国学力・学習状況調査」児童・生徒質問紙調査の集計結果（中学校）の抜粋である。

「人の気持ちが分かる人間になりたいと思いますか」、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」のいずれの質問についても、「そう思う」、「少し思う」が 90%を超えており、ほとんどの生徒は、「いじめはよくない」と理解していることが分かる。しかし、「いじめ」はいけないことだと頭の中では分かっていても、また自分の身近にいじめではないかと思われる行為があったとしても、そのことについて深く考えることが今までになく、どのように対応すればよいか判断ができない場合があるため、そのような態度がいじめの解決を妨げてしまうということが考えられる。

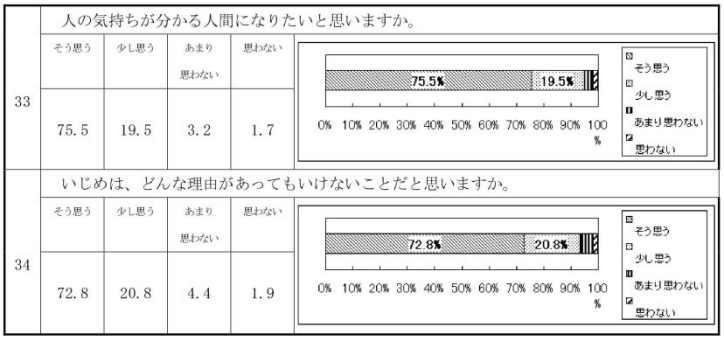


図１（平成 27 年度　全国学力・学習状況調査）

このことを踏まえ、本教材を通じて、いじめを「受けている人」、「いじめをしている人」だけの問題ではなく、「傍観している人」も含め、生徒一人一人が自分の内面と真摯に向き合い、その本質的な解決を図るとともに、他者の痛みを当事者意識をもって考え、共感できる豊かな判断力を育てたいと考えた。

Ⅲ　研究の内容

実践事例１－１

(1)　主題名　内容項目Ｃ　「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」

優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めること。

(2)　教材名　　『「３．１１」外国人から見た日本』

本教材の主人公である「私」は近所の人が挨拶をしないことから日本に嫌気がさしてしまい、「いっそのこと海外に住んでみようか」と考える。そんなとき、何気なく付けたテレビで「東日本大震災においてとった人々の行動」について外国人が「バスを待つ間パニックを起こさず並んでいた」ことなど、「日本人のとった行動の素晴らしさ」について語っているのを聞く。さらに、後日「世界一幸せな国」と言われるブータン国王が、来日時に国会で「東日本大震災について」、演説（※後述資料１「演説の概要」）をするのを聞き、「私」は涙を流し、日本人としての自覚を感じる。

教材の後半は、ベトナム警察官の体験談（被災者への配給をしているとき、寒さに震えている少年に夕食のパックを渡したが、少年はパックを戻し再び列に並んだことなど）が載っているが、今回の授業では他の資料を使用するため実践事例１－１及び、１－２ともに補助資料として後から配付するのみとした。

「３・１１」の東日本大震災でとった人々の行動の理由を多面的・多角的に考えさせ、それらを通して先人たちと対話し、新たな伝統や文化を形成してきたことを踏まえることができる。また、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚に関する内容であり、我が国の一員としての自覚と責任について再考できる教材である。

本文は６ページにわたり書かれているが、本授業（実践事例１－１）ではブータン国王の国会での演説を範読するとともに、終末で考えたことや感じたことを書き終わったところで「『特別の教科　道徳』移行措置対応　東京都道徳教育教材集」の 20 ページに掲載されている「日本から学ぶ 10 のこと」を配付、黙読させることで本時に考えたこと」を、更に深める資料として扱う。

(3)　ねらいとする道徳的価値について

中学校の段階では、入学して間もない時期には、日本の国土や歴史に対する理解が深まり、伝統と文化に対しても一層関心をもつようになる。学年が上がるにつれて、我が国固有の優れた伝統と文化などの価値を継承し新たな文化を創造していこうとする態度、国を愛する心と国家の発展に寄与しようとする態度を育成することが大切となる。

そのために、小学校における指導内容を更に発展させ、「我が国の伝統と文化の尊重、国を愛する態度」について、日本人としての帰属意識を再考するとともに、新しい文化の創造と社会の発展に貢献しうる能力を一層重視する。

さらに、人間が既に伝統や文化の中に身を置いて生きており、また身をもってそれらを理解する働きを通して、日本人としての自覚をもって国を愛し、国家及び社会の形成者として、その発展に努めることができるような道徳的判断力を広げる。

(4)　指導と評価の工夫

ア　導入及び資料提示の工夫

紙面にして配ると生徒が字を追うことに集中してしまう場合がある。また、発問の度に答えを文面から読み取ろうと、再度読み直すこともある。これでは、いつまでも読み物中心の道徳の授業から脱却できないと考え、内容をできるかぎり要約し伝えることで、聴きながら内容を押さえる指導をしている。

イ　多面的・多角的な視点で話合いができるようになるための発問の工夫

教師が４人程度で構成されたグループで議論しているところに行き、生徒一人一人の考えを深めさせる机間指導をしていく。また、教師とあるグループとのやり取りを全体に示すことで、他のグループにおける議論も深めていく。

ウ　計画的に生徒の判断力を広げるための工夫

具体的な行動の例を示したいと考え、東日本大震災の際に見られた日本のよさについて教師が新聞やインターネット等で調べた事例を資料として用いた。

エ　評価の工夫

生徒が将来出会うであろうそのときに向けて思いや願い、行動していこうという決意が芽生え、その後の生活に変化があったか学期末（授業後２か月後）にアンケートをとることにした。

(5)　指導過程　　○教員の発問等　▼生徒の活動　◆予想される生徒の発言等

	主な学習活動	指導上の留意点
導入 10分	・ブータン国王の国会演説時の写真を掲示する。 ○この人はある国の国王です。どこの国の国王でしょうか。 ◆・タイ王国　・ネパール連邦民主共和国 ・マレーシア　・インド　・ブータン ○ブータンの国王です。 ・資料１　ブータン国王の国会での演説の概要を紹介する。 ○「震災後ブータンの国王が来日して国会で日本国民はすばらしいと冒頭で述べていました。今日はこの日本のすばらしい『よさ』について考えていきましょう。」	・ブータンの国王の写真を掲示する。 ・数人の予想を発表させる。 ・後半の授業の時間を確保するため、記入させない。 ・ブータンは、「世界一幸せな国」と紹介されることの多い国であることを補足する。 ・教師が範読する。読み物中心の道徳の授業から脱却したいため資料は配らない。
	・資料２　東日本大震災の際に見られた日本のよさについて、教師が新聞やインターネット等で調べた事例を紹介する。	・教師が読み上げて紹介する。資料は配らない。 ・具体的な行動の例を想起させるために、何点か写真で紹介

展開 30分	○発問１　「今の事例の中でどんな『日本のよさ』に気付いたのかワークシートに書いてみましょう。」 ◆・バスの行列にパニックを起こさず静かに並んでいる。 ・満員のバスで無理に割り込もうとしなかった。 ・周りの人の気持ちも考えて行動できる。 ・助け合うことが当たり前だと思っている。 ・マナーがよい。 ・思いやりがある。	する。 ・ワークシートを配付する。 ・多くの内容を引き出す。
	◎発問２　「今、紹介した人たちは、なぜこのような行動をとることができたのでしょうか。」 ◆・自分のことだけではなく、全体のことを考えているから。 ・避難訓練などで非常時の心構えを習ってきているから。 ・子供の頃からしつけられてきているから。 ・みんなで助け合うのが当たり前だから。 ▼個人で考え、グループで共有する。	・行動の真意について考えさせるために、行動の背景を考えさせる。
	▼グループで共有したところで、一つのグループに発表させ、その真意を導き出す。	・各グループ内での発表 ・例えば「なぜ、○○なのですか。」などと質問し、その考えの真意に近付けさせる。
終末 10分	○「『日本のよさ』について感じ、考え、これからの自分の在り方、引き継いでいきたいことなどを考えることはできましたか。この時間で感じたこと、深まったことを書いてください。」 資料３（「日本から学ぶ 10 のこと」）を配付 ◆・「思いやり」を大切にする、ルールを守るなどを家や学校で教わっている。 ・学んでいることには意味がある。「よいこと」は日本の伝統として伝えていく。 ・日本のよさをとても感じた時間だった。 ・自分の周りではこのようなことは少ないと思っていたけれど結構多いものだ。	・資料３を黙読させ、感想を記入させる。 ・机間指導して、時間があれば発表させたい。

学期末	○「２学期の生活の中で日本のよさについて更に気付いたことは何かありましたか。また、日本のよさを失わないために意識して生活してきたことは何ですか。」	・学期末に、振り返りの時間（アンケート）を実施する。

評価

・日本のよさ、引き継いでいきたいことについての記入や発言がある。

・人の意見に傾聴し、よりよく生きるための選択肢を増やそうとする様子が見られる。

(6)　授業記録（発問に対する生徒の反応）

発問２　今、紹介した人たちはなぜこのような行動をとることができたのでしょうか。

○　日ごろから周りの人への気配りや､他人を気遣うことが素晴らしいことだと経験してきているから。

○　つらい時こそ復興に向かう日本の強さを周りに感じてほしかったから。

○　私たちは小さい頃から周りの人に支えられて生きてきた。また､周りの人を大切にしながら生活している大人を見て育ってきたから。

○　日ごろからマナーについて考え、ルールを守ることの大切さが分かっていたから。

発問３　この時間で感じたこと、考えたこと、深まったことは何でしたか。

○　日本人の心の素晴らしさを学んだ。今後も日本人であることを誇りに思い､行動していきたいと思った。

○　日本のよさは､つらい時こそ強くたくましくなれるところだと思った。僕はその一員として恥じぬように生活していきたい。

○　改めて日本のよさが分かった。普段の生活の中で考えたことがなかった。

○　日本の人たちは親からの愛や､経験してきたことを通して､このように他人を気遣う気持ちが根付いているのではないかと考えた。もっと日本の過去の出来事を知りたいなと思った。

○　避難訓練や集団下校等、色々と経験しておくことが大切だと思った。

○　人の立場になって考えて行動することが大切だと思った。

○　どうしてこういうことができるのか不思議に思った。自分もこのような行動ができる人になりたい。

学期末（授業後２か月後）に次の質問をした。

２学期の生活の中で日本のよさについて更に気付いたことは何かありましたか。
また、日本のよさを失わないために意識して生活してきたことは何ですか。

○　事故のために乗っていた電車が駅で止まり動かなかった。でも誰も何も言わなかった。

○　コンビニエンスストアに買い物に行くと店員さんが丁寧に接してくれた。

○　お辞儀が多い。車に止まってもらったときにも頭を下げた。

○　何事にも周りの人を優先してきた。

○　周りの人と常に交流し続けた。

(7)　指導と評価の工夫の考察

ア　導入及び資料提示の工夫

内容の要約を範読したことでグループごとの話合いの時間（グループごとに机間指導で揺さぶりをかける時間）を十分とることができたが、資料を配付する時期は考える必要があった。

イ　多面的・多角的な視点で話合いができるようになるための発問の工夫

どの行動をとったのかではなく、どうしてその行動をとったのかという道徳的判断の理由を共有することが大切であると考え、全てのグループでなぜその考えに至ったのか揺さぶりをかけることができた。この机間指導を通して議論の仕方を教えていくこともできた。しかし、教師とあるグループとのやり取りを全体に示したが、ねらいとする掛け合いに至らなかった。

ウ　計画的に発達段階に応じた生徒の判断力を広げるための工夫

具体的な行動の例として､新聞やインターネット等で調べた事例を用いたことにより、当時幼かった生徒も具体的な場面を思い描くことができたようだ。

エ　評価の工夫

生徒が将来出会うであろうそのときに向けて思いや願い、行動していこうという決意が芽生えたか２か月後に再度アンケートをとった。３割の生徒が意識して過ごしていたという結果だった。また、２か月の生活の間に日本のよさを感じた生徒がいた。

実践事例１－２

改訂のポイント　※(1)～(3)は実践事例１－１と同じ

(4)　指導と評価の工夫　※ウ、エは実践事例１－１と同じ

ア　導入及び資料提示の工夫

実践事例１－１では資料を配付しない形で実践したが、内容が音声だけではなく、視覚からも訴えるために「日本のよさ」に関わる部分が入りやすいこと、また、音声だけの情報だけでは分かりにくい生徒がいることを配慮し、資料を配付した。また、話合いの時間を確保するため「ブータン国王の演説」までを配付、範読し、後半は最後の参考資料として配付するのみとした。

イ　多面的・多角的な視点で話合いができるようになるための発問の工夫

話合い活動を円滑に進めるために、生活グループ（５～６名）で実施した。本学級では、入学当初から「グループエクササイズのルール」として「話をしている人を見る」、「否定的な意見は言わない」､「なるほどと思うときには、それが伝わるようにフィードバックをする」などの指導を重ね、グループのリーダーが、毎回司会と発表を務めている。「なぜ、どうして」という部分を、グループのリーダーが切り返すなどし、まだ深く話せる内容のところには教員が「それが、どうしてかを話し合ってみよう」と声掛けをするなど、継続的に話合い活動の指導を重ねている。

(5)　指導過程　　○教員の発問等　▼生徒の活動　◆予想される生徒の発言等

	主な学習活動	指導上の留意点
導入5分	○「日本のよさ」と聞いてどんなことが思い浮かびますか。 ◆・和食　・平和　・水が飲める　など ○では「日本人のよさ」と聞くとどんなことが浮かびますか。	・後半の授業の時間を確保するため、２、３人に簡潔に聞く。 ・回答は聞かない。
展開30分	・資料１を配付する。 ○発問１　「資料を通して気付いた『日本のよさ』について書いてください。」 ・ワークシートを配付する。 ◆・整然と歩いて帰路についた。 ・最悪の状況下で静かな尊厳、自信、規律、心の強さをもって対処した。 ○補助発問　「３・１１のとき、みなさんはいくつでしたか。どう過ごしてしていましたか。」 ◆・こわかった。 ・大変なことに気付いてなかった。 ・幼稚園に友達の親が迎えに来てくれた。など ・資料２を提示する。 ◎発問２　「今までの資料を通して『どうしてこのような行動ができたのか』考えてみましょう。」 →個人で考え、グループで共有し、議論する。 ◆・助け合うのは当たり前だから。 ・日本人は思いやりの心があるから。 ○補助発問　「人はみんな生まれたときから『困っている人を助ける』、『他人を思いやる』が当たり前にできるのでしょうか。」 ◆・親、またその親、先祖代々に教えられてきた。 ・戦争や辛い歴史の中で学んできた。 ・「思いやり」は日本の文化として発展してきた。 ▼各グループの発表のあと、話合いの中で「なるほど」と思ったことを発表する。	・教師が範読する。 ・最初に考えたことから、「改めて資料を通して気付いたこと、知ったこと」を書くように伝える。 ・幼かった、また、東京にいなかった、などの生徒もいるので、当時の状況を振り返る。 ・３・１１の当日、また、その直後の状況を知る。 ・各グループ内で考えの共有 ・「どうしてできるのか」を深めるように指示をする。 ・人は「生まれながら皆思いやりの心をもっている」のではなく、「そう育てられてきた」という背景を考えさせる。 ・グループでまとめられた意見の他に「なるほど」と思ったことがあったら、発表させる。

終末 15分	○補助発問（時間があれば実施）　「３．１１の時、幼かった自分が今、又は今後、このような状況にあったときできること、また、したいと思うことはありますか。」 ○発問３　「この時間を通して改めて気付いたこと、感じたこと、深まったことを書いてください。」	・時間がある場合には考えさせ、発表させる。時間がなければ、感想を書くときに「できること」も考えてみようと、付け加える。 ・感想を記入させる。 ・書き終わった生徒が出てきたら資料３を配付する。
学期末	○　「日本のよさについて気付いたことはありますか。」	・学期末に、振り返りの時間（アンケート）を実施する。

評価　実践事例１－１と同じ

(6)　授業記録（発問に対する生徒の反応）　発問２までは実践事例１－１と同様

補助発問　３・１１のとき、幼かった自分が今、又は今後、このような状況にあったときできること、また、したいと思うことはありますか。

○　小さい子供の面倒を見てあげたり、重い荷物を運んだり、自分たちの年代にしかできないことをしっかりやっていきたい。

○　自分には力仕事はできないので、不安になっている人たちを励ましたり、笑顔にしてあげたりできるような存在になりたい。

○　人の話をよく聞いて、まだ伝わっていない人たちに教えられたらいいと思う。

○　自分は体力に自信があるので、動けない人、高齢者、けが人、妊娠している人を支えたり、荷物を運んだりして役に立ちたい。

発問３　この時間を通して改めて気付いたこと感じたこと、深まったことを書いてください。

○　この授業を通して、日本人の良いところがたくさん見付かりました。日本は地震が多い国だから、また大きな地震があったとき、私達ができることを少しでも多くしたいです。日本人が思いやりをもてる理由など、話合いをしてみんなの意見を聴き、深く考えることができました。

○　日本人の助け合う心、周りのことを考えられる力が震災からの復興につながった。あの時はまだ小さくて何も分からなかったけれど、今振り返ると震災からの復興は、ただ時が過ぎたからではなく、助け合う、協力する日本国民のよさがつながっていたことが分かり、改めて素晴らしいと思った。この日本のよさを受け継ぎ、日本の一生のものにしたいと思った。

○　この時間を通して改めて「日本のよさ」、「日本人の心」などを知ることができました。日本にはたくさんのいいところがあるので、日本に生まれてきて良かったと思いました。これからも「日本人の心」を大切にしていきたいと思います。また、外国からも尊敬される日本になれるよう自分自身もこれから努力していきたいと思います。

○　「なぜ当たり前のことができるのか」、「なぜマナーを守れるのか」などについて話し合い、

とても難しかったけれど、みんなで意見を出し合って考えを深めることはとても楽しかったです。他の班の意見に耳を傾け、全員が真剣に日本のよいところについて考えていたのでよかったと思いました。

○　日本の素晴らしいところを次の世代にも引き継いでいく必要があると思った。

(7)　指導と評価の工夫の考察

ア　導入及び資料提示の工夫

授業の最初に「日本のよさ」というキーワードを出したため、授業を通して「日本のよさ」について考えることができた（ねらいにせまることができた)。

また、資料を配付することにより、日本人の「文化、伝統及び価値観にしっかりと根付いた資質（ブータン国王の演説より)」というような「よさ」が生徒達に分かりやすかった。

イ　多面的・多角的な視点で話合いができるようになるための発問の工夫

「グループエクササイズのルール（教室に掲示)」が年度当初より確認してあること、グループのリーダーが意見を集約して発表することなど、「話合い活動から発表へ」の流れがスムーズだった。また、リーダーの発表がすばらしかった。

また、話合い活動の前半は、意見の交換が中心だったが、途中でいったん話合い活動を止め、「当たり前にできたのがどうして当たり前なのか」の「どうして」を深めてほしいと伝えたところ、話合い（議論）が活発になった。教師の一言（一押し）が重要であると感じた。（今回は第１学年で実施したが）第３学年になる頃には、グループのリーダーがこの役割をできるようになるとよい。

ウ　計画的に発達の段階に応じた生徒の判断力を広げるための工夫

補助発問の「今の自分だったらできること」は、ややねらいから離れる部分もあるが、「判断力を広げる」という意味では有効である。

エ　評価の工夫　（実践事例１－１と同じ）

資料１　ブータン国王の国会での演説の概要

皆さま、日本および日本国民は素晴らしい資質を示されました。他の国であれば国家を打ち砕き、無秩序、大混乱、そして悲嘆をもたらしたであろう事態に、日本国民の皆様は最悪の状況下でさえ静かな尊厳、自信、規律、心の強さを持って対処されました。文化、伝統および価値にしっかりと根付いたこのような卓越した資質の組み合わせは、我々の現代の世界で見いだすことはほぼ不可能です。全ての国がそうありたいと切望しますが、これは日本人特有の特性であり、不可分の要素です。このような価値観や資質が、昨日生まれたものではなく、何世紀もの歴史から生まれてきたものなのです。それは数年数十年で失われることはありません。そうした力を備えた日本には、非常にすばらしい未来が待っていることでしょう。

資料２　東日本大震災の際に見られた事例（新聞やインターネットより）

○　渋滞した交差点での出来事

一回の青信号で１台しか前に進めないような状況だったけど、誰もが譲り合い、穏やかに運転している姿に感動した。複雑な交差点で交通が５分以上動かないシーンもあったけど、10時間の間お礼以外のクラクションの音を耳にしなかった。

○　支払い

アルバイト中に地震があってほぼ満席の状態から、お客さんに外に避難してもらった。「支払いしてもらえないだろうな」と思っていたほとんどのお客さんが戻ってきて会計してくれた。ほんの少しの戻られなかったお客さんは、今日わざわざ店に足を運んでくださった。

○　外国の人から見た日本人

震災の時の反応。物が散乱しているスーパーマーケットで、落ちているものを律儀に拾い、そして列に黙って並んでお金を払って買い物をする。また、運転再開した電車で混んでるのに妊婦に席を譲るお年寄り。この光景を見て海外の人が絶句したそうだ。

○　声を掛けること

昨日、近所のお兄ちゃんに感動した。家に一人で居たらしく、震災後すぐ自転車で飛び出し近所をひと回り。「大丈夫ですか。」と道路に逃げてきた人達にひたすら声を掛けていた。あの時間には高齢者や母子しか居なかったから、声掛けてくれただけでもホッとした。

○　ホームにて

地下鉄は、非常に混雑していた。ホームにも、改札の外にも、電車を待つあふれんばかりの人。でも、誰一人列を崩さず、通路を開け、係員の誘導に従っていた。ロープがあるわけでもないのに、通る人のための通路スペースができていた。

○　母の言葉

亡くなった母が言っていた言葉を思い出す。「人は奪い合えば足りないが分け合うと余る。」被災地でこのことが実践されていた。日本を誇りに思います。頑張ってください。

資料３　世界銀行副総裁だった西水美恵子さんに届いたメール

（『東京都教育委員会「特別の教科　道徳」移行措置対応　東京都道徳教育教材集』）より抜粋

平成 23 年 3 月 11 日午後２時 46 分、世界銀行副総裁だった西水美恵子さんに元部下からの国際電話があった。出張で東京に来ていて震災に遭ったという。大津波警報を伴う巨大地震が起きたことを知らせてくれた。「ミエコの国の人たちは素晴らしい……強い余震が来るなかで……みんなまわりの人を思いやって……まわりの人を思いやって……助け合っている……こんな民族が住む国がこの世にあったなんて……信じられない……」ワシントンに戻った部下から西水さんのもとに次のような１通のメールが転送されてきた。

１　平静　　悲痛に胸を打つ姿や悲嘆に取り乱す姿など見当たらない。悲しみそのものが気高い。

２　威厳　　水や食料を得るためにあるのは、秩序正しい行列のみ。乱暴な言葉や、不作法な動作など、一つとしてない。

3 能力　例えば、驚くべき建築家たち。ビルは揺れたが、崩れなかった。

4 品格　人々は、皆が何かを買えるようにと、自分に必要なものだけを買った。

5 秩序　店舗では、略奪が起こらない。路上では、追い越し車も警笛を鳴らす車もない。思慮分別のみがある。

6 犠牲　50 人の作業員が、原子炉に海水をかけるためにとどまった。彼らに報いることなどできようか？

7 優しさ　レストランは、値を下げる。無警備のＡＴＭ〔現金自動受払機〕は、そのまま。強者は弱者を介助する。

8 訓練　大人も子どもも、すべての人が、何をすべきかを知っていた。そして、すべきことをした。

9 報道　崇高な節度を保つ速報。愚かな記者やキャスターなどいない。平静なルポのみがある。

10 良心　停電になったとき、レジに並んでいた人々は、品物を棚に戻して静かに店を出た。

ワークシート（例）

月　日（　）　時間目

「３・１１」外国人から見た日本

1　どのような「日本のよさ」に気付きましたか。

2　今、紹介した人たちは、なぜこのような行動をとることができたのでしょうか。

自分の考え

友達の考え

3　この時間で感じたこと、深まったこと

今日の授業を振り返って　　1年　組　番 氏名

今日の授業	とても思う	まあまあ思う	あまり思わない	思わない
自分自身を振り返ることができましたか				
人の意見や考えを聞き、自分の考えを深めることができましたか				
自分のこれからの生き方に生かそうと思いましたか				

実践事例２－１

(1)　主題名　内容項目Ｃ「公正、公平、社会正義」

正義と公平さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努める。

(2)　教材名　「卒業文集最後の二行」（文部科学省『私たちの道徳』）

この読み物教材は、筆者の子供のころの体験を 47 歳になってから書いた作品である。

Ｔ子は幼くして母を亡くし、弟たちの母親代わりを務めていた。筆者は六年生のとき、先頭に立ってＴ子をいじめた。ある日、漢字の小テストで、Ｔ子の答案用紙をカンニングしてしまう。その結果、筆者は満点を取り最高得点者になる。しかし、カンニングをしなければＴ子が最高得点者になるところだった。筆者は自分の不正行為を棚に上げ、友人と共にＴ子がカンニングしたとはやし立てる。自分のやっていることが罪だと認識しながらも、Ｔ子を責めている人間の醜さと弱さが取り上げられている。

Ｔ子への罪悪感を実感しつつも、筆者は謝罪することもなく卒業式を迎えてしまう。その日の夜、筆者は配付された「卒業文集」を読み、衝撃を受ける。Ｔ子の作文の、最後の二行の言葉からＴ子の深い悲しみと苦しみを知り、深く反省するのである。三十年以上の歳月が経っても、筆者の心から離れない懺悔（ざんげ）の念から、人間らしく生きることの意義を考えさせ、いじめや差別、偏見を断固として許さないという道徳的判断力や態度につなげ、正義感を培うことのできる資料である。

(3)　ねらいとする道徳的価値について

人は生まれながらにして、誰もが自由・平等に幸福を追求する権利をもっている。しかし、現実には差別や偏見が存在し、様々な人権侵害が起こっている。中学生の時期に人間としての生き方について考え、自己を見つめ、向上を図るなど自己の生き方に関する思考を深めることは重要なことである。よりよい社会を実現するためには、自他の不正や不公平を許さない断固とした姿勢と、力を合わせて積極的に差別や偏見をなくそうとする姿勢が求められる。本主題を基に、今後、差別や偏見に関する問題が起きたときに、自己の正義感を奮い立たせ、公正公平を重んじるよりよい社会の実現に向かうための道徳的判断力を育てたい。

(4)　指導と評価の工夫

ア　導入の工夫

対象が中学校第３学年であることから、今後取り組む「卒業文集」の内容を考えさせるようにした。生徒は、行事や部活動など、自分にとって成長できたエピソードや楽しい印象をもった日々の思い出をテーマに選ぶ傾向にある。その後、「卒業文集」という題材では予想しないであろう教材の内容を知ることで、教材に引き込ませ、今回の主題に迫る姿勢を養わせるようにした。

イ　展開の工夫

「なぜ悪いと分かっているのに、いじめは起きるのか」、「いじめを無くすために何ができるだろうか」という発問に対し、まず自己との対話で意見を整理させる。その後、グループで意見を交流し議論につなげる。発表より議論の時間を重視することで、一人

一人が多面的・多角的な価値をより確実に捉えられるようにした。

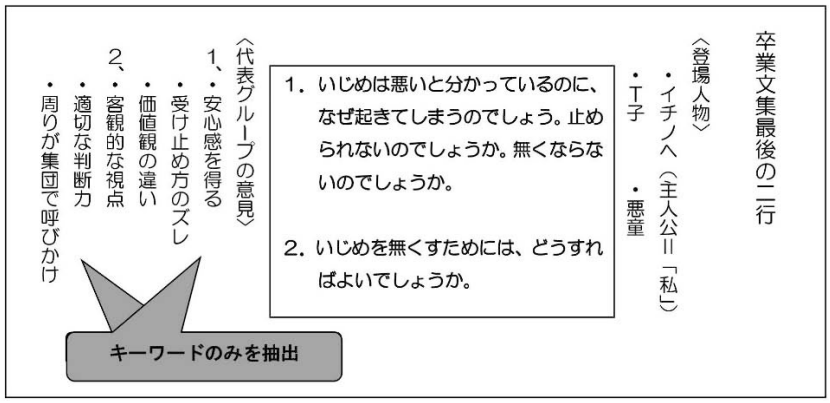
ウ　終末の工夫

終末で「いじめた側」である筆者、そして「いじめられた側」がその後どのように感じているか、それぞれの意見を理解させるようにした。考え方の相違を理解することで、現在もしくは今後の自分が直面するであろう道徳的諸問題に対して、よりよく生きるための道徳的判断をする術を習得させるようにした。

エ　評価の工夫

いじめがいかにむごく悲惨なものであるかを改めて理解した上で、今後、自分がいじめに直面したときに毅然とした意識でどのような行動をとるのかを、ワークシートに記入させる。その中で道徳的判断力の広がりを確認できるようにした。

板書計画



ワークシート（両面）

＜表＞

卒業文集最後の二行　3年　組　番【　　】

あなたの意見

1、

2、

議論や発表の中で、あなたが「なるほど」と思った意見

＜裏＞

本日の授業で感じたこと、考えたこと

自己評価　※授業を振り返り、記入しましょう

右の当てはまる項目に○をつけましょう	とても思う	まあまあ思う	あまり思わない	思わない
1、自分自身を振り返ることができましたか。				
2、人の意見や考えを聞き、自分の考えを深めることができましたか。				
3、自分のこれからの生き方に生かそうと思いましたか。				

(5)　指導過程　　○教員の発問等　▼生徒の活動　◆予想される生徒の発言等

	主な学習活動	指導上の留意点
導入 3 分	○「三学期に、卒業文集の作成に入ります。皆さんはどんなことを文章にしようと思いますか。」 ◆修学旅行、部活動、体育祭、仲間との思い出… →楽しい、自分にとって大切な思い出だから。	・数名の生徒を指名し、自由に発言させる。その際、理由も含めて深く考えさせたい。
展開 12 分	▼本時の読み物教材の範読を聞く。 ▼主人公と、いじめられた人の確認。 ◆主人公　→　「イチノへ」（私＝筆者） いじめられた　→　Ｔ子 ○「あなたが、いじめられる『Ｔ子』の立場だったらどのように感じるか、考えてみましょう。」 ◆もう、学校に行きたくない。 ◆自分はいなくてもよい存在なのではないか。	・和やかな導入の雰囲気から、真剣な雰囲気に引き込んでいくように留意する。 ・Ｔ子の痛みや心情を共感的に受容し、想像させることを通して、いじめの残酷さと非情さを感じ取らせる。
3 分	○「あなたが、卒業文集最後の二行を読んだ後の『イチノへ』の立場だったらどのように感じるか、考えてみましょう。」 ◆何というひどい仕打ちをしてしまったのだ。 ◆謝って許されることではないが、謝りたい。	・Ｔ子の心の痛みを痛感し、心ない行為を猛省する主人公の気持ちを捉えさせる。
個人 5 分 集団で議論 10 分	・ここでワークシートを配付する。 ▼自分の意見を考え、グループで議論させる。 ◎「１．いじめは悪いと分かっているのに、なぜ起きてしまうのでしょう。止められないのでしょうか。無くならないのでしょうか。」 「２．いじめを無くすためには、どうすればよいでしょうか。」 ▼自分の意見・考えを整理（個人） →　議論（集団で意見・考えの共有） ▼議論を通して、多様な意見・考えと出会い、自分の意見・考えを振り返る。	・個人で考える時間、グループで議論する時間をそれぞれ十分に確保する。 ・グループのリーダーを中心に５～６名で議論させる。

6 分	◆人をからかったりすると優越感に浸れるから。 ◆人それぞれ受け止め方にずれがあるから、いじめは無くせない。 ◆日々生活をしながらお互いを理解していく中で、関わり方をそれぞれに合った形に変えることで、いじめは無くすことができると思う。 ◆一人一人が成長し、大人になる。 ▼代表して１～２グループに議論した内容を発表させる。	・意見をまとめるのではなく、自分と他者の意見の交流によって、新しい発見に出会うことが大切だと理解させる。 ・考えを深めさせるために、自分が共感した意見をワークシートに記入する。
終末 6 分 5 分	○「その後、『イチノへ』はどのような行動をしたと思いますか。」 ◆後悔し続けた。 ◆「Ｔ子」に謝りに行った。 ▼筆者「イチノへ」のその後を知る。 ▼教師の体験談を話す。 【案】いじめられた側の視点に立った資料（官公庁発行資料等）の活用 ▼ワークシートに授業全体の感想を記入し、自己評価させる。	・30年間も「Ｔ子」に謝ることができない筆者「イチノへ」の気持ちを感じ取らせる。 ・いじめられた側にとって、過去の記憶は忘れ去りたいものであり、だからこそいじめは取返しのつかないものだということを捉えさせる。 ・「いじめはなかなかなくせないものではあるが、なくしていかなければならない」という前提に立って、改めて自分の考えを振り返らせる。

評価

・いじめの愚かさや、誰に対しても公正、公平にすることの大切さを理解できたか。

・誰に対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会を実現していこうとする心情や、道徳的判断力を広げることができたか。

(6)　授業記録

発問に対する生徒の反応

発問１　いじめは悪いと分かっているのに、なぜ起きてしまうのでしょう。止められないのでしょうか。無くならないのでしょうか。

○ 一人一人がいじめられる人の立場を理解し止める勇気をもてば、周りを気にすることが無くなる。

○ 意見の食い違いや性格の違い、人には好き嫌いがあるから、いじめは起きる。もし、止めようとして自分がいじめられるようになると思うと、怖い。

○ そもそも自分が弱いことを隠すために自分よりも弱い人を作り、強いと思い込みたいから、いじめは起きる。自分より弱い者がいることで安心感を得ようとするのかもしれない。

○ 傍観者がいじめを止められる人にならなければ、終わらないと思う。

○ 自分や仲間とは違った性格や趣味、容姿をもつ人を排除しようとしたり、下等なものだとみなしてしまったりする人間心理が働くから。この心理を自制することができない人たちが、いじめを起こす要因となる。自制する力がなければ、いじめは起こり続け、止められない。

発問２　いじめを無くすためには、どうすればよいでしょうか。

○ 相手の悪い部分ではなく、よい部分を見付けていくようにする。

○ 自分自身が今の行動を見直し、もし嫌な思いをさせていると感じたなら勇気を出して謝罪する。一人一人の自覚を高めることが大事だと思う。

○ 一人一人違いがあるのだという前提を理解する。そして、その違いを受け入れる。そうなることが成長なのだと思う。

○ 加害者はいじめだという認識が薄いと思う。だからそれを見ている周りの人たちが、いじめを止められる可能性があるのだと思う。一人ではなく皆で声を上げれば、勇気がわくはずだと思う。

授業全体（終末資料）に対する生徒の反応

○ グループの皆の考えを知ることができて新鮮だった。いじめられた側は、時が経つと恨むよりもその出来事を忘れたいと思うのだと知った。忘れるようになる方が、恨むよりも苦しいのだろうと感じた。

○ グループの皆の意見で新たな発見があり、考え方の幅が広がった。この手紙を出した人は、自分から打ち明けるにも相当な勇気が必要だったと思った。いじめは正直言って無くならないと思う。けれど、皆の心掛け次第で減らせると思う。

○ 結局いじめは、自分より下だと思える人を探してけなすことで、安心感を得ようとする、レベルの低い人間のする行為だと思う。まずは、自分にできることでいじめが減らせればと思う。人間は本当に弱い生き物だ。

○ いじめは、学校だけではなく、大学や職場、ママ友や習い事でなど、どこでも起こるのだと思う。一番にいじめを止められる人は、いじめる人でもいじめられる人でもなく、周りの見ている人だから、私がもしいじめを目撃したときには、「やめなよ」と心の底から言える勇気をもちたいと思う。

(7)　指導と評価の工夫に対する考察

ア　導入の工夫

イメージをもたせるために、実際の卒業文集を提示することも有効であった。また、教材の特質を考えて、１時間の授業を構成する指導の工夫が必要である。

イ　展開の工夫

・提示した発問１の「いじめは止められないのか。無くならないのか。」という部分が生徒の意見として出ることが望ましい。

・思考の整理をするために、発達段階に応じて１、２の中心発問を分けて考えさせるとともに、十分な時間を確保することで、自分の考えをワークシートに表現することができた。

・机間指導を通して議論の進捗状況を確認することで、話し合いが停滞しているグループに対し、教師の補助発問により議論を活性化させることも可能である。

・教材の範読だけで、いじめの残酷さや加害者、被害者の心情は察することができるので、すぐに教材から離れた中心発問の議論に移るとよい。

・結局、具体的な策を出せずに議論が終わってしまった。発表された策に対し、「なぜそう考えたのか」、「どうすればその策が実現できるか」のように教師が返していかなければ、表面的な授業になってしまう。生徒のどの発言を取り上げれば、考えが深まるのかを瞬時に選択する教師の指導力が求められる。

ウ　終末の工夫

教材によるいじめた側の心情理解に偏らず、議論や資料の活用によっていじめられた側の視点でも深く考えさせることができた。

エ　評価の工夫

終末に取り上げた「いじめられた側の視点」の資料に大きく影響され、資料の感想の域を脱しなかった。今後いじめに直面した際の自分の行動を具体的に想像させることができなかった。「いじめはいけないこと」、「いじめは許されない」という前提から、現実における自らの詳細な行動を思考させるまでには至らなかった。

Ⅴ　研究のまとめ

検証授業や、授業後のワークシートの分析をした結果、以下のような成果と課題が明らかになった。

1　成果

・　学期末にとったアンケートでは、日本のよさという視点をもちながら生活することを通して、今まで気付かなかった日本のよさに気付いた生徒がいた。また、授業後の生活で周りとの関わり方が変化したなど判断力に広がりが見られた。

実践事例１－１、１－２

・　実践事例１においては、１回目の検証授業を終え、資料の提示や導入の方法を変えることで、深まり方や授業後の感想に変化が見て取れた。→導入の工夫

実践事例１－２

・　「なぜ、どうして」と追求して考えることで、より多面的・多角的に視野を広げることができるようになっていると感じた。また、議論することで考えが深まり、広がりを感じていることも生徒の感想から得られた。

実践事例１－２

・　議論を通して終末の資料を活用することにより、加害者側の心情だけでなく、被害者側の心情も理解し、多面的・多角的に思考させることができた。また、ワークシートの感想などから、双方の心情の理解から自分のいじめに対する姿勢を再確認し、今後につなげていくことができた。　実践事例２－１

2　課題

・　「議論する道徳」にしていくためには国語科をはじめ、各教科等での指導と連携するなど、十分なカリキュラム・マネジメントを行う必要がある。

実践事例１－１、１－２

・　道徳的問題を更に自分のこととして捉えさせ、心から考えたことを話すように導いていく指導の工夫が必要である。

実践事例１－１、１－２、２－１

・　生徒の考えを深めるために「なぜそう考えたのか」、「どうすればその策が実現できるか」を教師がきり返していく必要がある。また、より効果のあるきり返しを行うために今後も研鑽に努める必要がある。

実践事例２－１

・　「発問の工夫（議論に足る・話したくなる）」を考えていく中で、一人で授業を考えるより複数で考えることが重要であることを感じた。今回の実践事例２においても「いじめがいけない」ということは中学校第３学年にもなっていれば分かる。それを「話したくなる、深めるための議論」にもっていくために「なぜいじめが起きるのか」という原因について考えさせる授業をつくった。ここに至るには、学級をチームとして道徳授業を創り上げていく集団に育てていくということが必要なのではないかと考える。

実践事例２－１

平成 29 年度研究開発委員会（中学校）名簿

中学校国語研究開発委員会

委員長	北区立田端中学校	校長	石川　俊一郎
委員	千代田区立九段中等教育学校	主任教諭	吉永　直美
委員	青梅市立第二中学校	主任教諭	山本　美智代
委員	あきる野市立東中学校	主幹教諭	成井　晴子
［担当］東京都教育庁指導部義務教育指導課 統括指導主事　吉川　泰弘			

中学校社会研究開発委員会

委員長	江東区立深川第四中学校	校長	竹原　眞
委員	港区立高松中学校	主幹教諭	藤田　淳
委員	杉並区立泉南中学校	教諭	長井　利光
委員	江戸川区立小松川第二中学校	主任教諭	中村　豊
委員	西東京市立明保中学校	主幹教諭	西田　知之
［担当］東京都教育庁指導部義務教育指導課 統括指導主事　藤田　修史			

中学校数学研究開発委員会

委員長	葛飾区立奥戸中学校	校長	久我　正次郎
委員	大田区立志茂田中学校	主任教諭	高山　琢磨
委員	中野区立緑野中学校	主任教諭	中里　洋
委員	葛飾区立大道中学校	主任教諭	奥田　倫仁
委員	八王子市立横山中学校	主任教諭	鹿志村　純子
［担当］東京都教育庁指導部義務教育指導課 統括指導主事　浅野　あい子			

中学校理科研究開発委員会

委員長	練馬区立練馬東中学校	校長	山谷　安雄
委員	世田谷区立尾山台中学校	主任教諭	内藤　理恵
委員	板橋区立板橋第三中学校	主任教諭	栗原　允
委員	板橋区立中台中学校	主任教諭	河野　晃
委員	武蔵村山市立第五中学校	主幹教諭	有沼　賢二
［担当］東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事　工藤　和志			

中学校保健体育研究開発委員会

委員長	世田谷区立三宿中学校	校長	牧野　英一
委員	世田谷区立桜丘中学校	教諭	赤羽　淳
委員	練馬区立練馬中学校	主任教諭	新田　由理
委員	西東京市立明保中学校	主幹教諭	喜連　寛武
［担当］東京都教育庁指導部指導企画課 統括指導主事　小野　隆一			

中学校外国語研究開発委員会

委員長	練馬区立大泉中学校	校長	惣田　修一
委員	中野区立第十中学校	主任教諭	井上　智絵
委員	小平市立小平第五中学校	教諭	田所　毅
委員	日野市立日野第一中学校	主任教諭	磯　美智代
委員	福生市立福生第二中学校	指導教諭	寺沢　陽子
［担当］東京都教育庁指導部義務教育指導課 統括指導主事　窪田　香			

中学校道徳研究開発委員会

委員長	豊島区立西池袋中学校	統括校長	江川　登
委員	江東区立深川第五中学校	主幹教諭	松村　麗
委員	世田谷区立東深沢中学校	主任教諭	片山　順平
委員	東久留米市立西中学校	主幹教諭	渡邊　俊雄
委員	羽村市立羽村第一中学校	主任教諭	中川　真
［担当］東京都教職員研修センター研修部教育経営課 統括指導主事　長町　正弘			

平成 29 年度
研究開発委員会指導資料集〔中学校〕

東京都教育委員会印刷物登録
平 成 29 年 度 第 147 号

平成 30 年３月発行

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　　（０３）５３２０―６８４９
印刷会社　　康印刷株式会社